

藤ヶ浜貝塚

海岸施設災害復旧事業に伴う発掘調査報告書

2022

気仙沼市教育委員会

序 文

平成 23 年 3 月 11 日に発生した東北地方太平洋沖地震が引き起こした巨大津波は、沿岸部を中心に甚大な被害をもたらしました。被災家屋約 16,000 棟、非住家建物を含めると 25,000 棟を超える建物が被害に遭い、さらに 1,200 名以上の尊い命が犠牲になりました。

本市では、縄文時代の貝塚や集落跡、中世の城館跡など、181 か所の埋蔵文化財包蔵地が宮城県に登録されています。震災以降、個人住宅の再建をはじめ、高台への集団移転、防潮堤建設、道路整備等の大規模な復旧・復興事業に伴い、埋蔵文化財とのかかわりが急増いたしました。そこで本市においては、復旧・復興事業の円滑な推進と埋蔵文化財の適切な保護との調整を図るため、専門職員の新規採用や再任用、任期付職員の採用を行ったほか、宮城県や他の自治体へ職員派遣および調査支援を要請するなど調査体制を整備し対応してまいりました。

本書は、平成 29 年度から令和元年度にかけて実施した、藤ヶ浜貝塚の海岸施設災害復旧事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書です。この調査では、貝層や住居跡が発見されたほか、縄文時代中期から後期にかけての土器が多数出土し、当地域の歴史を解明するための新たな知見を得ることができました。また、市道復旧部分については、関係機関のご理解により遺跡の保存が図られることになりました。本書が地域の歴史を考える資料として活用され、埋蔵文化財に対するご理解の一助となれば幸甚に存じます。

最後になりましたが、発掘調査から報告書の刊行、また、遺跡の保存に際しては、多くの関係者・関係機関の皆様にご理解、ご協力をいただきました。心より厚く御礼申し上げます。

令和 4 年 1 月

気仙沼市教育委員会
教育長 小山 淳

例　　言

- 1 本書は、平成 29 年度～令和元年度に実施した、海岸施設災害復旧事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果をまとめたものである。
- 2 確認調査および本発掘調査は、宮城県教育委員会の指導のもと、気仙沼市教育委員会が実施した。
- 3 現地発掘作業における記録図面作成及び写真撮影は、調査担当者が行った。
- 4 本書に係る整理・報告書作成作業は、令和 2 ～ 3 年度に実施した。遺構図・遺物実測図トレークス、遺物の拓本・写真撮影を熊谷満、遺物実測・動物遺存体の同定を須藤好直が行った。
- 5 本書は、鈴木實夫・森千可子との協議のもと、第 3 章－ 1 を熊谷、ほかを須藤が執筆し、編集を熊谷・森が行った。
- 6 遺物への注記は、各遺跡の記号を頭に、出土地点・出土層位・出土年月日を記入した。
- 7 遺物注記作業の一部を、令和 2 年度に株式会社イビソクへ業務委託した。
- 8 調査に関する諸記録類及び出土遺物は、全て気仙沼市教育委員会が保管している。
- 9 発掘調査から報告書の作成に至るまで、次の方々や諸機関からご指導・ご協力を賜った。記して感謝する次第である。（五十音順 敬称略）

株式会社アスリード 宮城県教育庁文化財課
気仙沼市（産業部水産基盤整備課〔現 水産課〕）

凡　　例

- 1 本書における遺構略号は以下の通り。
SI：竪穴建物跡 SK：土坑 P：柱穴・ピット SX：焼土遺構・性格不明遺構
- 2 插図の縮尺は、插図ごとに示した。
- 3 調査地点位置図は、国土地理院の提供する基盤地図を用いて作成した。
- 4 平成 14 年 4 月 1 日の測量法の改正に従い、本書の插図には世界測地系（平面直角座標系第 X 系）に基づくグリッドを表示しており、方位標は真北を指す。
- 5 土色は、『新版標準土色帖』（小山・竹原 1996）に倣っている。
- 6 遺物図において、石器のスクリーントーンは磨面の範囲を示している。
- 7 出土遺物観察表の（ ）は復元推定値、〔 〕は残存値を示す。
- 8 調査区内で一部深掘りした部分については、本書では「サブトレ」と略して表記している。
- 9 遺構番号は種別に関わらず、通し番号を付した。

目 次

序 文	
例言・凡例	
目 次	
第 1 章 経緯と経過	1
1. 調査の経緯	1
2. 調査の経過	1
第 2 章 遺跡の概要	2
1. 地理的環境	2
2. 周辺の遺跡	2
第 3 章 発見された遺構と遺物	4
1. 基本層序と検出遺構	4
(1) A地区	4
(2) B地区	11
(3) C地区	15
2. 遺物	17
(1) 繩文土器	17
(2) 土製品	38
(3) 石器	40
(4) 動物遺存体	48
第 4 章 まとめ	52
本書の引用・参考文献一覧	53
報告書抄録	

挿 図 目 次

第 1 図 遺跡位置図	
第 2 図 遺跡範囲図	2
第 3 図 調査区配置図	3
第 4 図 A地区 2019-T 4	4
第 5 図 A地区 2017-T 1～11、2017- 1区・ 2区全体図	5
第 6 図 A地区 2017-T 1～11 堆積土層図	6
第 7 図 A地区 1区	7
第 8 図 A地区 1区 SI 1、SI10	8
第 9 図 A地区 1区 SK 9	9
第 10 図 A地区 2区	10
第 11 図 B地区 全体図 (2017-T12、3区)	11
第 12 図 B 地区 堆積土層図 (2017-T12、 2017- 3区)	12
第 13 図 C 地区 2018-T 1、2018-T 2・3、 2019-T 1～3全体図	13
第 14 図 C 地区 2018-T 2・3、2019-T 1 ～3堆積土層図	14
第 15 図 出土土器 (1)	19
第 16 図 出土土器 (2)	20
第 17 図 出土土器 (3)	21
第 18 図 出土土器 (4)	22
第 19 図 出土土器 (5)	23
第 20 図 出土土器 (6)	24

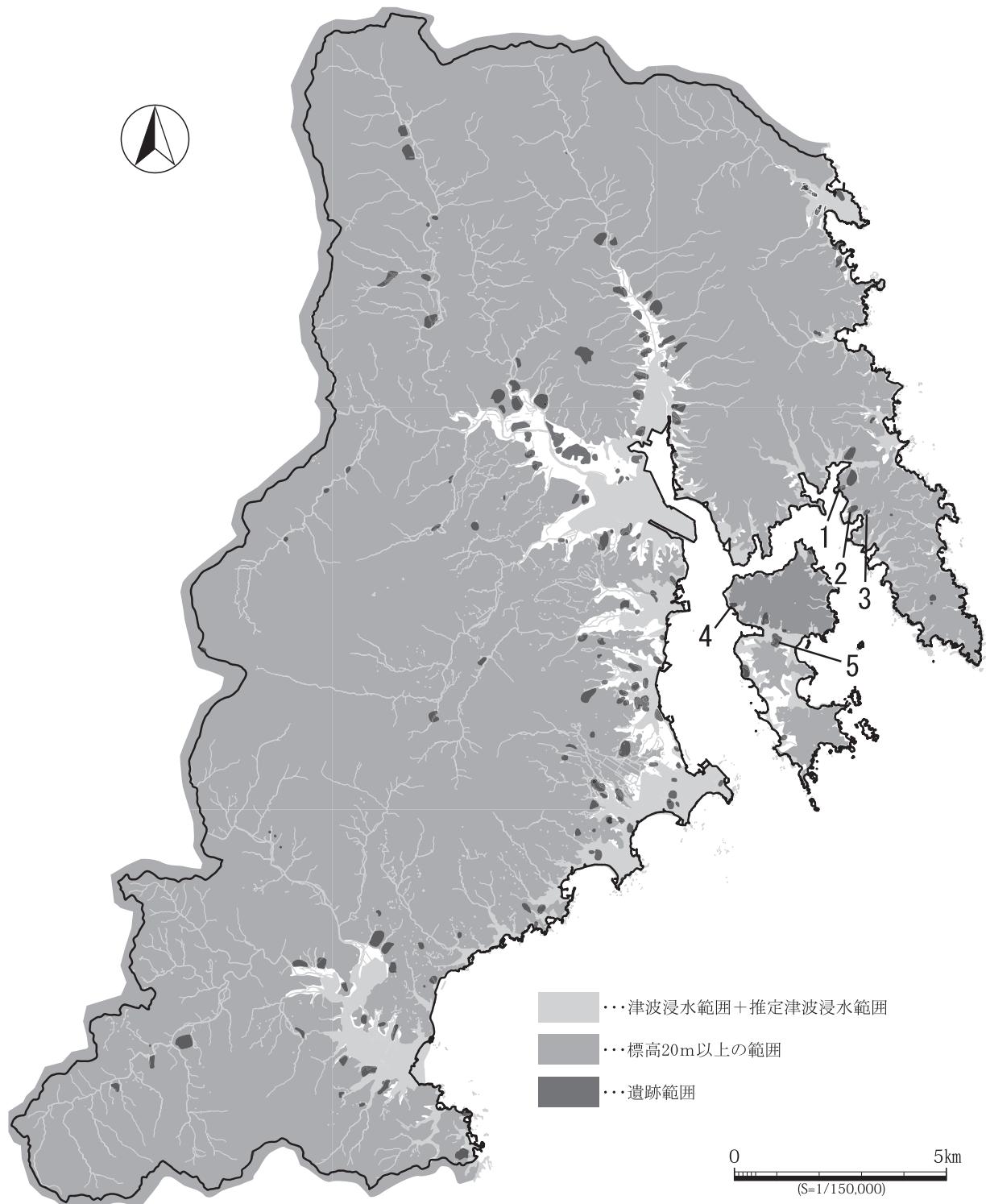
第 21 図 出土土器 (7) ······	25
第 22 図 出土土器 (8) ······	26
第 23 図 出土土器 (9) ······	27
第 24 図 出土土器 (10) ······	28
第 25 図 出土土器 (11) ······	29
第 26 図 出土土器 (12) ······	30
第 27 図 出土土器 (13) ······	31
第 28 図 出土土器 (14) ······	32
第 29 図 出土土器 (15) ······	33
第 30 図 出土土器 (16) ······	34
第 31 図 出土円盤状土製品 ······	38
第 32 図 出土焼粘土塊 ······	38
第 33 図 出土土偶 ······	39
第 34 図 出土石鏃 ······	40
第 35 図 出土打製石斧・板状石器・磨製石斧 ······	40
第 36 図 出土磨石 ······	41
第 37 図 出土敲石・磨敲石 ······	42
第 38 図 出土凹石・石皿・砥石 ······	43
第 39 図 出土台石 (1) ······	44
第 40 図 出土台石 (2)、石製品その他 ······	45

表 目 次

第 1 表 調査体制 ······	1
第 2 表 地区ごとの調査区・トレンチの配置 ······	4
第 3 表 土器・石器出土点数表 ······	16
第 4 表 土器観察表 ······	35
第 5 表 土製品観察表 ······	39
第 6 表 石器出土点数表 ······	40
第 7 表 石器観察表 ······	47
第 8 表 石器石材一覧 ······	48
第 9 表 貝類・フジツボ類・ウニ類集計表 ······	49
第 10 表 魚類集計表 ······	50
第 11 表 爬虫類・鳥類・哺乳類集計表 ······	51
第 12 表 各地点の時期 ······	52

写真図版目次

図 版 1 平成 29 年度確認調査 ······	55
図 版 2 平成 29 年度本発掘調査 1・2 区 ······	56
図 版 3 平成 29 年度本発掘調査 3 区、平成 30 年度・令和元年度確認調査 ······	57
図 版 4 出土土器 1～15 ······	58
図 版 5 出土土器 16～30 ······	59
図 版 6 出土土器 31～43 ······	60
図 版 7 出土土器 44～58 ······	61
図 版 8 出土土器 59～73 ······	62
図 版 9 出土土器 74～88 ······	63
図 版 10 出土土器 89～101 ······	64
図 版 11 出土土器 102～118 ······	65
図 版 12 出土土器 119～132 ······	66
図 版 13 出土土器 133～147 ······	67
図 版 14 出土土器 148～160 ······	68
図 版 15 出土土製品 1～25 ······	69
図 版 16 出土石器 1～16 ······	70
図 版 17 出土石器 17～22 ······	71
図 版 18 出土石器 23～27 ······	72
図 版 19 出土貝類 1～27 ······	73
図 版 20 出土貝類・魚骨 1～21 ······	74
図 版 21 出土鳥獸骨 1～10 ······	75



地図番号	遺跡番号	所在地	遺跡名
1	63001	唐桑町宿浦	藤ヶ浜貝塚
2	63017	唐桑町鮎立	古館貝塚
3	63003	唐桑町鮎立	長浜貝塚
4	59001	磯草	磯草貝塚
5	59019	浦の浜	裏方A貝塚

第1図 遺跡位置図

第1章 経緯と経過

1. 調査の経緯

東日本大震災で被災した宿浦地内の海岸集落の保全及び市道の復旧が、平成27年度に海岸施設災害復旧事業として計画された。この計画は、遺跡範囲内の南西部において、防潮堤の建設と市道を復旧する工事であった。事業担当課である気仙沼市産業部水産基盤整備課〔現 水産課〕と埋蔵文化財の主管課である宮城県教育委員会文化財保護課〔現 文化財課〕、気仙沼市教育委員会生涯学習課との協議を経て、当該工事に伴う確認調査を平成29（2017）年6月5日～6月12日に実施した。さらに、確認調査の結果をもとに本調査を同年9月20日～10月18日に、追加の確認調査を平成30（2018）年8月20日～8月22日と令和元（2019）年6月5日～6月6日、令和2（2020）年2月27日に実施した。

当初計画では、復旧道路は擁壁を建設する構造であったが、追加の確認調査で検出した貝層を保護するために令和元年6月14日に実施した水産基盤整備課と生涯学習課との保存協議をもとに、地下掘削を伴わない現状の道路法面を整備する工法に変更された。

2. 調査の経過

平成29年度（2017）は、確認調査として遺跡の西部に東西トレーニング（T1～6・8～10）と南北トレーニング（T7・11・12）を設定し、一部遺構確認のためT3は南側に、T7は西側に拡張した。T3・4・7～9・11・12において遺物包含層を検出した。工事計画において市道法面掘削範囲となるT7を中心とする範囲に1区、防潮堤基礎掘削範囲となるT2・3を中心とする範囲に2区、同じくT12を中心とする範囲に3区を設定し、本調査を実施した。

平成30年度（2018）は、2区と3区との中間地点の道路際にT1、遺跡南部の東西方向の市道法面北にT2・3を設定し、T2・3で遺物包含層を検出した。令和元年度（2019）には平成30年度T2・3の道路を挟んだ南側にT1～3を設定し、各トレーニングで遺物包含層を検出し、T3の混土貝層を部分的に掘り下げた。

第1表 調査体制

	年度	課長	係長	庶務	調査担当者	資料管理
生涯学習課 文化振興係	平成29	畠山美雪	幡野寛治	目賀多茂	鈴木實夫・森千可子 鈴木志穂・須藤好直	藤本愛
	平成30	熊谷啓三	幡野寛治	加藤成巳	鈴木實夫・石川郁	藤本愛
	令和元	熊谷啓三	幡野寛治	加藤成巳	鈴木實夫・青木昭和・須藤好直	藤本愛

第2章 遺跡の概要

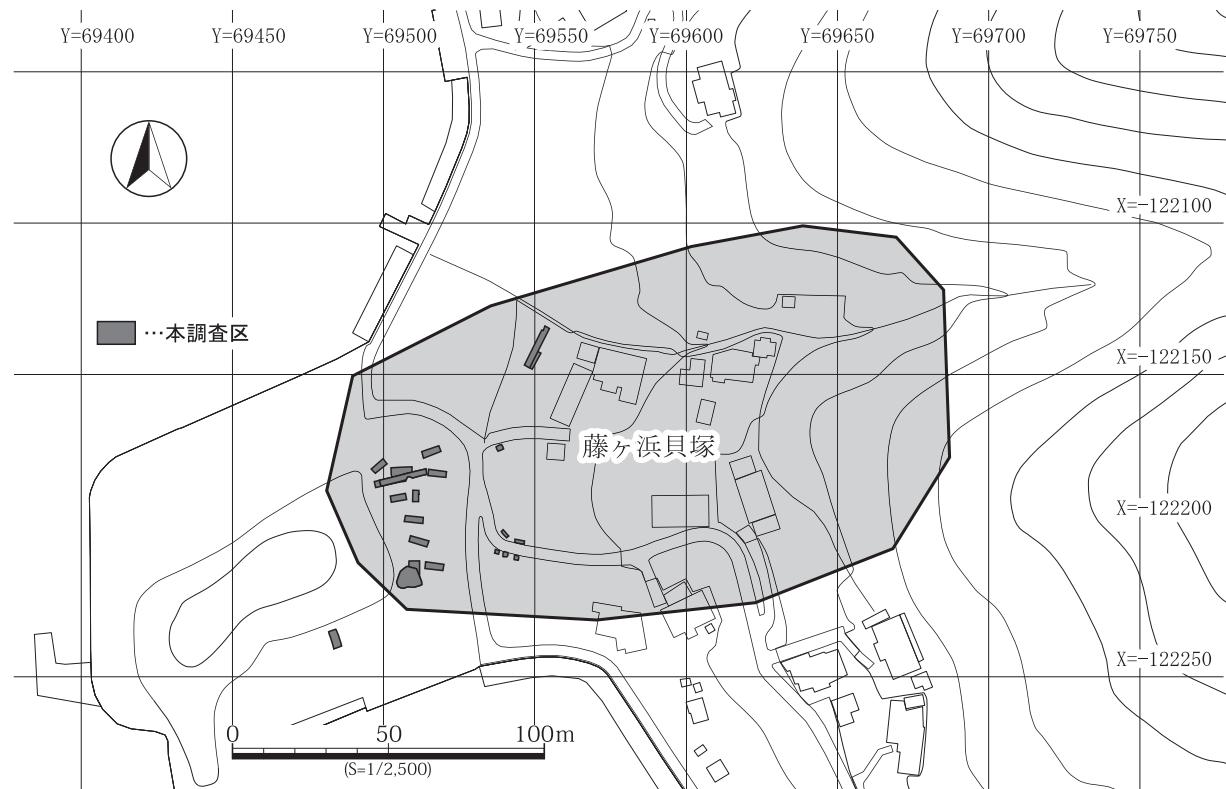
1. 地理的環境

藤ヶ浜貝塚は、宮城県気仙沼市唐桑町宿浦に所在する。気仙沼市は宮城県の東北端に位置し、西は岩手県一関市、北は陸前高田市と接する。東北地方のほぼ中央東部にあたり、太平洋に面する。地形的には、北上山地南部、三陸海岸南部のリアス海岸で、古生代から中生代に形成された粘板岩や石灰岩の岩礁が多い。藤ヶ浜貝塚が所在する唐桑町宿浦は、唐桑半島の基部、半島の北西部に位置し内湾に面する。本遺跡は、早馬山（標高 220.5m）の山塊から内湾にむかって西に延びる丘陵裾から小半島状の鞍部に立地する。調査対象地の地形は、内湾に向かって突き出た小さな半島状の鞍部である。従前の調査によって、遺跡の範囲は東西 120 m、南北 100m、標高 0 ~ 25 mで、南・西・北の 3 か所の縄文時代の貝層が知られている（東北歴史資料館 1989）。遺跡の南は海岸に面し、北には浅い沢が入り込んでいる。遺跡の現況は、畠地や宅地が散在し、遺跡の中央を道路が南北に縦断している。

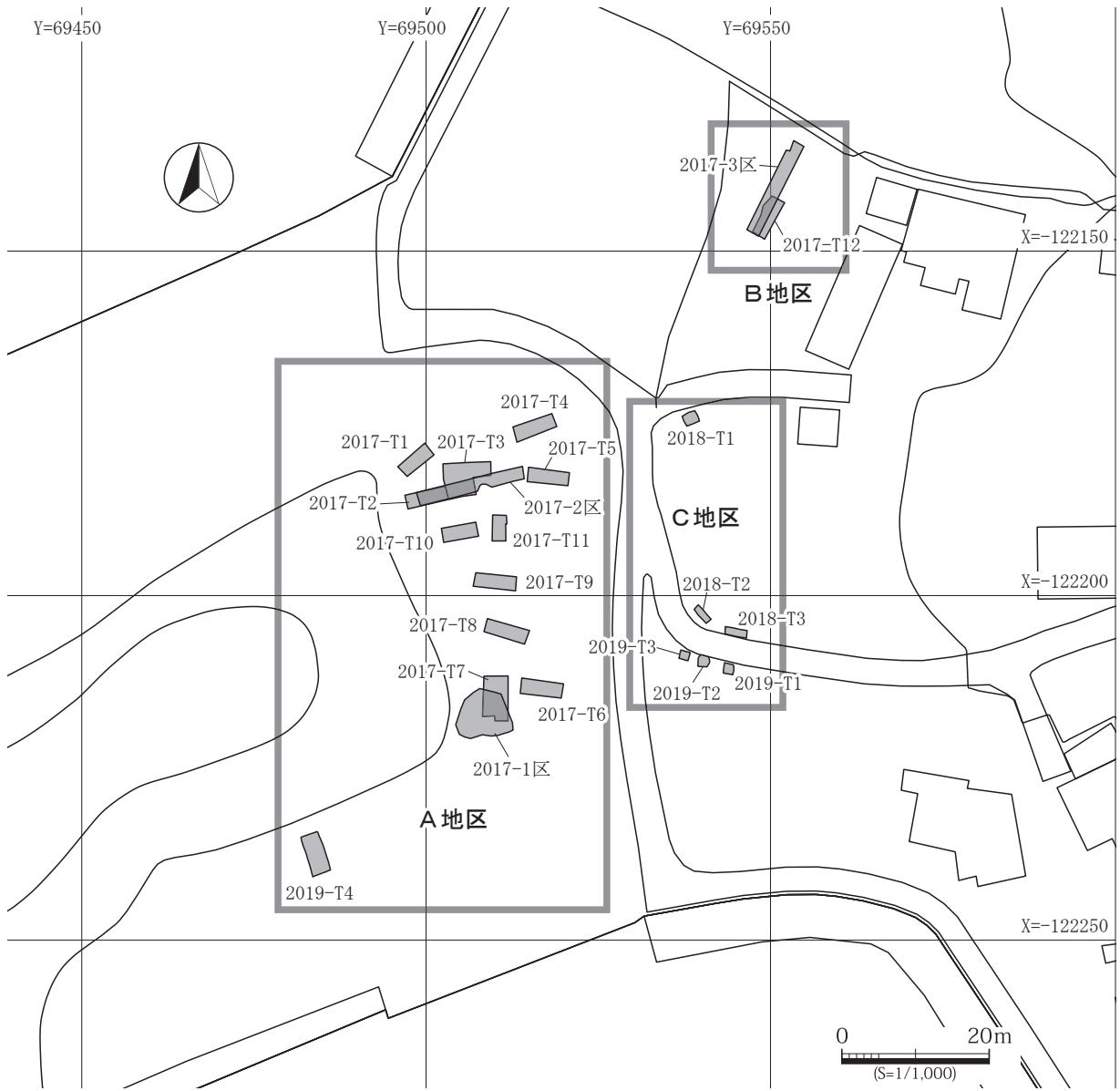
遺跡周辺の海岸線は、護岸工事の建設等によって自然地形を残す範囲が少なくなっている。そのため、岩礁をみることは比較的容易であるのに対して、砂浜は限定的である。ただし、かつては沢地形の延長線上により多くの浜をみることができたと推測できる。

2. 周辺の遺跡（第1図）

藤ヶ浜貝塚（第1図 - 1 地点）が立地する唐桑半島基部及び対岸の大島には、縄文時代から近世にかけての遺跡が散在する。ここでは藤ヶ浜貝塚周辺の縄文時代遺跡について概観する。縄文時代の貝



第2図 遺跡範囲図



第3図 調査区配置図

塚は古館貝塚（第1図-2地点）、長浜貝塚（第1図-3地点）、磯草貝塚（第1図-4地点）、裏方A貝塚（第1図-5地点）、遺物散布地には大日遺跡、只越遺跡、外浜遺跡、葡萄遺跡、浦の浜遺跡、裏方B遺跡等がある。

古館貝塚は中期後葉以降の遺物包含層を掘りこんだ後期前葉のフラスコ状土坑4基から縄文土器や石器が（気仙沼市2017）、中期末から後期初頭頃の遺物包含層から縄文土器、土製品（土版）、石器等が出土している（気仙沼市2018b）。磯草貝塚では、前期末葉から中期前葉に形成された貝層から縄文土器、土製品（土偶）、石器、動物遺存体、骨角器等が出土し、前期初頭から中期中葉頃の遺物包含層を検出した。また、異なる遺物包含層検出面からは前期後半、中期中葉、晩期の縄文土器が出土している（気仙沼市2017）。裏方A貝塚では、早期後半から中期中葉の遺物包含層を検出し、縄文土器、石器、石製品（块状耳飾）等が出土した。（気仙沼市2021）。

第3章 発見された遺構と遺物

1. 基本層序と検出遺構

本項では、平成29年度から令和元年度にかけて実施された確認調査・本発掘調査の成果を併せて説明することとする。広い範囲に調査区が点在する都合上、ある程度の範囲毎に分割して説明を加えるため、便宜的にA～C地区の範囲を設定した（第3図）。各地区に属する調査区・トレンチは第2表の通り。

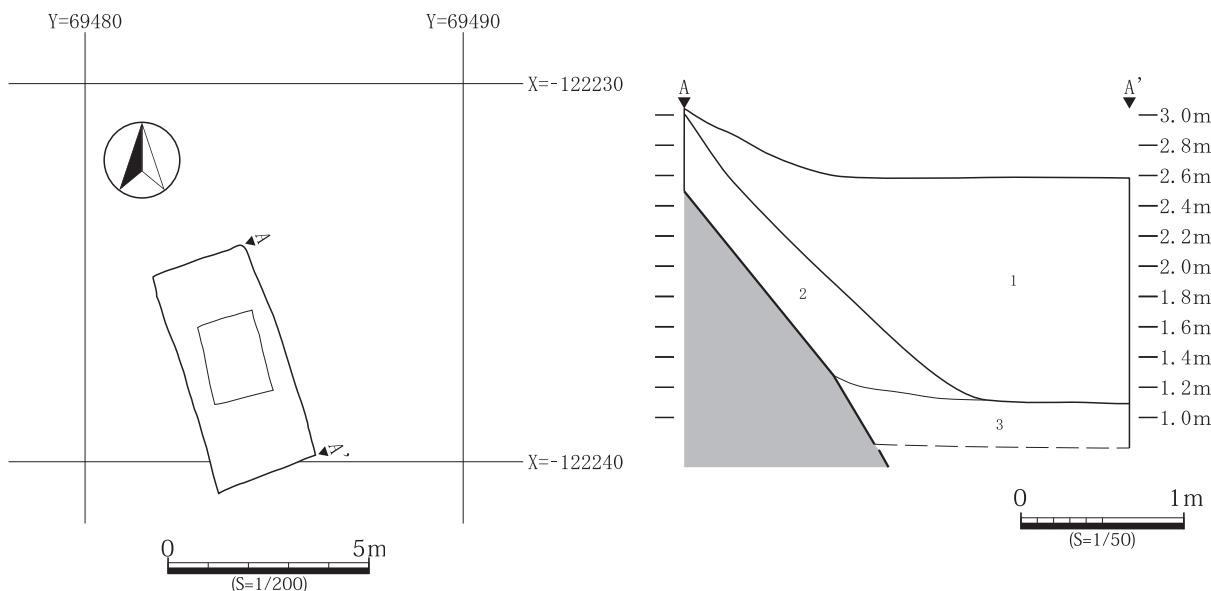
第2表 地区ごとの調査区・トレンチの配置

地区	平成29年度 確認調査	平成29年度 本発掘調査	平成30年度 確認調査	令和元年度 確認調査
A	T 1～11	1・2区	—	T 4
B	T12	3区	—	—
C	—	—	T 1～3	T 1～3

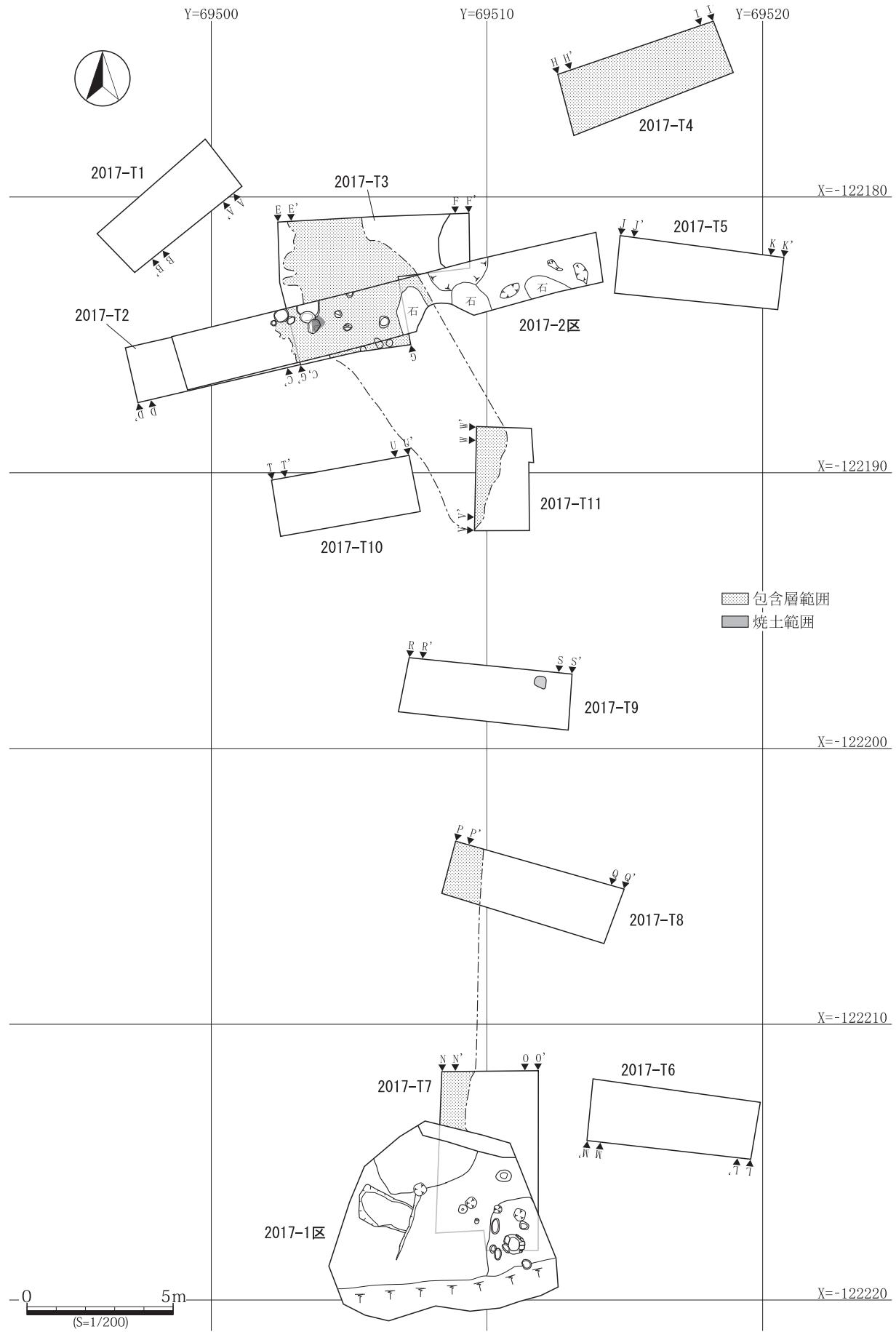
また、確認調査トレンチ名称は、それぞれの調査年度の西暦を頭に付した上で、現地調査時のトレンチ名をそのまま使用し、「2017-T 1」のように表記することとした。平成29年度に実施した本発掘調査の調査区名については、重複する名称がないため、そのまま「1区」「2区」「3区」とする。以下に各地区について説明を加える。

(1) A地区 (2017-T 1～11、1・2区、2019-T 4) (第4～9図)

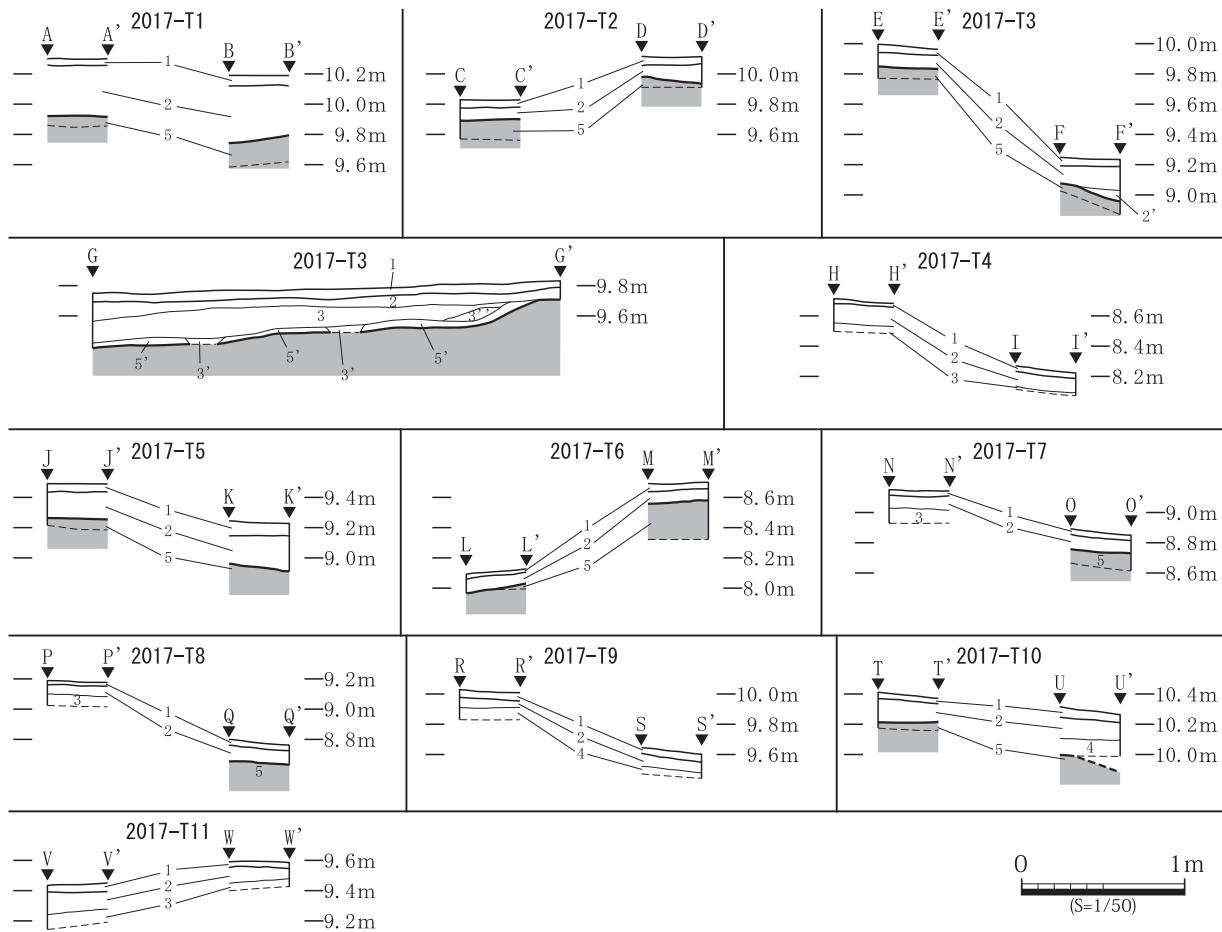
本地区は、全体的に東・南に下る斜面地である。本地区については、第4～9図に示す。平成29年度に2017-T 1～11の11箇所トレンチを設定し、確認調査を実施した。（第5図）いずれのトレンチも、表土層下には現代の耕作土が堆積する状況であった。2017-T 1・2・5・10では耕作土層下が地山であり、近～現代に削平を受けている様子であったが、2017-T 3・4・7～9・11



第4図 A地区 2019-T 4



第5図 A地区 2017-T 1～11、2017- 1区・2区全体図



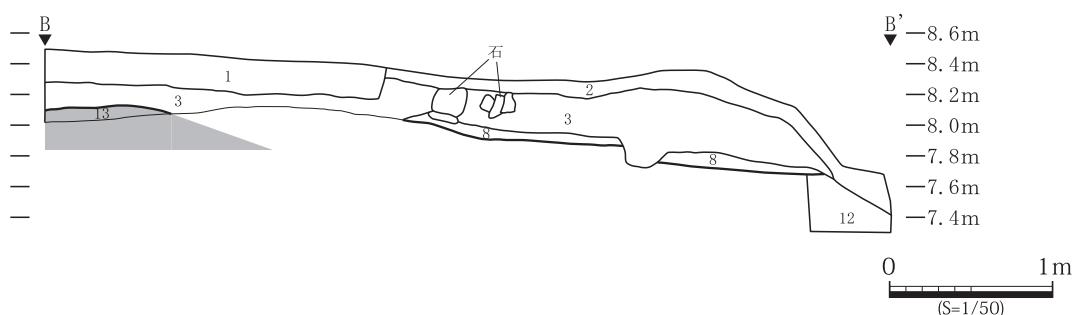
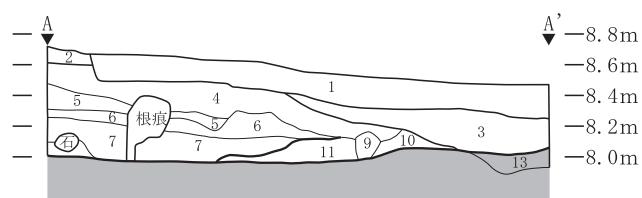
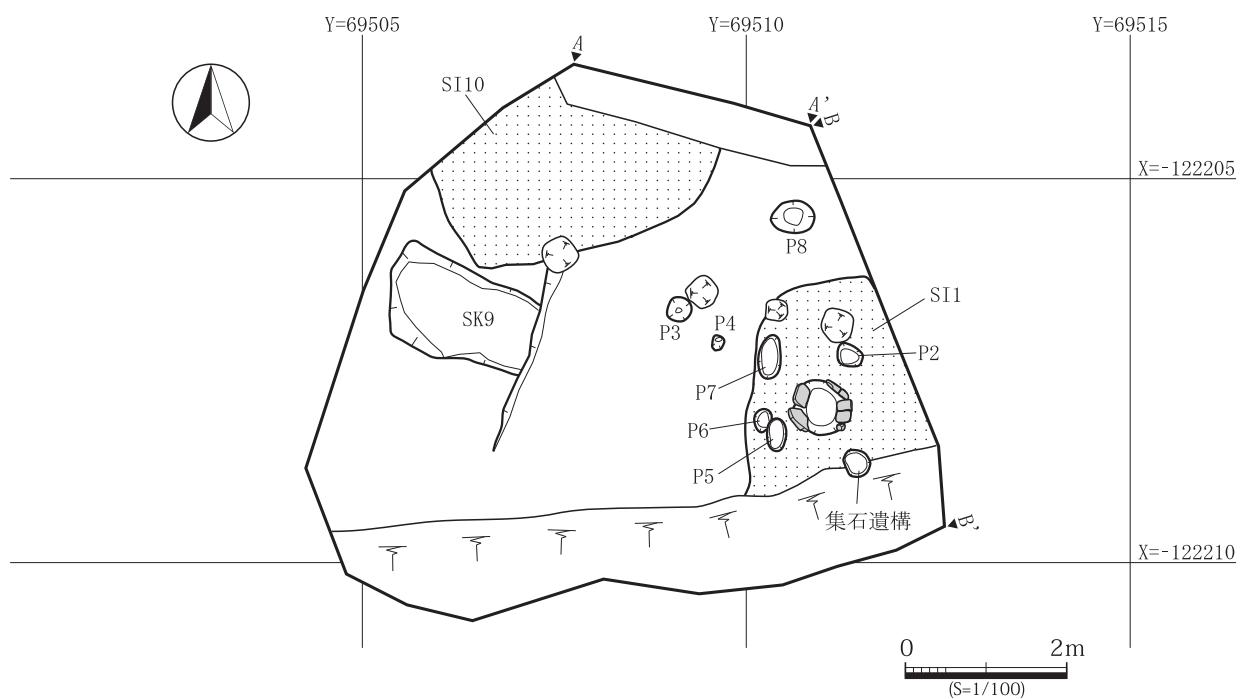
層番号	土色	土色番号	土性	締まり	粘性	特徴
1	暗灰黄色	2.5Y4/2	砂質シルト	—	あり	表土。
2	オリーブ褐色	2.5Y4/3	砂質シルト	—	—	砂礫含む。炭化物少量含む。耕作土。
2'	暗灰黄色	2.5Y4/2	砂質シルト	—	—	明黄褐色(10YR6/6) 砂質土ブロックを多く含む。落ち込み。
3	オリーブ褐色	2.5Y3/3	砂質シルト	—	—	礫含む。縄文土器・石器含む。包含層。
3'	オリーブ褐色	2.5Y3/3	—	—	—	炭化物を少量含む。ピット埋土か?
3''	暗褐色	10YR3/3	混貝シルト	—	—	貝殻を多く含む。
4	オリーブ褐色	2.5Y4/3	粘質シルト	—	—	礫・炭化物を多く含む。縄文土器少量含む。包含層?
5	黄褐色	2.5Y5/4	風化岩盤	—	—	地山。
5'	黄褐色	2.5Y5/4	—	—	—	オリーブ褐色(2.5Y3/3) シルトのブロックを含む。漸移層。

2017-T 1～11

第6図 A地区 2017-T 1～11 堆積土層図

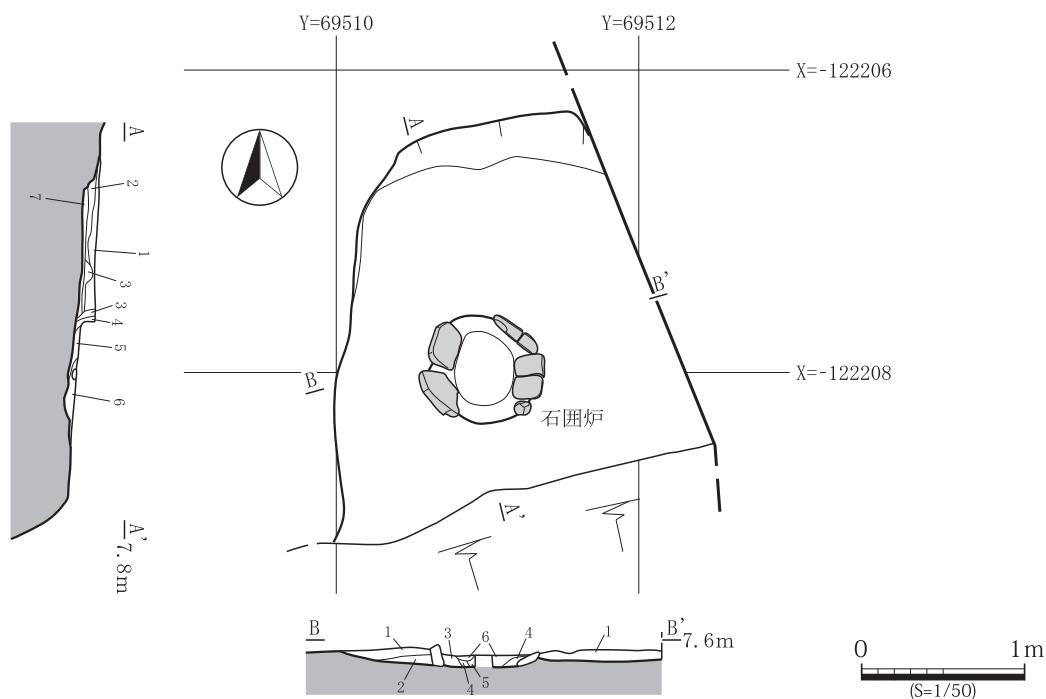
においては、縄文土器を含む遺物包含層を検出することができた。この結果を受け、切土を伴う工事が計画されていた2017-T 3、T 7を含む箇所では、切土施工範囲において本発掘調査が必要と判断され、2017-T 7を含む範囲で設定された調査区を1区、2017-T 3を含む範囲で設定された調査区を2区として、本発掘調査を実施した。

1区(第7図)は遺跡の南西端部付近に位置する。調査区中央部を南北に厚さ23cmの遺物包含層が堆積しており、延長の方向性から、2017-T 8から2017-T 7、そして本調査区まで延びる一連の遺物包含層と推測される。色調や土質から3層に大別された遺物包含層の各層は、上層から順に包含層1～3と呼称した。また、調査区東部では、包含層の大部分が現代の削平により失われている様子であった。1区では、縄文土器を含む竪穴建物跡SI 1・11や土坑SK 9のほか、年代不明のピッ

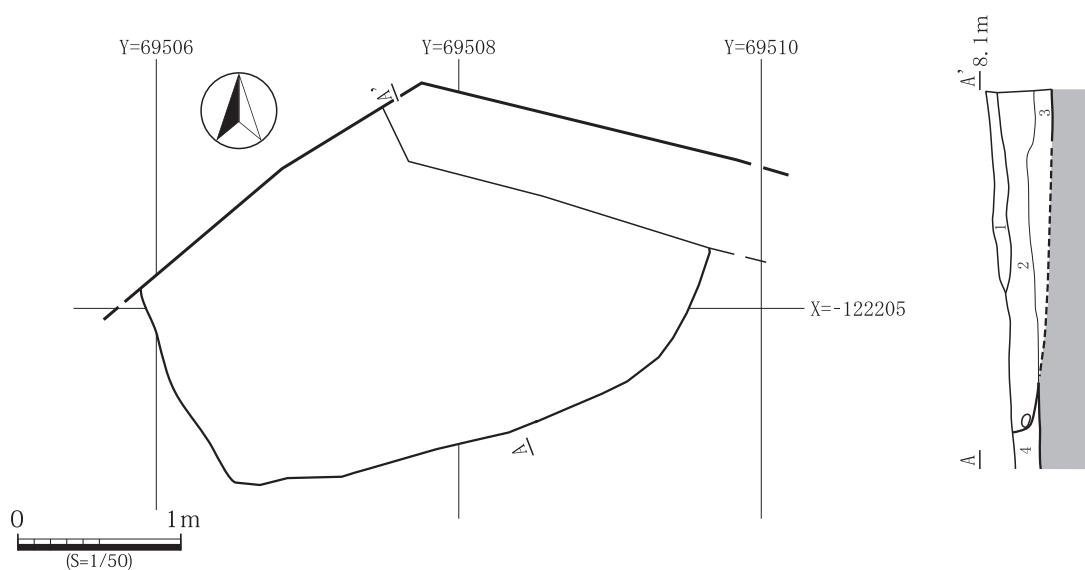


層番号	土色	土色番号	土性	締まり	粘性	特徴
1	灰黄褐色	10YR5/2	シルト	—	—	確認調査トレンチ埋土。
2	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	やや強い	弱い	表土。耕作土。
3	明黄褐色	10YR5/6	シルト	やや弱い	弱い	5 ~ 10cmの礫を多く含む。現代盛土。
4	黒褐色	10YR3/1	砂質シルト	強い	弱い	径 2 ~ 10cmの小石を多く含む。土器を多く含む。包含層 1。
5	黒褐色	10YR2/3	砂質シルト	強い	弱い	径 2 ~ 5cmの小石を多く含む。土器を多く含む。包含層 2。
6	暗褐色	10YR3/3	砂質シルト	強い	やや弱い	炭化物・径 1cmの小石を含む。SI10 埋土。
7	暗褐色	10YR3/4	砂質シルト	強い	やや弱い	炭化物少量含む。10YR5/6 粒・径 15cmの河原石を含む。土器を含む。SI10 埋土。
8	黒褐色	7.5YR3/2	砂質シルト	強い	弱い	炭化物含む。小石少量含む。SI 1 埋土。
9	黒褐色	10YR2/2	砂質シルト	強い	やや弱い	10YR5/6 土がまだらに混入。小石少量含む。
10	灰褐色	7.5YR4/2	砂質シルト	強い	弱い	土器・焼土・炭化物を含む。径 5cmの風化岩盤塊を含む。包含層 3。
11	にぶい黄褐色	10YR4/3	砂質シルト	強い	弱い	炭化物少量含む。堆積土は混入物少なく比較的均一。
12	黒褐色	10YR3/2	砂質シルト	強い	弱い	小石を多く含む。10YR5/6 岩塊を少量含む。土器を少量含む。包含層？
13	明黄褐色	10YR6/6	シルト	強い	弱い	地山。

第7図 A地区 1区



SI 1



SI 10

第8図 A地区 1区 SI 1、SI10

トも8基検出された。

[SI 1] (第8図)

1区南部で検出した石囲炉を伴う竪穴建物跡で、埋土の大部分が現代の削平で失われており、遺存状況は良好とはいえない。確認できた範囲での規模は、東西2.4m以上×南北2.3m以上、深さは13cmを測る。東部は調査区外へと延び、南部は崩落によるものか、あるいは近～現代に削平を受けたものか判然としないが、急激に南へ下る斜面となっており、これに壊されて失われている。

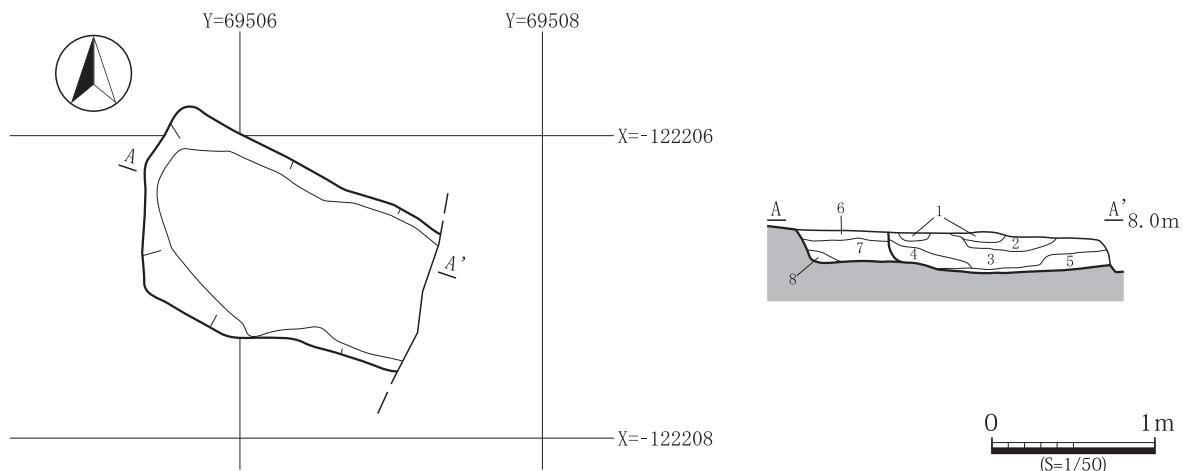
石囲炉は、東・西の二面を水摩した礫で囲ったもので、南・北面は隙間が空いている。規模は東西84cm×南北73cm、床面からの深さは4cmを測る。埋土は焼土を含むが少量であり、二次的な堆積であろうと思われる。

[SI10] (第8図)

1区北端部で検出した遺構で、切土工事の掘削深度より深いものであることが判明したため、宮城県教育委員会文化財課と協議の上、サブトレーニングで部分的に深さを確認し、ほかは遺構範囲の検出までで止めたものである。規模や形状から竪穴建物跡と判断されたものである。北部が調査区外へと延び、規模は確認できた範囲で東西約3.5m×南北2.3m以上、深さは36cmを測る。土層断面の観察から、包含層3を切り込んで構築されたものであることが確認できた。

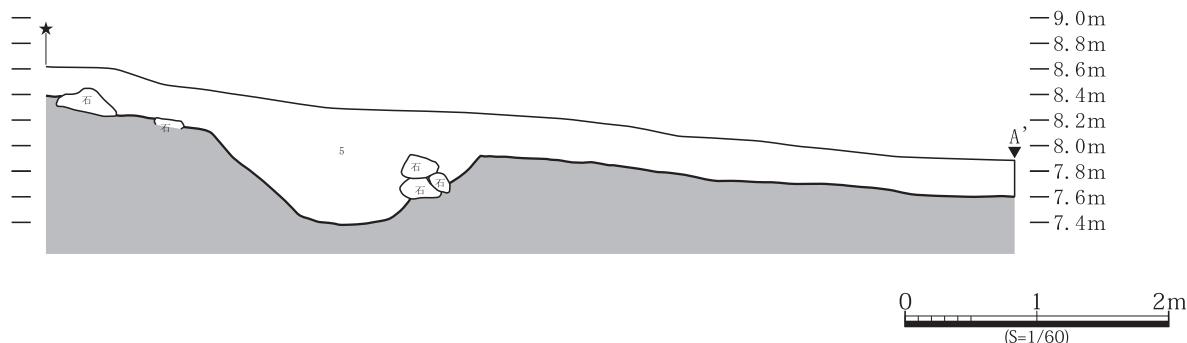
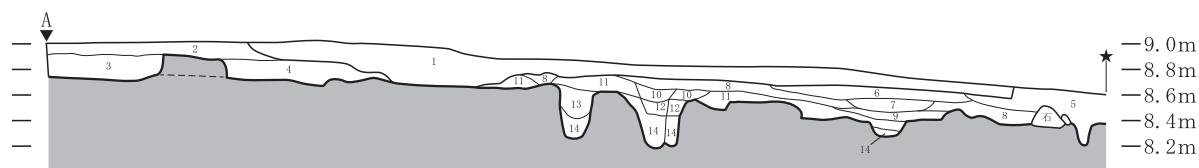
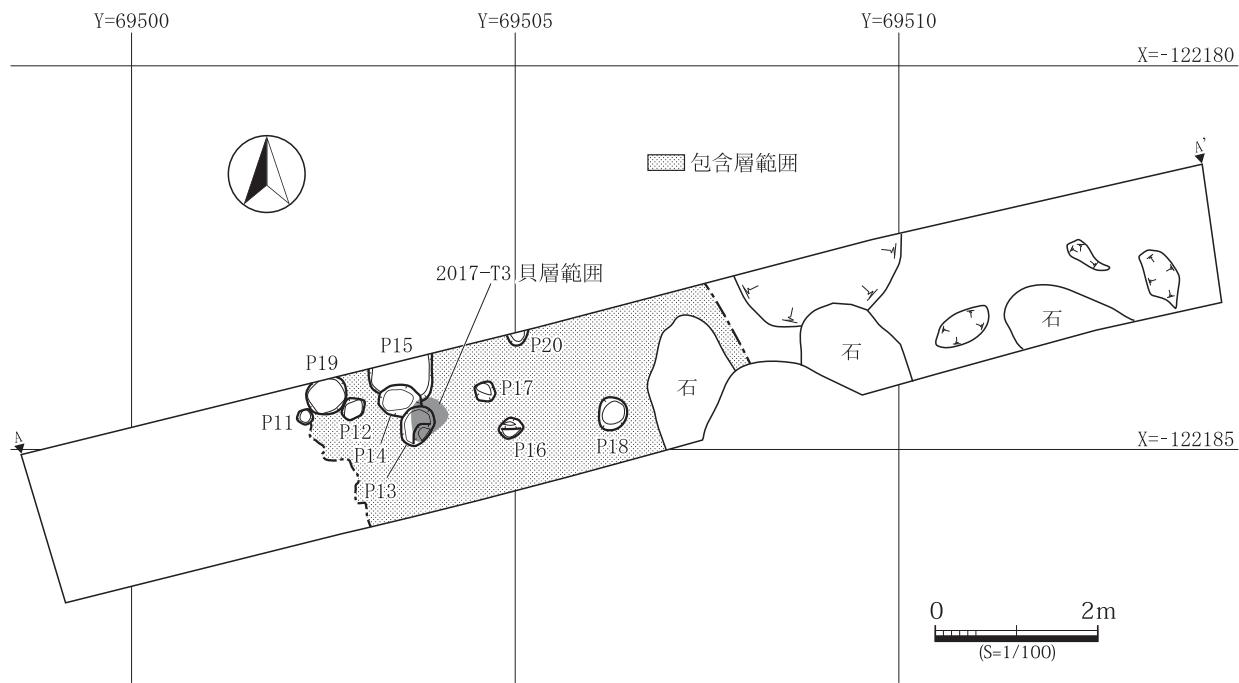
[SK 9] (第9図)

1区西部で検出した土坑で、規模は長軸2.0m以上×短軸1.2m、深さは27cmを測る。主軸方位はN-64°-Wを指す。土層断面の観察から、2基の土坑が重複しているものと考えられるが、平面



層番号	土色	土色番号	土性	締まり	粘性	特徴
1	灰黄褐色	10YR6/2	砂質シルト	—	—	5Y8/4 淡黄色土ブロック含む。
2	灰黄褐色	10YR6/2	砂質シルト	—	—	淡黄色土小ブロック、焼土ブロックを少量含む。
3	にぶい黄橙色	10YR7/3	砂質シルト	—	—	10YR8/3 浅黄橙色土小ブロックを少量含む。
4	にぶい黄橙色	10YR6/3	砂質シルト	—	—	浅黄橙色土小ブロックを少量含む。炭化物微量含む。
5	灰黄褐色	10YR6/2	砂質シルト	—	—	浅黄橙色土小ブロックをやや多く含む。焼土小ブロックを少量含む。
6	にぶい黄橙色	10YR7/4	砂質シルト	—	—	灰白色(10YR8/1)土小ブロック混交。
7	にぶい黄橙色	10YR6/4	砂質シルト	—	—	灰白色(10YR8/1)土小ブロック混交。
8	にぶい黄橙色	10YR7/3	砂質シルト	—	—	灰白色(10YR8/1)土小ブロック混交。

第9図 A地区 1区 SK 9



層番号	土色	土色番号	土性	締まり	粘性	特徴
1	黄褐色	10YR5/6	シルト	弱い	弱い	2017-T3 トレンチ埋土。
2	にぶい黄褐色	10YR5/3	シルト	あり	弱い	風化岩盤粒を微量含む。表土。
3	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	あり	弱い	第2層に近似。風化岩盤小ブロックを少量含む。耕作土か。
4	にぶい黄褐色	10YR5/3	シルト	あり	弱い	第3層に近似。やや色調明るい。耕作土か。
5	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	あり	弱い	第2層に近似。表土および現代搅乱。
6	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	やや強い	弱い	縄文土器含む。包含層。
7	黒褐色	10YR3/1	シルト	やや強い	弱い	縄文土器含む。包含層。
8	黒褐色	10YR3/2	シルト	やや強い	弱い	縄文土器含む。炭化物少量含む。包含層。
9	にぶい黄褐色	10YR5/4	シルト	やや強い	弱い	風化岩盤粒を少量含む。
10	褐色	10YR4/4	シルト	やや強い	弱い	風化岩盤粒をやや多く含む。
11	褐色	10YR4/4	シルト	やや強い	弱い	第10層に近似。
12	にぶい黄褐色	10YR5/4	シルト	やや弱い	弱い	風化岩盤粒を微量含む。比較的均一な土質。
13	褐色	10YR4/4	シルト	やや強い	弱い	土ブロックごく少量含む。
14	にぶい黄橙色	10YR6/4	—	やや弱い	弱い	第12層に近似。

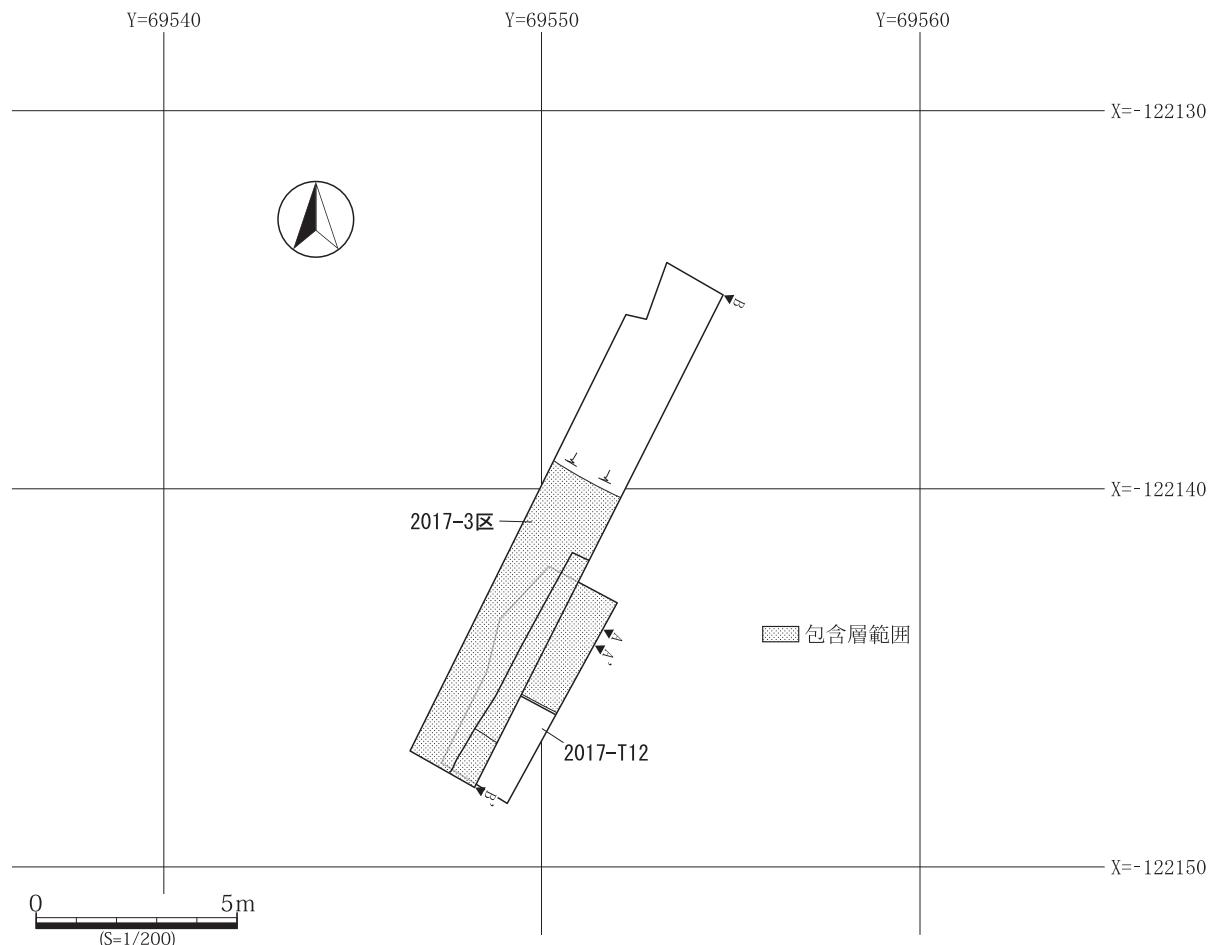
第10図 A地区 2区

的に重複を捉えることはできなかった。埋土中に少量の焼土を部分的に含むが、遺構底面や壁面に被熱痕跡は見受けられず、投げ込みによるものと思われる。

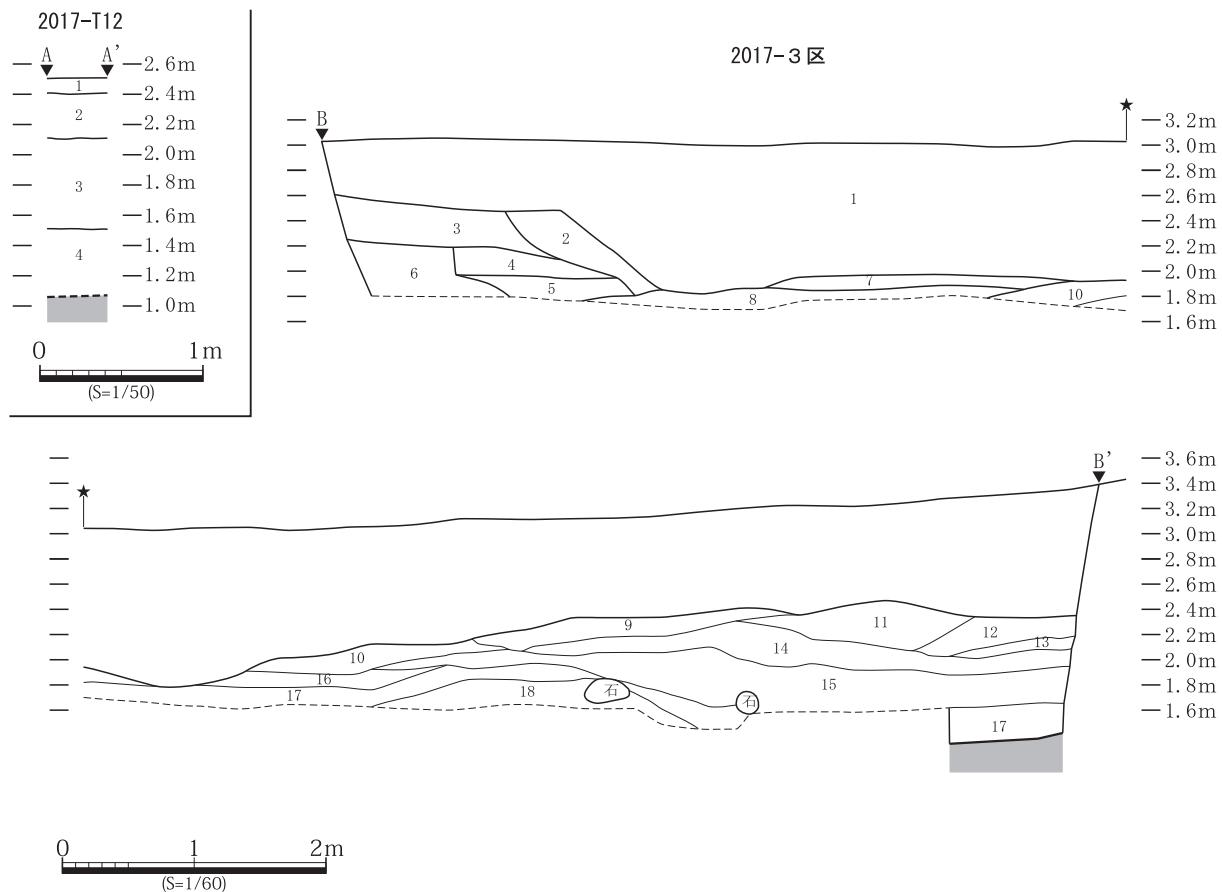
2区（第10図）は遺跡の西部中央付近に位置する。2017-T3調査時には、一部に貝層を含む幅約4.2m×厚さ約20cmの遺物包含層（第6～8層）を検出しており、本発掘調査ではこの包含層範囲内において、遺物包含層を除去した面でピットを10基検出している。ピット検出面となる第11層は、遺物包含層よりやや色調明るく遺物を含まないものの、風化岩盤粒の混入する遺物包含層に類似する土質であった。第11層下は地山となる風化岩盤層となるが、きわめて凹凸の著しい状態であり、土取りを行った痕跡とも考え得る。また、調査区北壁の堆積土層観察からは、第10～12層がやや乱れた堆積状況であることが確認された。このことから、先に検出された10基のピットも、埋没過程で窪地となった部分との堆積土の差異を掘削したものである可能性があり、これらピット群がそれぞれ第11層上面から掘り込んだ単体のピットとして捉えられるものであるか判然としない。

また、令和元年度には取付道路敷設に伴い、2019-T4トレーナーを設定し確認調査を実施したが、急激に南に下る斜面地であることが確認できたのみで、遺構・遺物は発見されなかった。（第4図）

（2）B地区



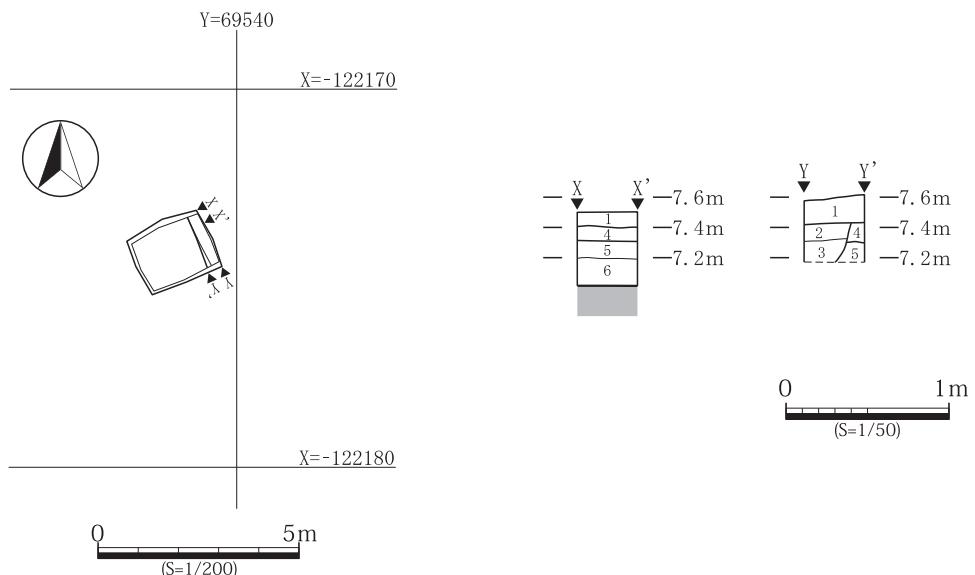
第11図 B地区 全体図（2017-T12、3区）



層番号	土色	土色番号	土性	締まり	粘性	特徴
1	—	—	碎石	—	—	表土。
2	黒褐色	10YR3/3	粘質シルト	あり	あり	小礫を含む。縄文土器含む。現代盛土。
3	黒褐色	10YR3/3	砂質シルト	なし	なし	礫を多く含む。
4	黒褐色	10YR2/2	粘質シルト	あり	強い	風化岩・礫を含む。縄文土器多く含む。

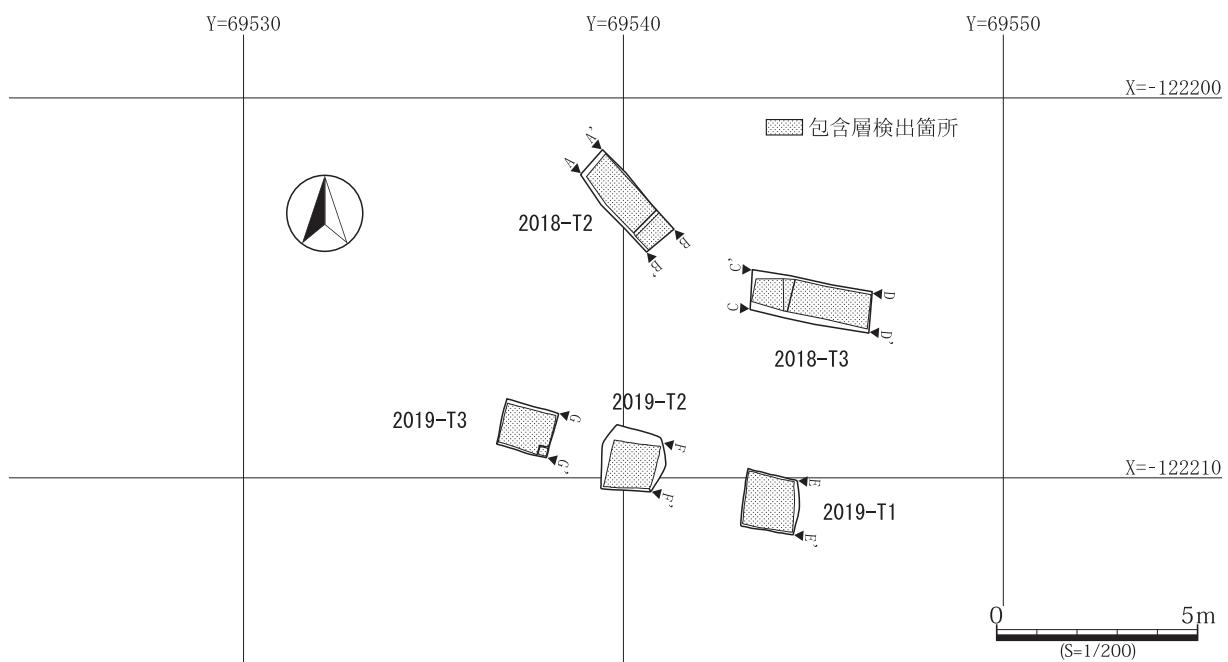
層番号	土色	土色番号	土性	締まり	粘性	特徴
1	灰黄褐色	10YR4/2	粘質シルト	弱い	あり	径 5 ~ 10cm の礫を多く含む。コンクリートブロック含む。現代盛土。
2	褐灰色	10YR4/1	粘質シルト	あり	あり	鉄分を含む褐色土を含む。小石を多く含む。現代盛土。
3	褐色	10YR3/4	砂質シルト	弱い	あり	小石を多く含む。現代盛土。
4	にぶい黄褐色	10YR4/3	砂質シルト	弱い	あり	径 1mm の粗砂を多く含む。現代盛土。
5	黒褐色	10YR3/2	粘質シルト	弱い	あり	小石を含む。現代盛土。
6	オリーブ黒色	5Y3/2	粘質シルト	あり	強い	水成堆積土(ヘドロ)。現代盛土。
7	黒褐色	10YR3/2	粘質シルト	あり	やや強い	径 1mm の砂を若干含む。現代盛土。
8	にぶい黄褐色	10YR4/3	砂質シルト	弱い	あり	径 1mm の粗砂を多く含む。現代盛土。
9	黒褐色	10YR3/2	シルト	やや弱い	弱い	小石を少量含む。包含層 1。
10	黒褐色	10YR2/3	シルト	あり	やや弱い	径 1cm の小石を含む。包含層 1。
11	黒褐色	10YR2/3	シルト	やや強い	やや弱い	炭化物・明黄褐色(2.5Y7/6)土を含む。小石少量含む。包含層 1。
12	黒褐色	10YR3/1	シルト	あり	やや弱い	黄褐色(10YR5/8)土ブロックを含む。土器・炭化物・小石含む。包含層 1。
13	暗オリーブ褐色	2.5Y3/3	シルト	やや強い	やや弱い	炭化物・土器・骨を含む。包含層 2。
14	暗褐色	10YR3/3	シルト	強い	やや弱い	径 3 ~ 10cm の小礫を含む。土器・骨を含む。包含層 2。
15	黒色	10YR2/1	粘質シルト	強い	強い	土器・骨・炭化物を多く含む。径 10 ~ 40cm の礫を多く含む。包含層 3。
16	黒褐色	10YR3/1	粘質シルト	やや強い	やや強い	径 5 ~ 15cm の礫を多く含む。土器・炭化物を含む。包含層 4。
17	黒褐色	10YR3/2	粘質シルト	強い	やや強い	径 30 ~ 50cm の礫を含む。土器・骨を含む。包含層 4。
18	黒褐色	10YR3/1	粘質シルト	弱い	強い	径 5 ~ 10cm の礫を多量含む。径 50cm の大石を含む。土器・炭化物を含む。包含層 4。

第 12 図 B 地区 堆積土層図 (2017-T12、2017- 3 区)

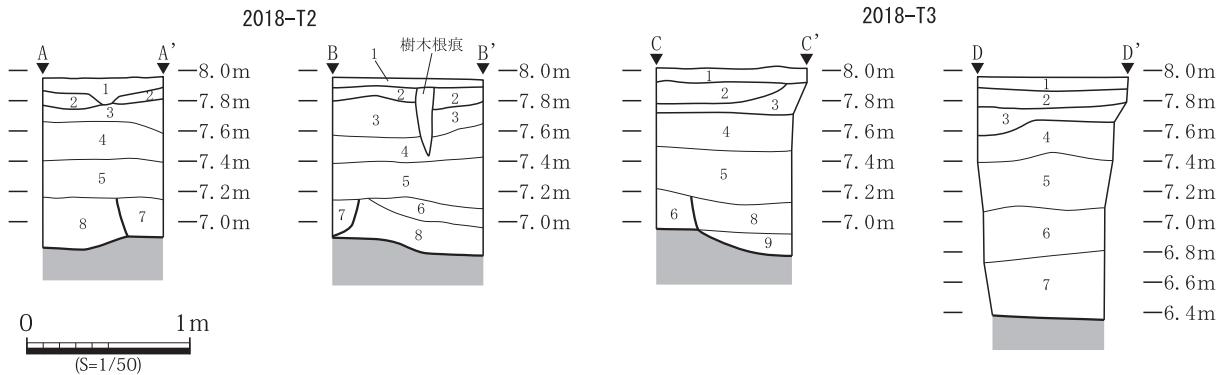


層番号	土色	土色番号	土性	締まり	粘性	特徴
1	灰黄褐色	10YR5/2	粘質土	弱い	あり	細～中砂混入。浅黄橙色(10YR8/4)粘土粒・径5mm前後の小礫多量含む。表土。
2	灰黄褐色	10YR5/2	—	やや弱い	あり	現代攪乱。
3	黄橙色	10YR8/6	—	やや弱い	やや強い	現代攪乱。
4	褐灰色	10YR4/1	粘質土	弱い	やや強い	細～中砂混入。浅黄橙色(10YR8/4)粘土粒・径5mm前後の小礫少量含む。耕作土。
5	灰黄褐色	10YR4/2	粘質土	あり	あり	細～中砂混入。炭化物・径5mm前後の小礫少量含む。縄文土器多量含む。
6	黒褐色	10YR3/1	粘質土	あり	やや強い	細～中砂混入。浅黄橙色(10YR8/4)粘土粒・炭化物少量含む。縄文土器多量含む。

2018-T 1



第13図 C地区 2018-T 1、2018-T 2・3、2019-T 1～3全体図



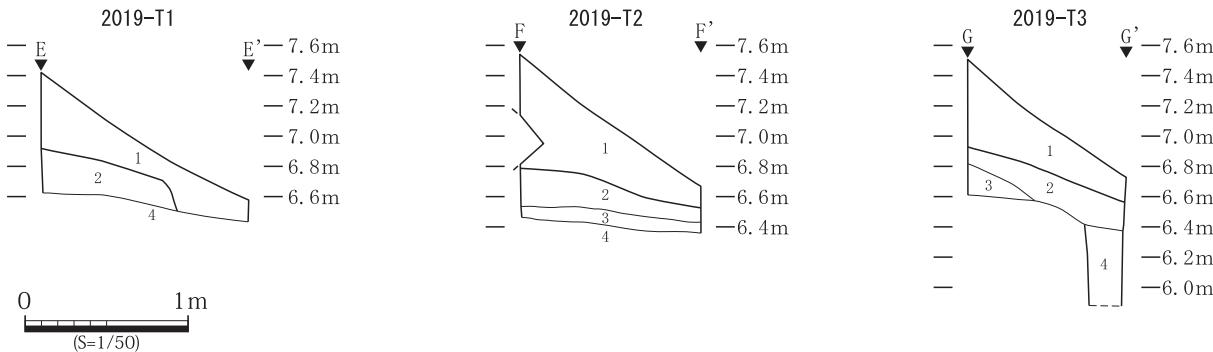
2018-T 2

層番号	土色	土色番号	土性	締まり	粘性	特徴
1	灰黄褐色	10YR5/2	粘質シルト	あり	なし	細～中砂混入。径5mmの小礫を含む。表土。
2	灰白色	10YR7/1	砂	なし	—	灰黄褐色(10YR5/2)土を含む。津波堆積?
3	灰黄褐色	10YR6/2	粘質シルト	あり	あり	細～中砂混入。貝片含む。径5mmの小礫含む。
4	にぶい黄褐色	10YR5/3	粘質シルト	あり	あり	細～中砂混入。径5mmの小礫少量含む。炭化物含む。包含層。
5	黒褐色	10YR3/1	粘質シルト	あり	あり	径2～5cmの小礫含む。にぶい黄橙色(10YR7/4)地山粒を含む。
6	灰黄褐色	10YR5/3	粘質シルト	あり	弱い	細～中砂混入。地山ブロックを含むが第8層より少ない。
7	暗褐色	10YR3/2	粘質シルト	あり	あり	細～中砂混入。径2～5cmの地山ブロックを含む。土器含む。遺構か?
8	にぶい黄褐色	10YR4/3	粘質シルト	あり	あり	細～中砂混入。径3～10cmの地山ブロックを含む。土器含む。

2018-T 3

層番号	土色	土色番号	土性	締まり	粘性	特徴
1	灰黄褐色	10YR5/2	粘質土	弱い	あり	細～中砂混入。浅黄橙色(10YR8/4)粘土粒・径5mm前後の小礫多量含む。表土。
2	褐灰色	10YR4/1	粘質土	弱い	やや強い	細～中砂混入。浅黄橙色(10YR8/4)粘土粒・径5mm前後の小礫少量含む。耕作土。
3	—	—	碎石	—	—	—
4	にぶい黄褐色	10YR5/3	粘質シルト	あり	あり	細～中砂混入。径5mmの小礫少量含む。炭化物含む。包含層。
5	黒褐色	10YR3/1	粘質シルト	あり	あり	径2～5cmの小礫含む。にぶい黄橙色(10YR7/4)地山粒を含む。
6	灰黄褐色	10YR4/2	粘質シルト	あり	あり	細～中砂混入。径1cmの小礫・径3～5cmの地山ブロックを含む。土器含む。
7	にぶい黄褐色	10YR4/3	粘質シルト	あり	あり	中～粗砂混入。炭化物・土器含む。遺構埋土。
8	にぶい黄褐色	10YR4/3	粘質シルト	あり	あり	細～中砂混入。径1～3cmの地山ブロック・炭化物を含む。遺構埋土。
9	褐色	10YR4/4	粘質シルト	あり	あり	細～中砂混入。長さ20cm程の角礫・炭化物を含む。遺構埋土。

2018-T 2・3



層番号	土色	土色番号	土性	締まり	粘性	特徴
1	灰黄褐色	10YR4/2	—	なし	—	砂礫多く含む現代盛土層。表土。
2	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	あり	あり	比較的安定した土質。耕作土か。
3	黒褐色	10YR3/2	シルト	あり	あり	貝ほとんど含まない。
4	黒褐色	10YR2/2	混貝シルト	あり	あり	炭化物含む。土器・貝・魚骨を含む。

2019-T 1～3

第14図 C地区 2018-T 2・3、2019-T 1～3堆積土層図

本地区は、遺跡の中央よりやや北西部に位置する、東から西へ緩やかに下る低地である。本地区については、第11・12図に示す。平成29年度に2017-T12トレーニングを設定し確認調査を行ったところ、深掘りを行ったトレーニング北半部で遺物包含層が検出された。周辺は切土を伴う工事が計画されていたことから、本発掘調査が必要と判断され、2017-T12を含む切土施工範囲に設定された調査区を3区として、本発掘調査を実施した。

3区で検出した遺物包含層は、調査区北端から南へ約6mまでの範囲が現代攪乱により失われているが、以南は全面に遺物包含層が堆積している状況が確認できた。表土となる厚さ約1.0mの現代盛土層下に約1.0mの厚さで遺物包含層が堆積しており、色調や土質から4層に大別された各層を、上層から順に包含層1～4と呼称した。遺物包含層の北半部では包含層1下に包含層4が堆積し、包含層2・3は南半部のみで堆積が認められるものであった。地表から約2mの深さとなる包含層4の直下で、地山の岩盤層を検出した。

(3) C地区

本地区は、遺跡の中央よりやや西部に位置しており、平成30年度に2018-T1～3、令和元年度に2019-T1～3の計6箇所トレーニングを設定し、確認調査を実施した。第13・14図に示す。

2018-T1～3は平坦地に設定されたトレーニングで、2018-T1で40cm、2018-T2で85cm、2018-T3で80～90cmの厚さをもつ遺物包含層が検出された。2018-T2・3では、遺構埋土と思われる堆積をトレーニング壁面の土層観察で確認しており、2018-T2では包含層最下層を切り込む遺構、2018-T3では包含層最下層を切り込む遺構と、地山からの掘り込みとなる遺構を検出している。

2019-T1～3は南へ下る斜面地に設定されたトレーニングで、表土層下に耕作土層と思われる灰黄褐色土が堆積し、その直下で貝を多く含む遺物包含層を検出した。2019-T3では部分的に深掘りを行い、混土貝層が厚さ60cm以上堆積していることを確認した。

第3表 土器・石器出土点数表

出土地点(修正)			土器(点)				土製品(点)			石器(点)			
地区	地点	遺構・層位	口縁部	胴部	底部	計	円盤状	その他	計	剥片石器	剥片	礫石器	計
A	1区	SI1	8	59	2	69	1		1			2	2
	1区	SI10	61	463	23	547	6		6			12	12
	1区	SK9	4	51	2	57						1	1
	1区	P5		2		2							
	1区	P7		2		2							
	1区	P8		1		1							
	1区	包含層1	7	133	3	143	1		1		1	1	2
	1区	包含層2	36	337	17	390	1		1			5	5
	1区	包含層	82	564	23	669	2		2			18	18
	1区	—	6	31	2	39				1			1
	1区	表土	1	9	1	11						1	1
	1区	現代攪乱	11	70	2	83						5	5
	2区	P13		2		2							
	2区	P14		1	1	2							
	2区	P16		2		2							
	2区	包含層	23	188	11	222	2		2			2	2
	2区	—	1	3		4							
	2区	表土	11	43	4	58						8	8
	2区	現代攪乱	1	2		3							
	2017-T1	表土	2	5	1	8						1	1
	2017-T3	貝層		2		2							
	2017-T3	包含層	36	199	19	254	1		1			4	4
	2017-T3	表土										1	1
	2017-T4	包含層	18	139	14	171	1		1	2		5	7
	2017-T7	包含層	9	147	3	159	4	燒粘土塊2	6			2	2
	2017-T8	包含層	5	36	3	44						6	6
	2017-T9	包含層	3	4		7							
	2017-T11	包含層	10	99	10	119						2	2
	2017-T11	表土	3	6		9							
B	3区	包含層1	7	26	1	34	1		1			2	2
	3区	包含層2	25	128	10	163					2	8	10
	3区	包含層3	116	777	44	937	3	土偶1	4	1	3	28	32
	3区	包含層4	106	530	32	668	2		2		3	15	18
	3区	包含層	39	351	23	413	4		4		2	6	8
	2017-T12	包含層	5	116	13	134						1	1
	3区	—	1	11	2	14							
	3区	現代攪乱	2	4	1	7							
	2017-T12	現代攪乱		5		5							
	2018-T3	7層	3	9	2	14							
C	2019-T1	3層		2		2						1	1
	2019-T1	4層	3	5	1	9						2	2
	2019-T2	3層	1	3		4						1	1
	2019-T2	4層	2	20	1	23						1	1
	2019-T3	4層	7	47	2	56	1		1				
	計		655	4634	273	5562	30	3	33	4	11	141	156

2. 遺物

(1) 繩文土器（第15～30図）

今回の調査で出土した土器の点数は5,562点あり、比較的大きな破片を中心に本報告に掲載したものは160点である。縩文土器は主に遺物包含層から出土し、隆帶、隆線、沈線、貼付、刺突などによって文様が施されるものと地文を主体とするものがある。地文の大半は縩文で撫糸文（絡条体）は少数である。出土した土器の大半は破片で、口縁から底部までを復元できたのは1点のみである。

器種は大部分が深鉢で、そのほかに浅鉢・壺などがある。これらの土器を従来の研究に従って時期ごとに、1群（前期末葉）、2群（中期中葉）、3群（中期後葉）、4群（中期末葉）、5群（後期初頭）、6群（後期前葉から中葉）と、粗製土器の7群に大別した。

1群土器

半截竹管を用いた平行沈線文が施される土器で、器面の斜縩文は間隔をあけた縦位や縦走する結束羽状縩文である。2点はいずれも深鉢胴部の破片で、59が2017-T4遺物包含層から、79が3区包含層3から出土した。文様の特徴から大木6式に比定できる。

2群土器

主に隆帶、隆沈線の組み合わせでC字状文や渦巻文などが施文される土器である。地文の大半は斜縩文で、口縁部が横位、胴部が縦位のものが多い。器種は深鉢が大半を占め、浅鉢が少量伴う。深鉢は内弯する波状口縁に突起や円孔を有する把手が付く1類、内弯する平縁口縁を浮線状の隆線で斜位に区画充填し、口縁部に縩文側面を刻み目状に押圧する2類、主に隆沈線や沈線で渦巻文が施される3類がある。1類は3区包含層4、3区サブトレ上層、1区包含層2から出土した。2類は3区包含層4から出土した。3類は2017-T4遺物包含層、1区包含層2からまとまって出土し、3区包含層2・3からも少量が出土した。文様などの特徴から1・2類が大木8a式、3類が大木8b式に比定できる。

3群土器

主に沈線ないし隆線・沈線によって楕円・逆U字文等が施文される土器で、器種は深鉢が大半を占め、浅鉢が少量伴う。渦巻文や蕨状文を伴う1類と、渦巻文や蕨状文を伴わずに円・楕円形文や逆U字文のみで構成される2類がある。器面の斜縩文は、1類では横位、斜位（横走）、縦位とばらつきがみられるが、2類では大半が縦位である。1類は、2017-T3遺物包含層、2区、3区包含層3・4から出土した。2類は3区包含層3・4からまとまって出土し、1区包含層2、SI10、SK9、3区包含層2等から出土した。3群は大木9式に比定でき、1類の文様に古い要素が残る。

4群土器

主に沈線によって口縁部から胴部上半に横方向に展開する区画文が施される。器種はいずれも深鉢で、口縁が外反する。区画文が曲線的な1類とやや角張った2類がある。器面の斜縩文は大半が縦位である。1類は3区包含層4・3、2017-T11遺物包含層から、2類は、2017-T11包含層2、C地区2019-T1の第4層等から出土した。4群は大木10式に比定できる。

5群土器

深鉢波状口縁の破片で、胴の上部が外傾し口縁が内傾する。区画文の隆線に刺突を施す土器で、器

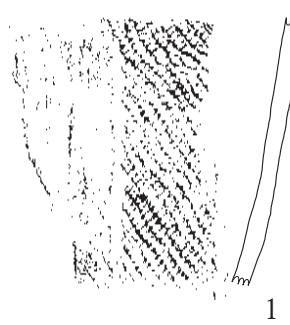
面の斜縄文は横位である。胴部断片のため、胴部の立ち上がりが外反気味なのか膨らみ気味なのか、区画文が横のみに展開するのか下にも展開するのか等は不明である。3区包含層4から出土した。胴部の形態や文様などに不明な点が多いが、門前式に比定できる。

6群土器

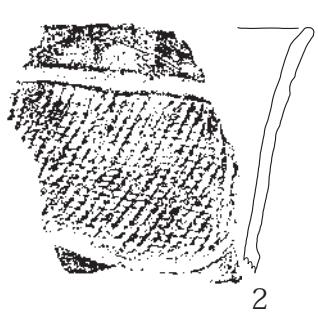
主に沈線で文様が施される薄手の土器である。沈線で区画文と鎖状文を描く1類、2本ないし3本の一組の沈線によって描かれた曲線的ないし幾何学的な区画内に細かい縄文が施される磨消帶縄文の2類、胴部を2本ないし3本の沈線で区画し、区画外の斜縄文を磨り消す磨消縄文の3類、口縁部に多条沈線を施す4類がある。器面の斜縄文は1類と4類が縦位、2類と3類は文様が比較的単純な150が横位、91が縦位、やや複雑な127が縦・斜位、複雑な89・126・151は縦・横・斜位である。器種は大半が深鉢で、壺と華燭土器を伴う。いずれも3区から出土した。1類が包含層3、2類がサブトレーナー遺物包含層、包含層3・4、3・4類が包含層4から出土した。1類は青島貝塚11類（南方町1975）に、2類は十腰内1・2式に、3類は秆内A式（十腰内1式併行）（鈴木克彦2001）、4類は青島貝塚12類（南方町1975）、宮古IIa式（十腰内2式併行）に比定できる。

7群土器

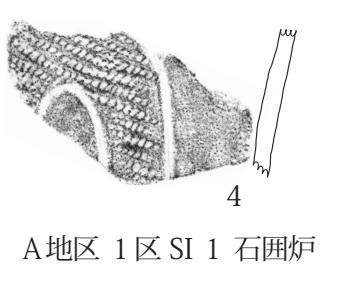
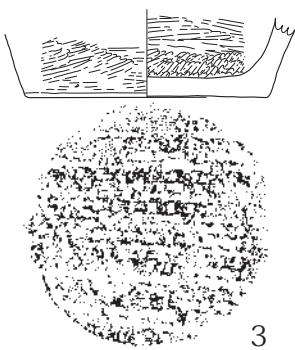
主に斜縄文が施される、いわゆる粗製土器である。器面の斜縄文が主に縦位や斜位（横走）の1類、横位の2類、口縁が肥厚し斜縄文が斜位（52が横走、98が縦走）の3類、胴上部に横位と縦位の斜縄文を組み合わせた羽状縄文の4類、口縁部下に縄文压痕が横位に巡り胴部の斜縄文が横位の5類、薄手の縄文が細かい6類がある。1類の口縁部形態は内弯・内傾、直立気味、外傾、外反と様々である。2類はいずれも胴部の破片である。3類の2点はいずれも口縁が内弯する。4・5類は内弯気味の胴部に外傾ないし外反気味の口縁部が付き、胴部と口縁部の境が屈曲する。6類の口縁部は外傾する103・140と、胴上部と口縁部の境が屈曲して口縁が内弯気味の141がある。器種は深鉢である。1類は、中期土器のみが出土したA地区と、中期と後期土器の混在するB地区からほぼ同じ比率で出土した。A地区からは大木9式土器が出土した1区SI10から13～19が、大木8b～9式土器の出土した2区と2017-T4の遺物包含層から47・68・69が出土した。2類は3区包含層3・4から出土した（98が包含層3、139が包含層4から出土）。3類は、52が大木8b～9式土器の出土した2017-T3遺物包含層から、99が3区包含層3から出土した。同日付けの出土遺物には大木6・8b・9式、十腰内1式等があり、共伴土器から時期を特定することが難しい。4～6類は3区から出土した。1類は伴出土器や長谷堂貝塚の類例から中期後葉（岩手県2020）に比定できる。2類は時期を特定するのが難しい。4～6類の伴出土器は後期前葉から中葉におさまる土器で、5類は青島貝塚15類（南方町1975）、山居遺跡IV群（宮城県2007）の類例から後期前葉に比定できる。



C地区 2018-T 3 7層



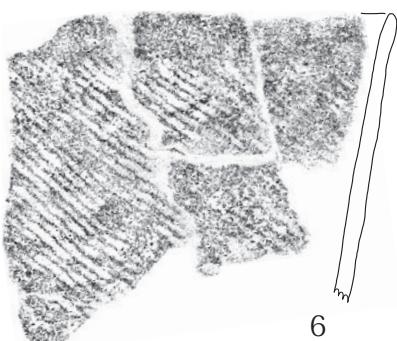
C地区 2019-T 1 2層



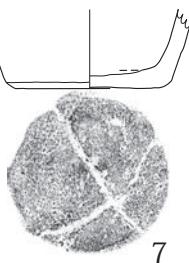
A地区 1区 SI 1 石围炉



A地区 1区 SI 1 1層



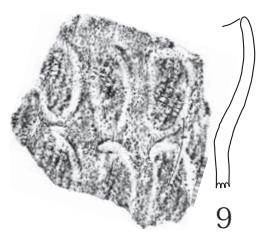
6



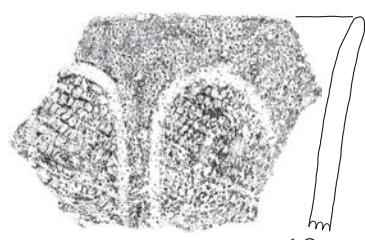
7



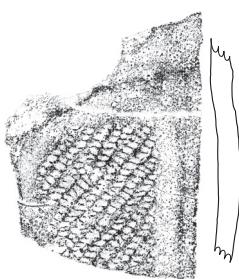
8



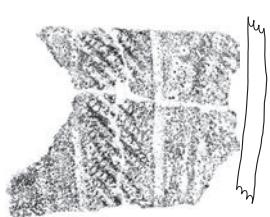
9



10



11



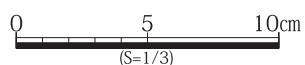
12

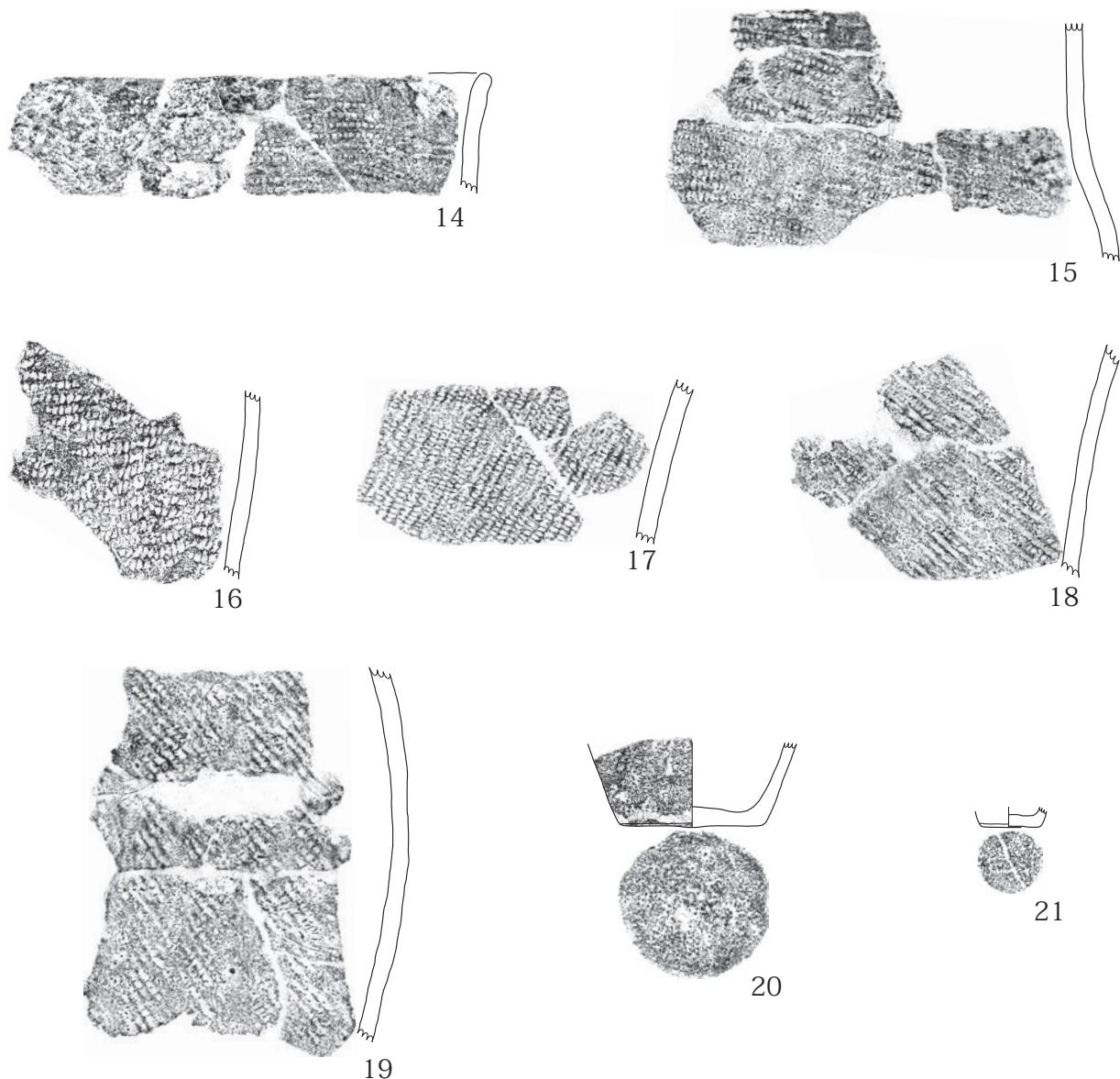


13

A地区 1区 SI10

第15図 出土土器 (1)





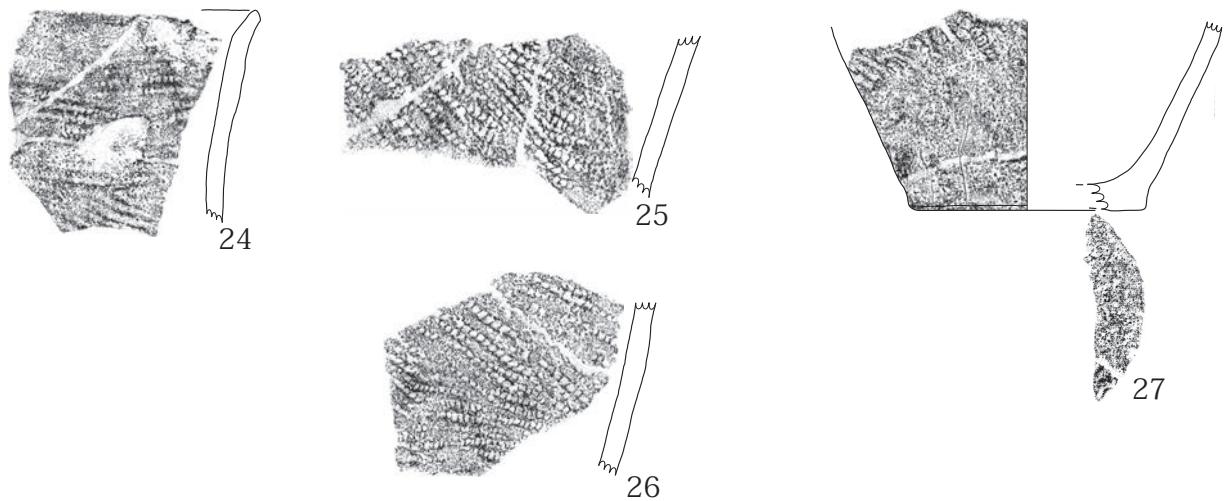
A地区 1区 SI10



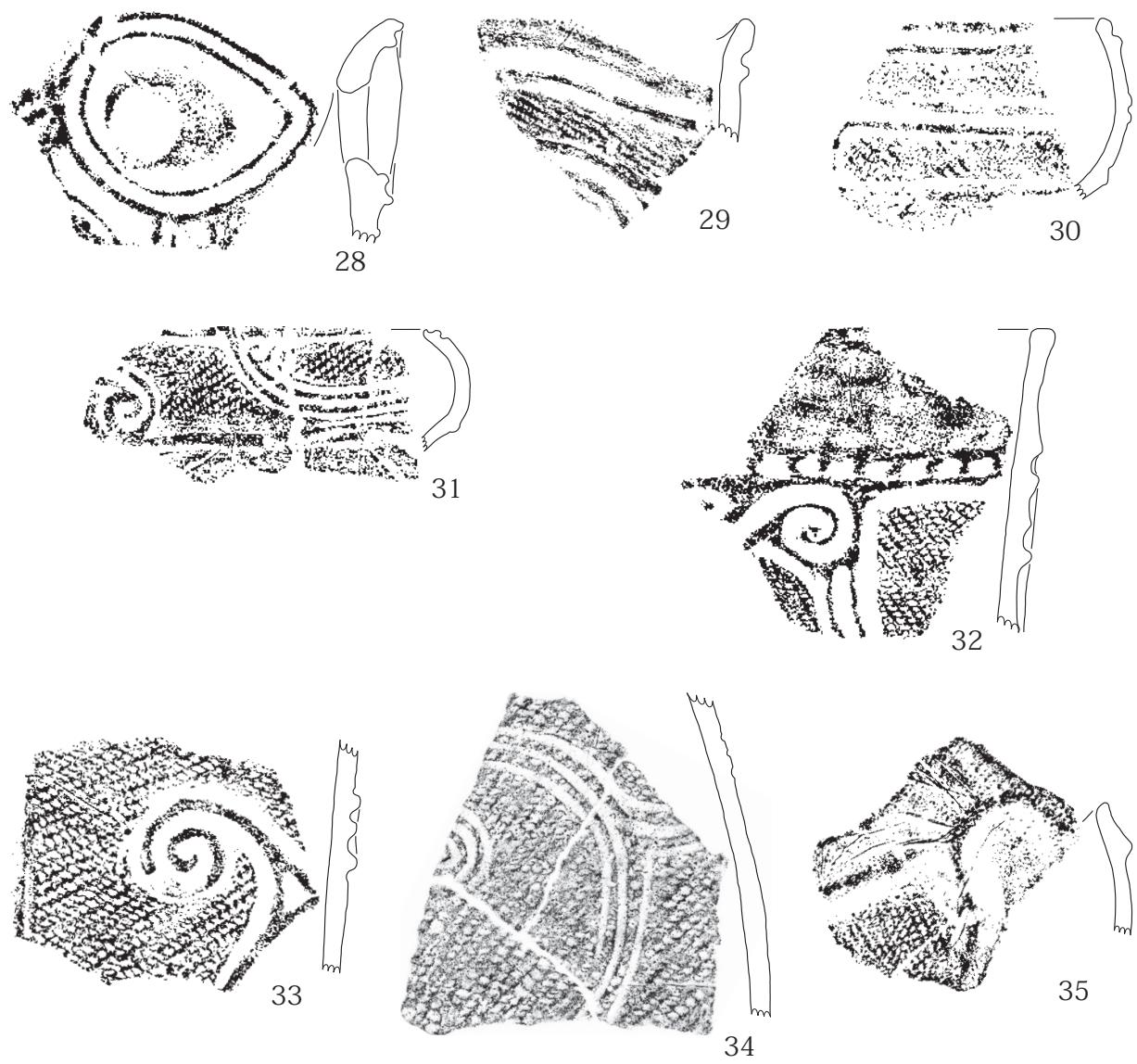
0 5 10cm
(S=1/3)

A地区 1区 SK 9 2層

第16図 出土土器 (2)



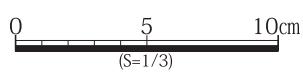
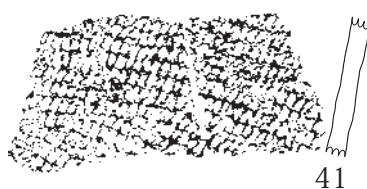
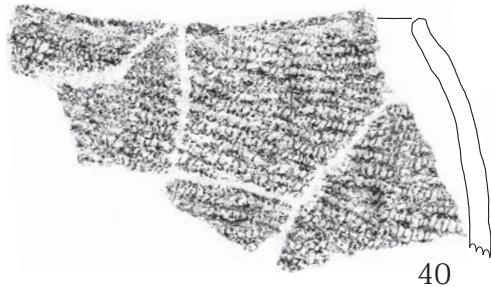
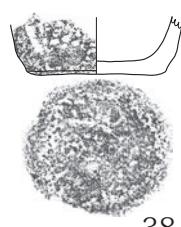
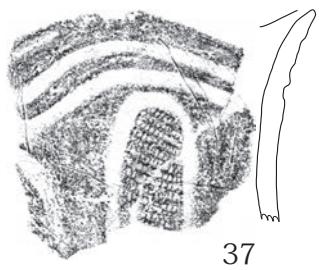
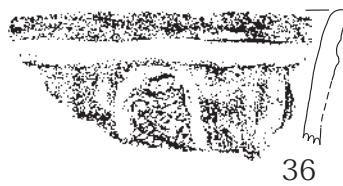
A地区 1区 包含層3



A地区 1区 包含層2

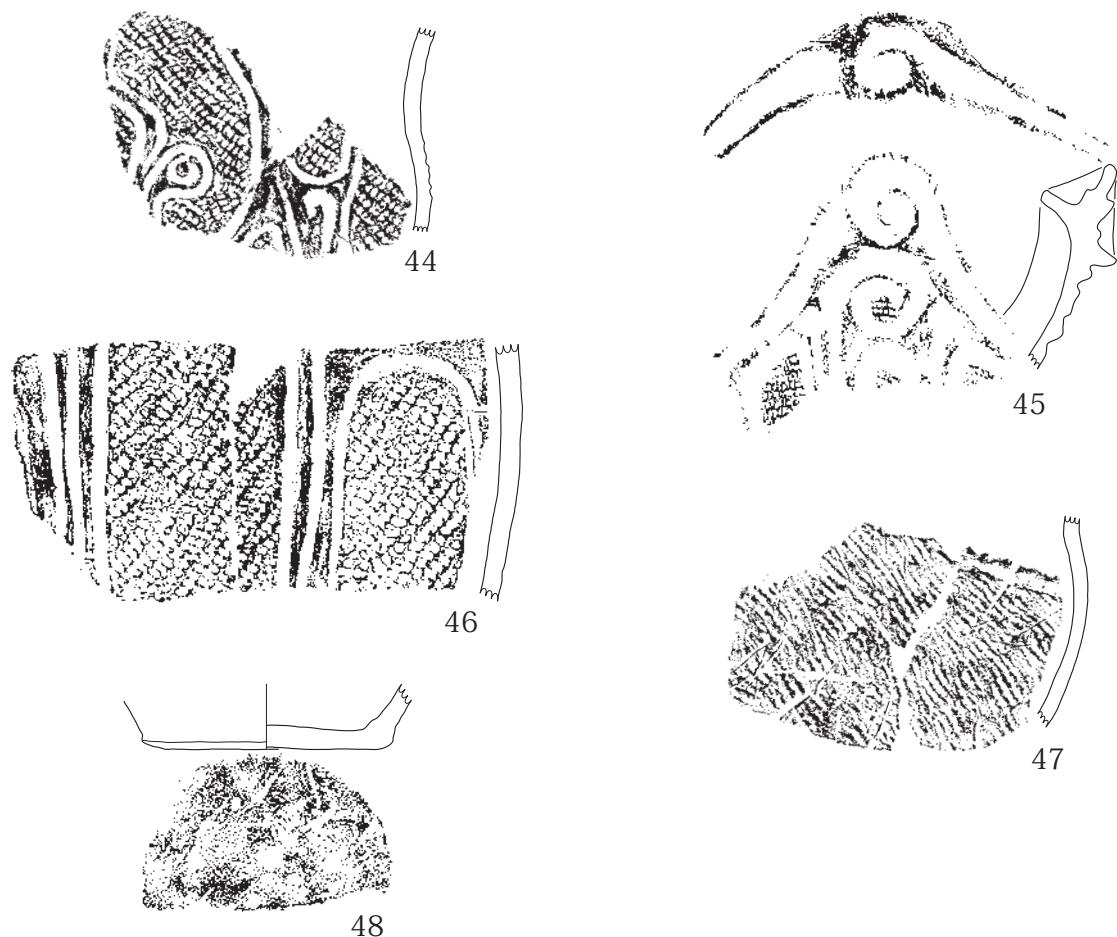
第17図 出土土器 (3)

0 5 10cm
(S=1/3)

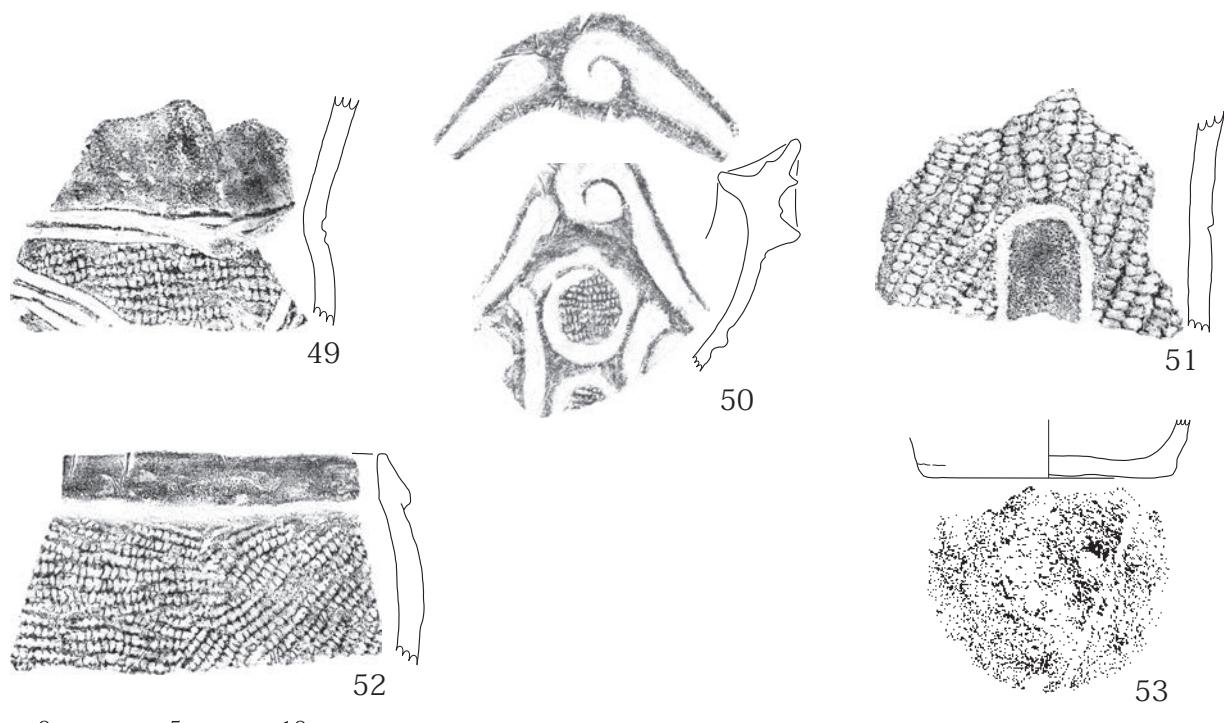


A地区 1区 包含層2

第18図 出土土器(4)

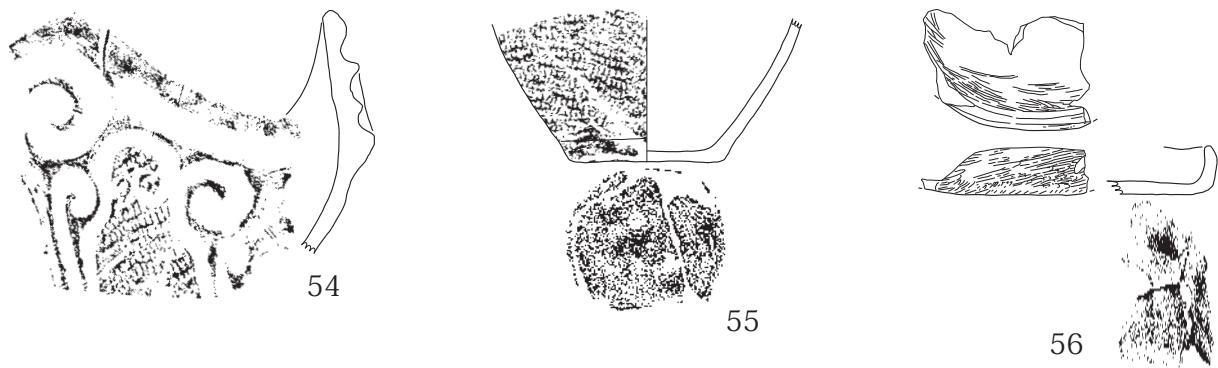


A地区 2区 包含層

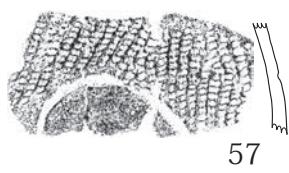


A地区 2017-T 3 包含層

第19図 出土土器 (5)



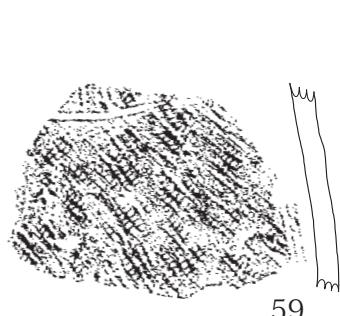
A地区 2017-T 3 サブトレ 包含層



A地区 2017-T11 包含層

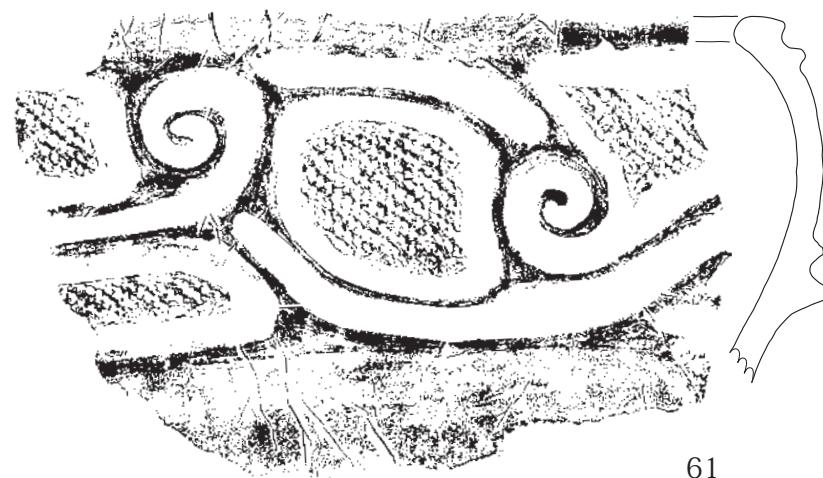


A地区 2017-T11



59

60

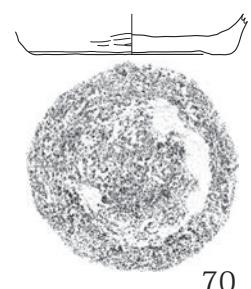
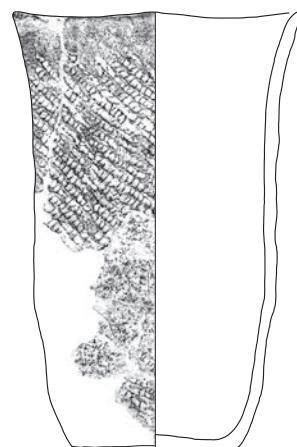
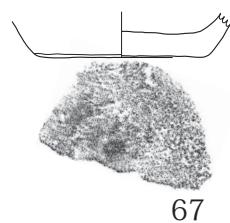
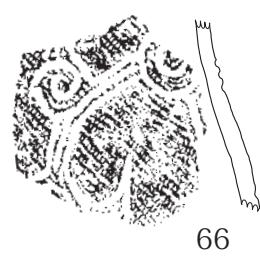
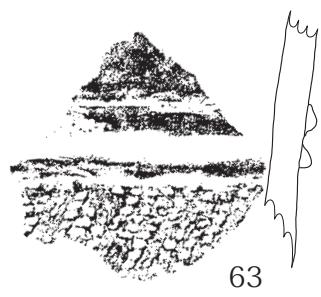
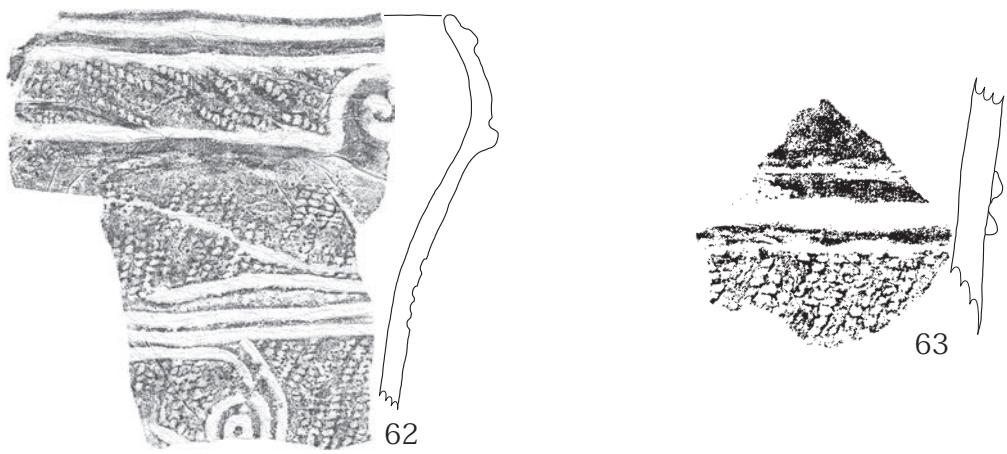


61

A地区 2017-T 4 包含層

0 5 10cm
(S=1/3)

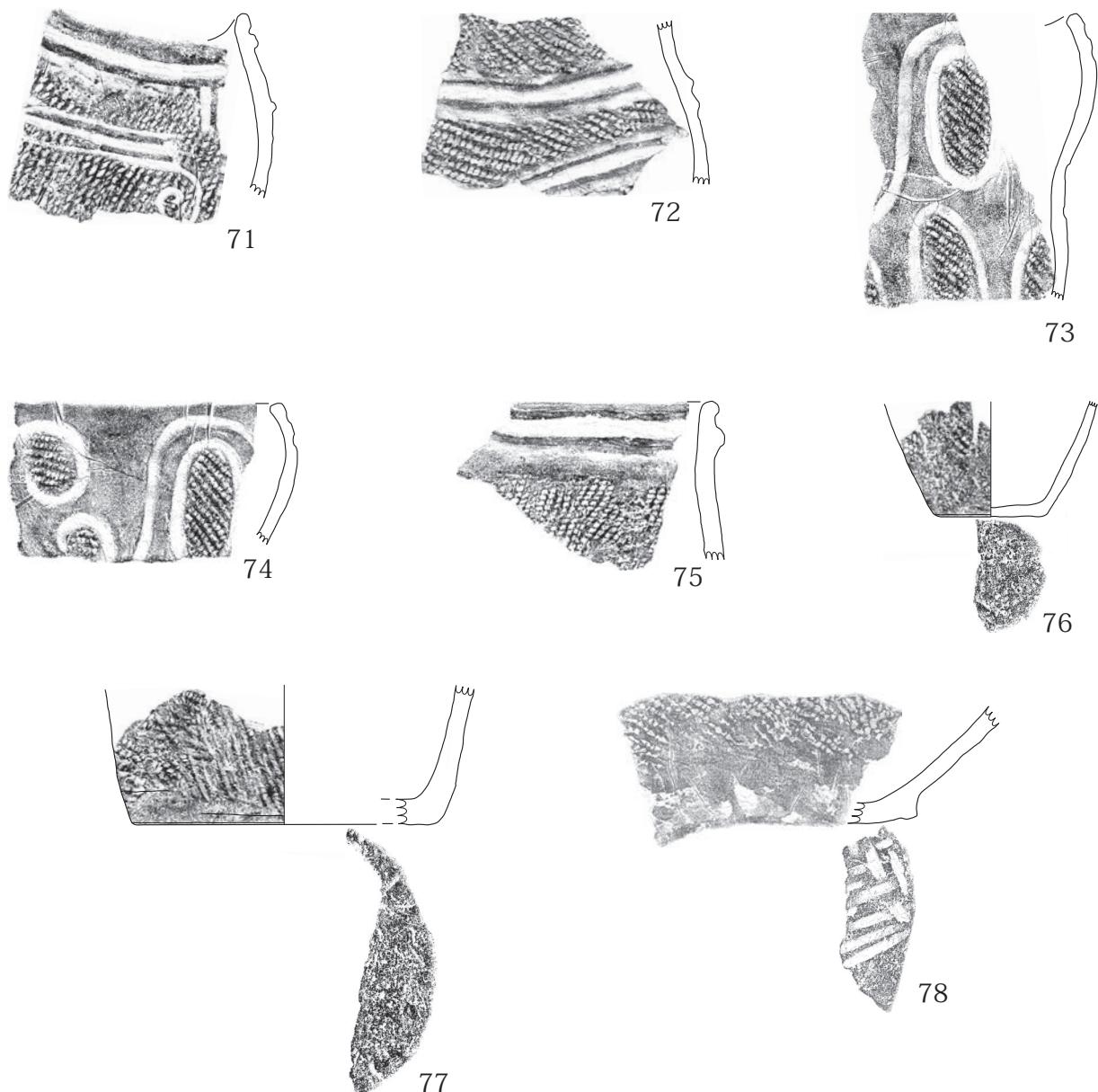
第20図 出土土器 (6)



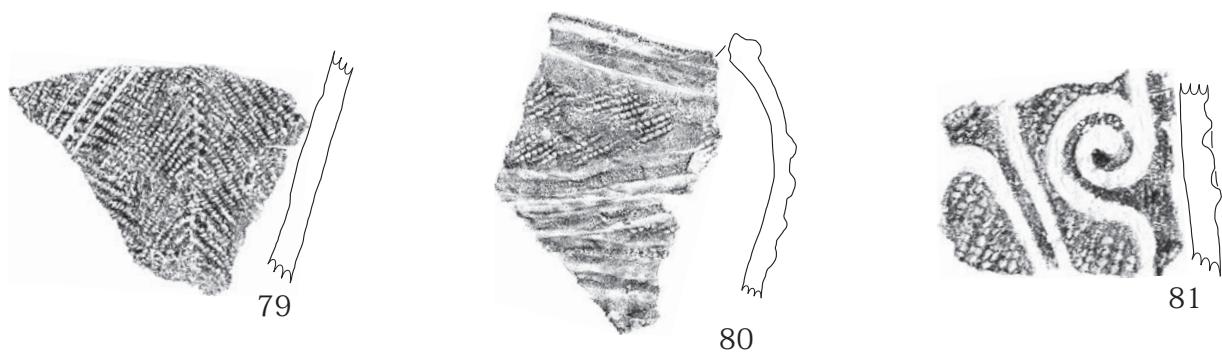
A地区 2017-T 4 包含層

0 5 10cm
(S=1/3)

第21図 出土土器 (7)



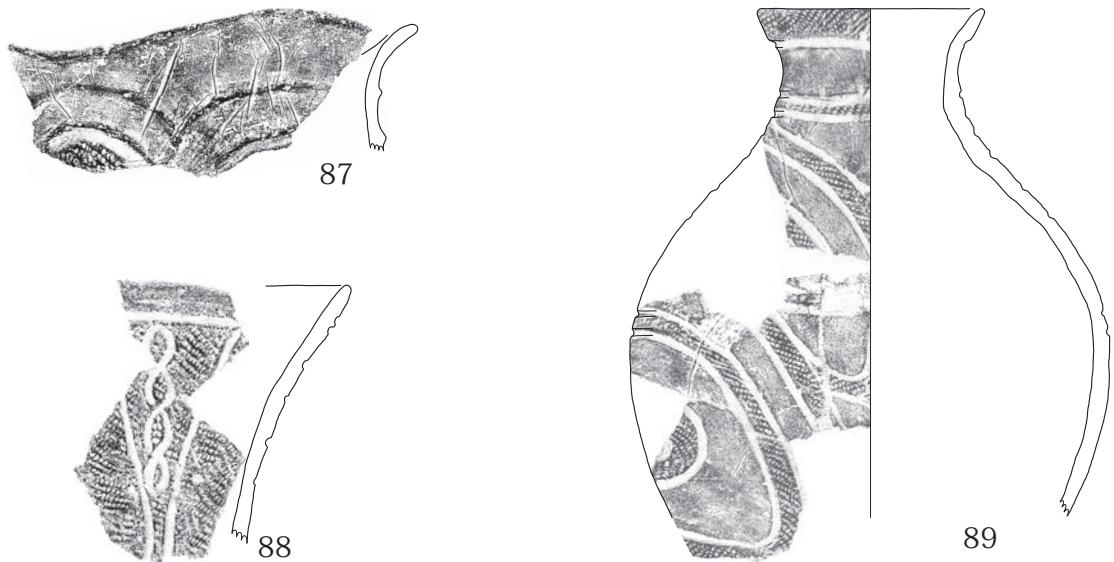
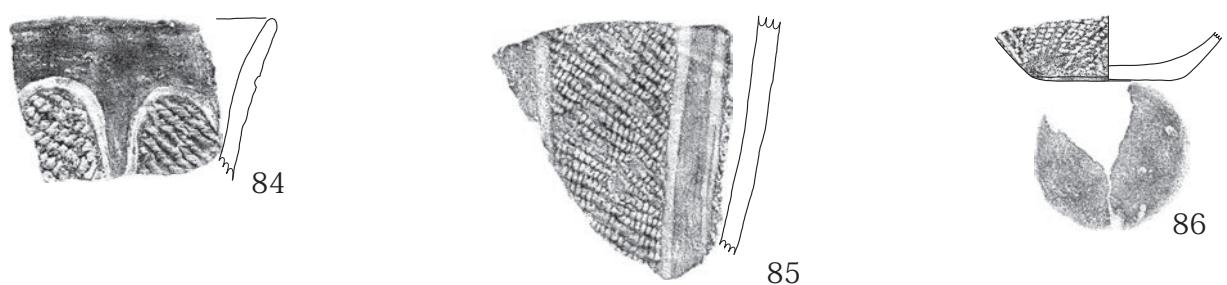
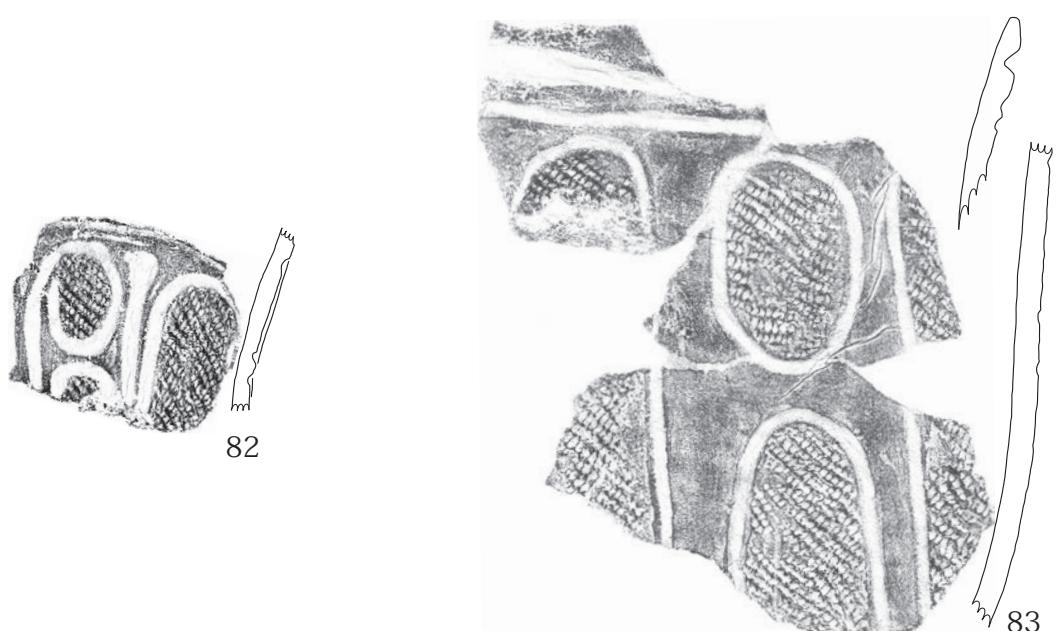
B地区 3区 包含層2



B地区 3区 包含層3

第22図 出土土器 (8)

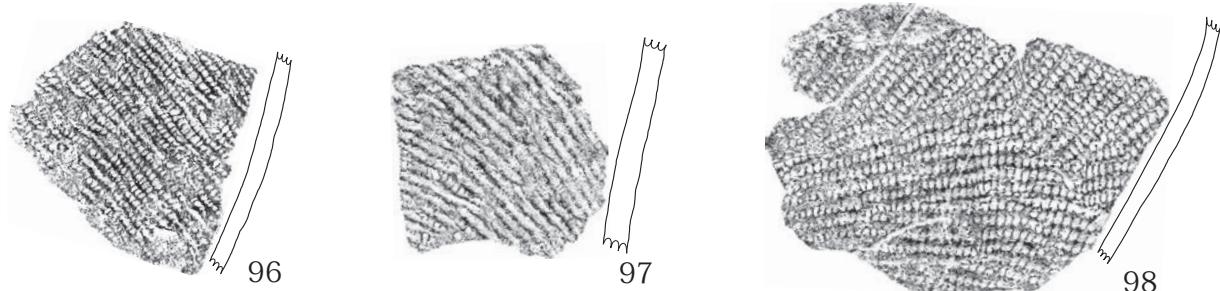
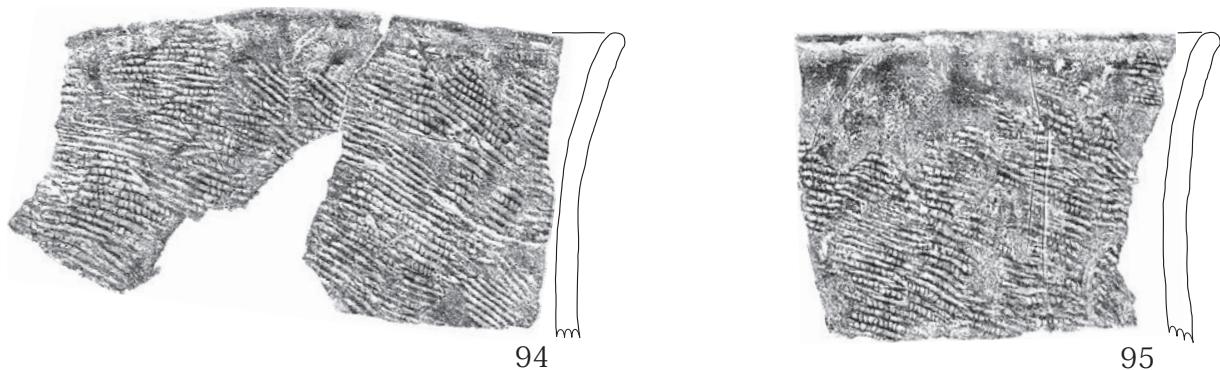
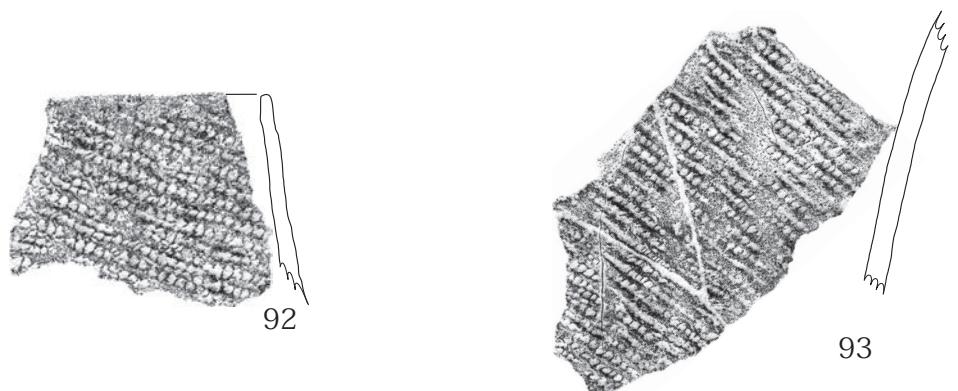
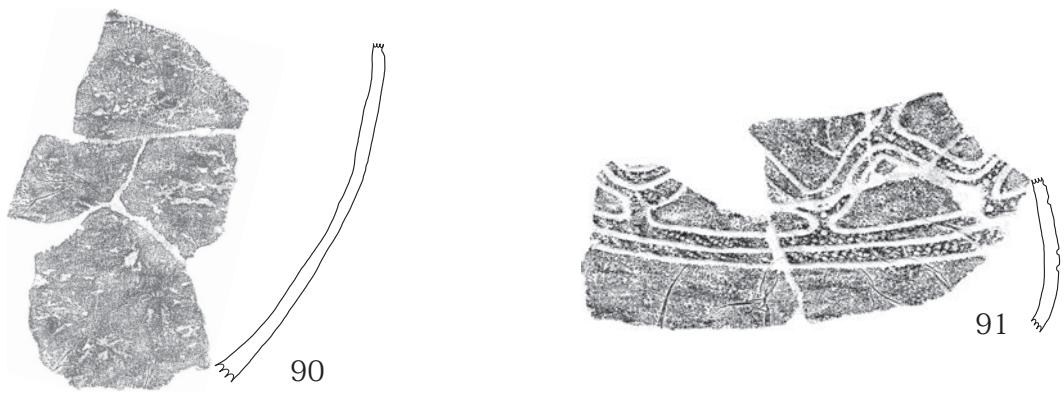
0 5 10cm
(S=1/3)



0 5 10cm
(S=1/3)

B地区 3区 包含層3

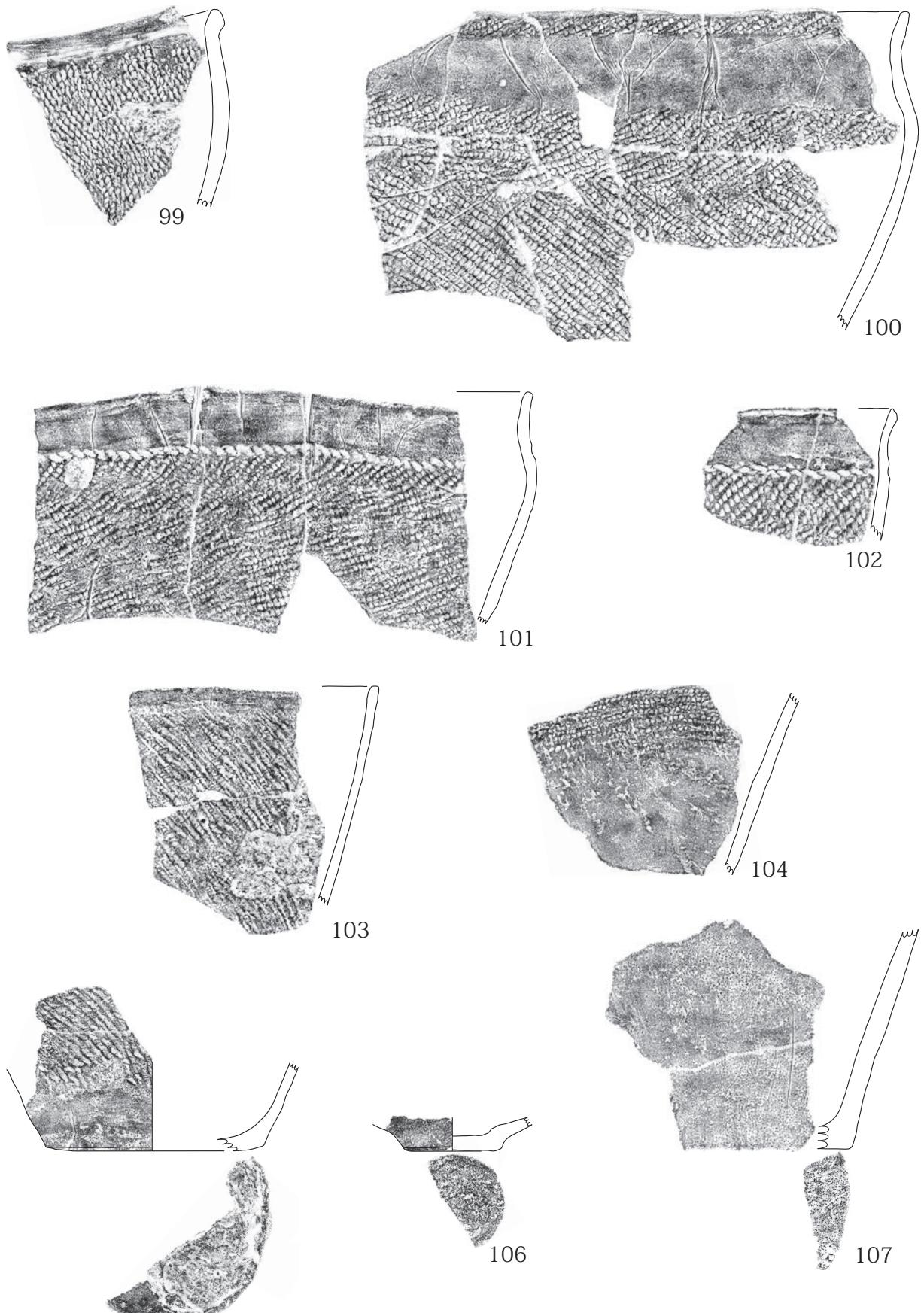
第23図 出土土器 (9)



B地区 3区 包含層3

0 5 10cm
(S=1/3)

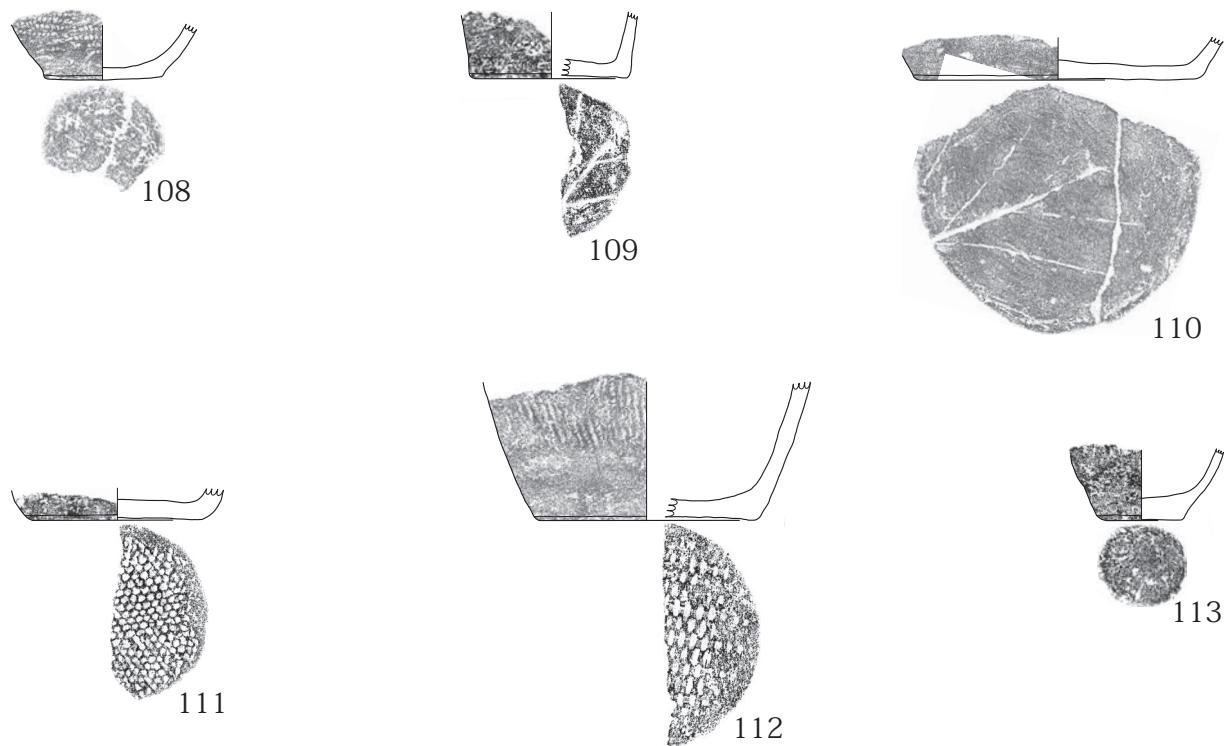
第24図 出土土器 (10)



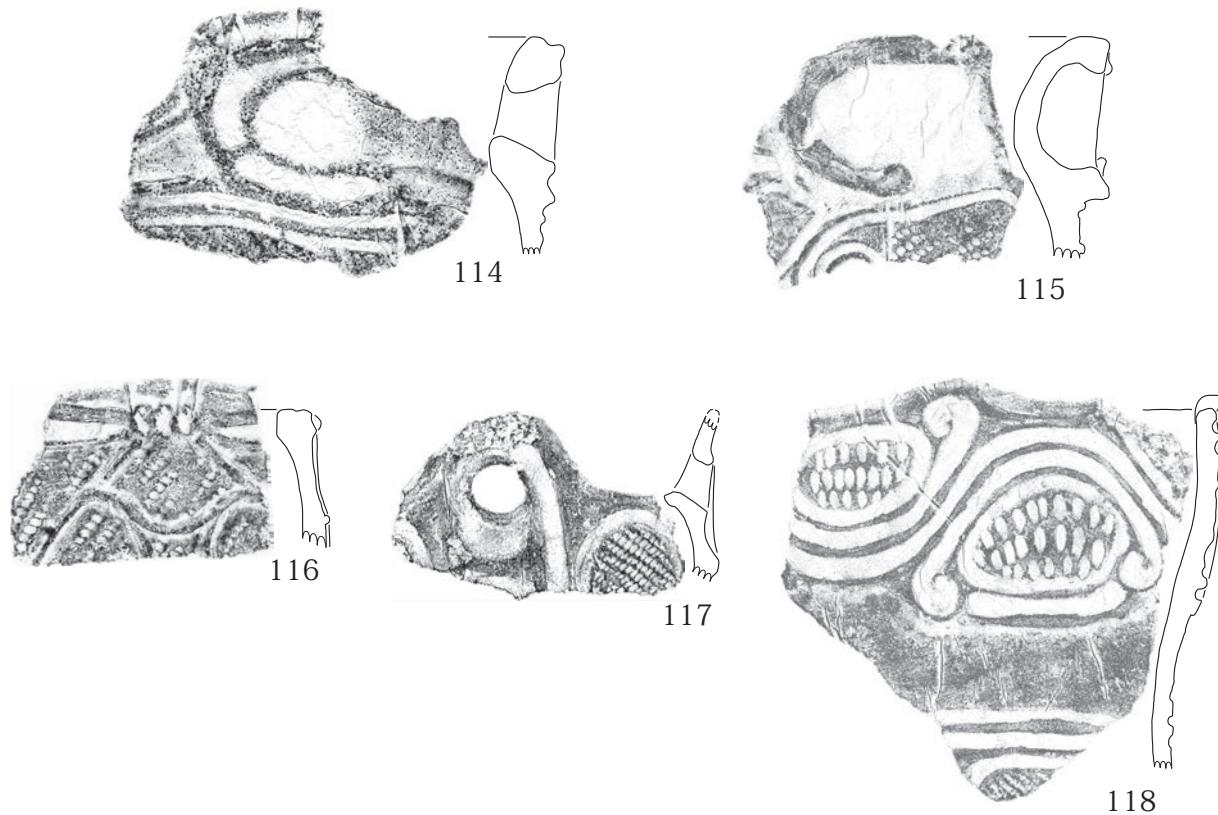
B地区 3区 包含層3

第25図 出土土器 (11)

0 5 10cm
(S=1/3)



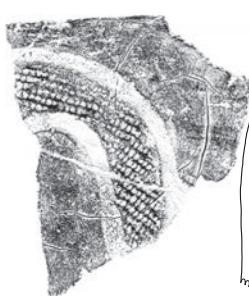
B地区 3区 包含層3



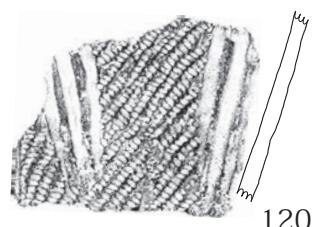
B地区 3区 包含層4

0 5 10cm
(S=1/3)

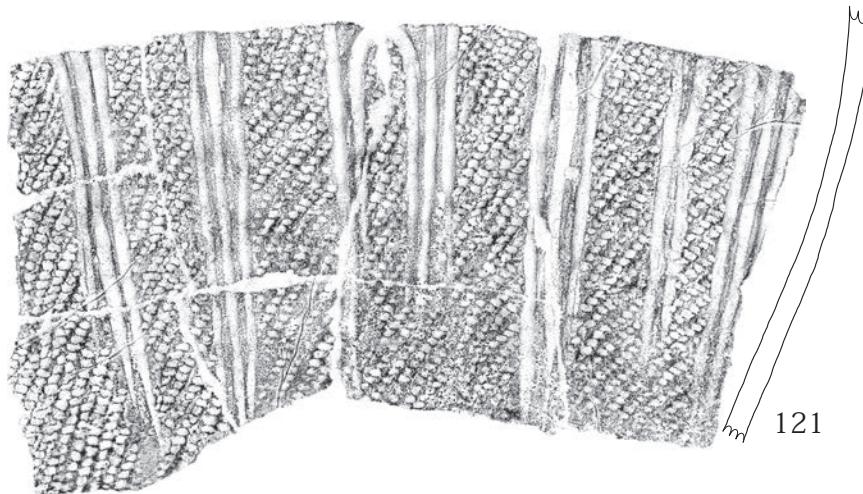
第26図 出土土器 (12)



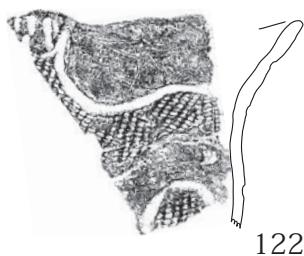
119



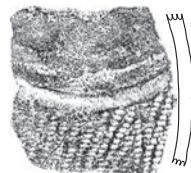
120



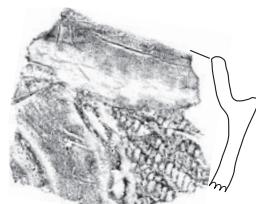
121



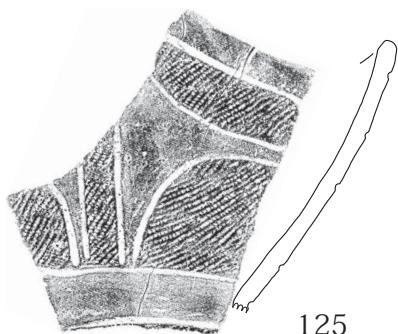
122



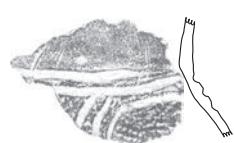
123



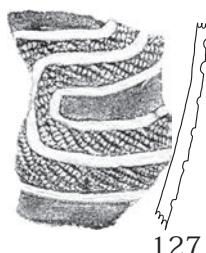
124



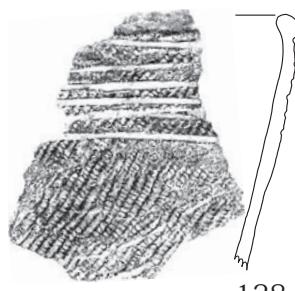
125



126



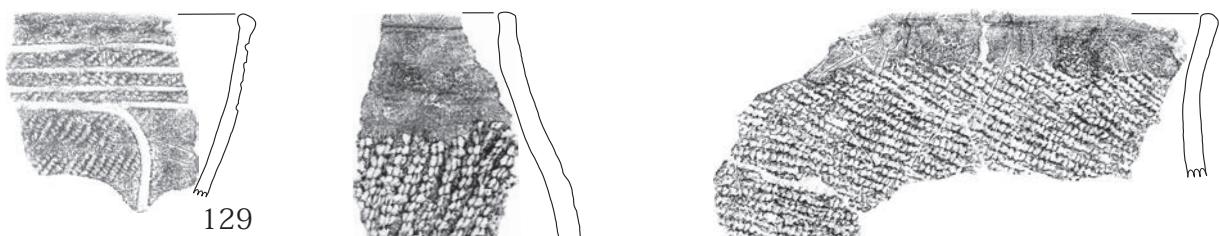
127



128

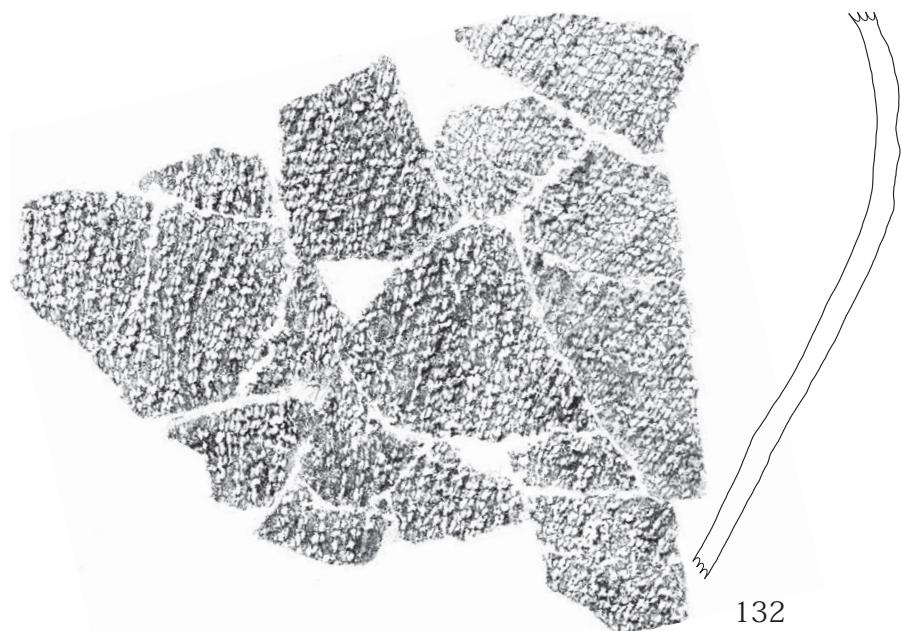
B地区 3区 包含層4

第27図 出土土器 (13)

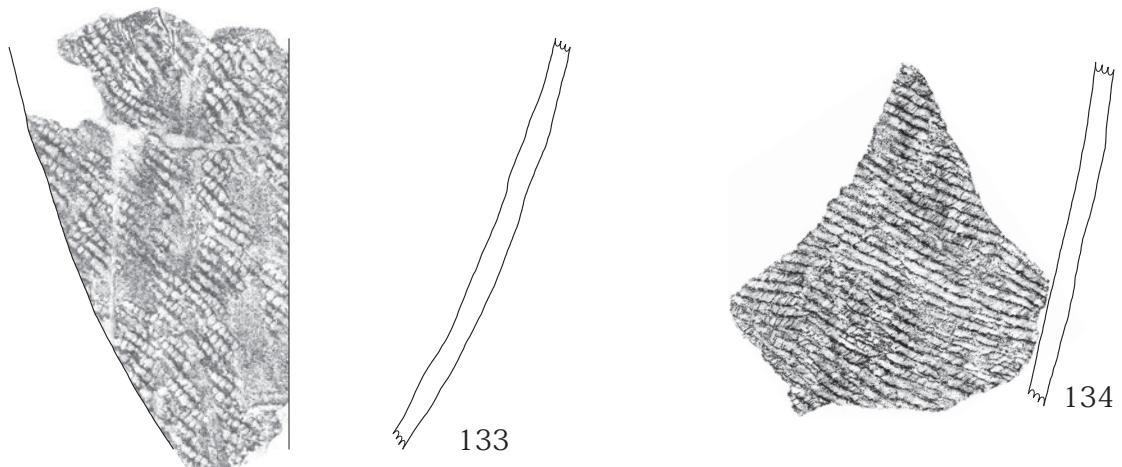


130

131



132



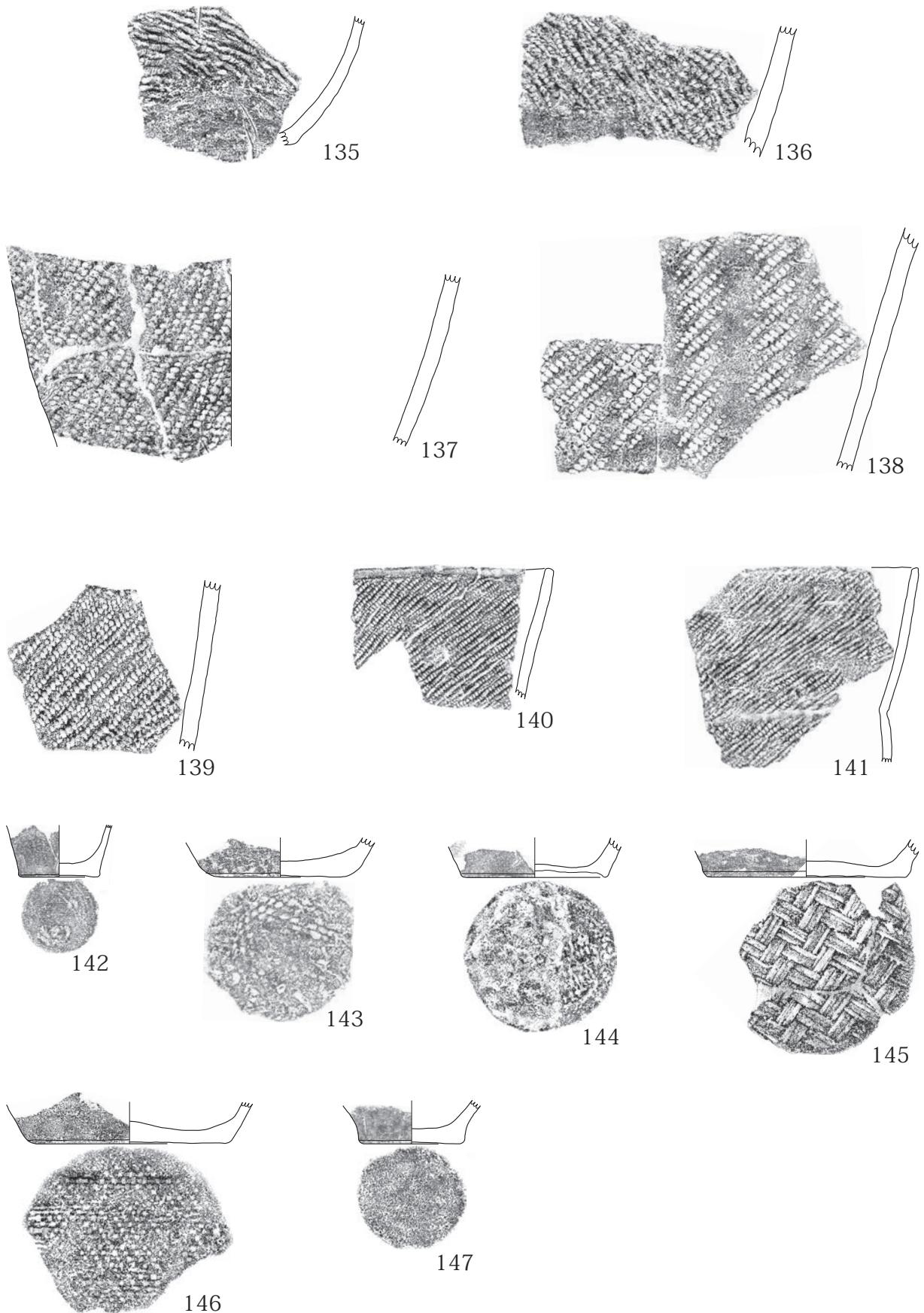
133

134

0 5 10cm
(S=1/3)

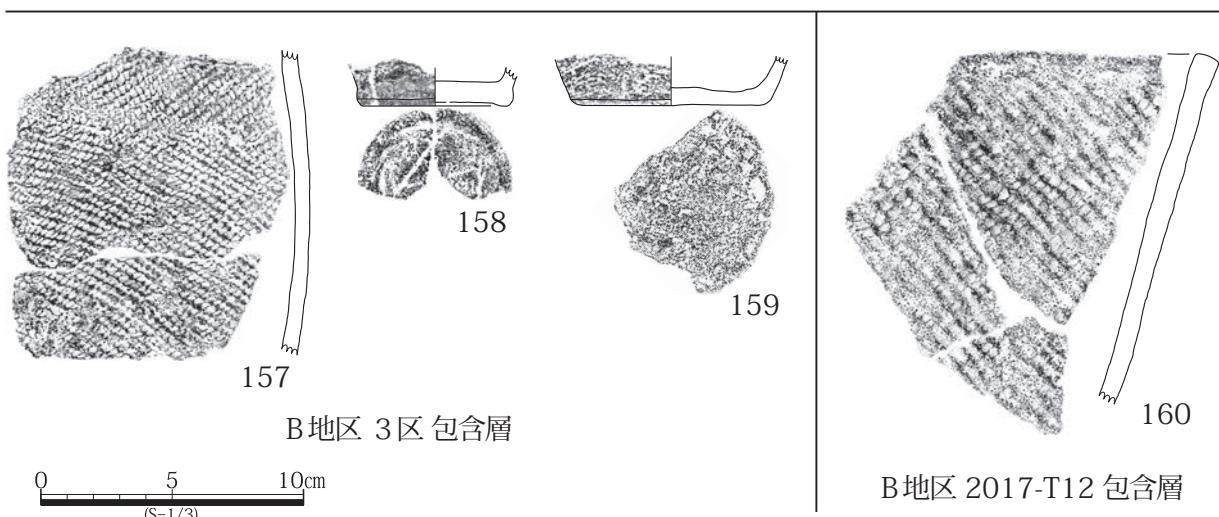
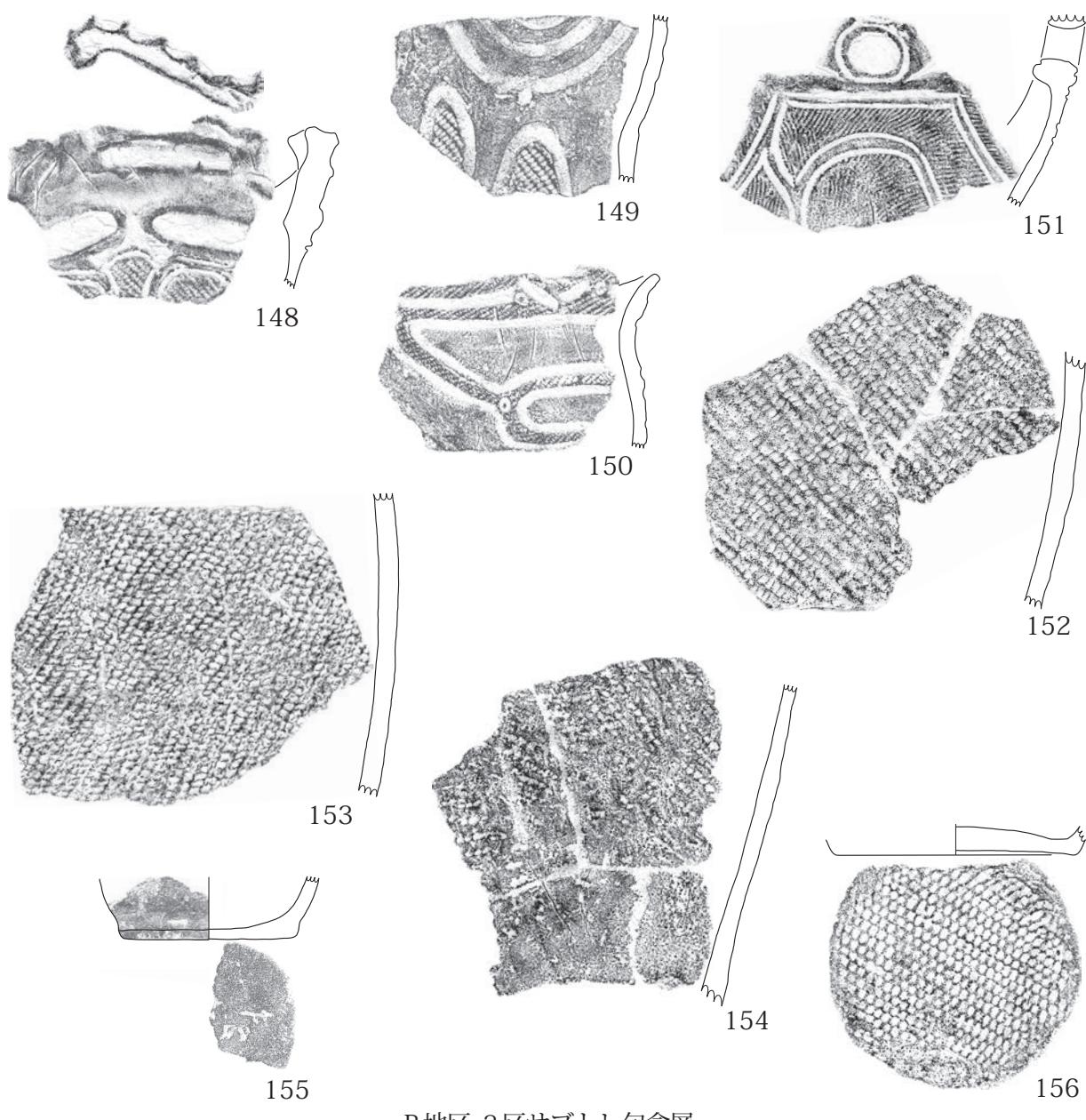
B地区 3区 包含層4

第28図 出土土器 (14)



B地区 3区 包含層 4
第29図 出土土器 (15)

0 5 10cm
(S=1/3)



第30図 出土土器 (16)

第4表 土器観察表

図No.	区	出土地点	器種	部位・法量 (cm)	特徴 外面 / 内面	時期	分類
1	C	2018-T3 7層	深鉢	胴	浅い沈線→LR 縦(縄文充填)→縦ミガキ / 斜め・横ミガキ	大木9	3.2
2		2019-T1 2層	深鉢	口縁	平縁・外反・薄手、LR 縦→沈線(横方向曲線文か)→ミガキ / ミガキ	大木10	4.2
3		2019-T1 2層	深鉢	胴底・底径 9.8	胴部横ミガキ、底面網代痕(網代2本潜り1本越え) / ミガキ		底部
4	1区 SI1 石窯炉	深鉢	胴	LR 縦→沈線(逆Jか逆U字文)→ミガキ / 磨滅	大木9	3.2	
5	1区 SI1 1層	深鉢	口縁~胴	波状口縁、直立気味、薄手、Lか結節縦→補修孔 / ナデ	中期後葉	7.1	
6	1区 SI1 1層	深鉢	口縁~胴	平縁・外傾・薄手、LR 縦 / ナデ	中期後葉	7.1	
7	1区 SI1 1層	深鉢	胴底・底径 6.6	ミガキ / ミガキ		底部	
8	1区 SI10	深鉢	口縁	波状口縁、内湾、薄手、沈線(楕円文)→RL 縦(縄文充填)→ミガキ / ミガキ	大木9	3.2	
9	1区 SI10	深鉢	口縁	波状口縁、内湾、薄手、沈線(楕円文)→RL 縦(縄文充填)→ミガキ / 磨滅	大木9	3.2	
10	1区 SI10	深鉢	口縁	平縁・外反、LR 縦→沈線(区画文)→ミガキ(磨消縄文) / ミガキ	大木9	3.2	
11	1区 SI10	深鉢	胴	RL 縦→沈線(区画文) / ミガキ	大木9	3.2	
12	1区 SI10	深鉢	胴	LR 縦→浅い沈線(区画文)→ミガキ(磨消縄文) / ミガキ	大木9	3.2	
13	1区 SI10	深鉢	口縁~胴	波状口縁、内湾、LR 縦・斜(横走)→縦ナデ / ミガキ	中期後葉	7.1	
14	1区 SI10	深鉢	口縁	平縁、直立気味、LR 斜(横走) / ミガキ		7.1	
15	1区 SI10	深鉢	胴	LR 斜(横走) / 磨滅		7.1	
16	1区 SI10	深鉢	胴	LR 斜(横走)、煤付着 / ミガキ、上部炭化物付着		7.1	
17	1区 SI10	深鉢	胴	RL 縦 / ミガキ	中期後葉	7.1	
18	1区 SI10	深鉢	胴	L 縦 / ミガキ		7.1	
19	1区 SI10	深鉢	胴	LR 縦→縦ナデ / 磨滅	中期後葉	7.1	
20	1区 SI10	深鉢	胴底・底径 6.4	磨滅 / ミガキ		底部	
21	1区 SI10	深鉢	底・底径 2.8	ミガキ / ナデ		底部	
22	1区 SK9 2層	深鉢	口縁~胴	波状口縁、外反、低い隆帯・RL 縦→沈線(楕円文)、磨滅 / 磨滅	大木9	3.2	
23	1区 SK9 2層	深鉢	胴	低い隆帯・RL 縦→沈線(楕円文) / ミガキ	大木9	3.2	
24	1区包含層3	深鉢	口縁	平縁・外反、LR 斜(横走) / 磨滅		7.1	
25	1区包含層3	深鉢	胴	LR 縦 / ミガキ	中期後葉	7.1	
26	1区包含層3	深鉢	胴	LR 縦 / ミガキ	中期後葉	7.1	
27	1区包含層3	深鉢	胴底・底径(9.8)	胴部 LR 縦→ミガキ、底部ミガキ / 磨滅		底部	
28	1区包含層2	深鉢	口縁	波状口縁、把手(円孔)、内湾、C字状隆線・沈線 / 磨滅	大木8a	2.1	
29	1区包含層2	深鉢	口縁	波状口縁、内湾、RL 橫→隆帯(渦巻文) / 磨滅	大木8b	2.2	
30	1区包含層2	深鉢	口縁	平縁、内湾、RL 橫→隆線・沈線 / 磨滅	大木8b	2.2	
31	1区包含層2	深鉢	口縁	平縁、内湾、隆帯・LR 橫・斜(横走)→沈線(渦巻文)→隆帯ミガキ / ミガキ	大木8b	2.2	
32	1区包含層2	深鉢	口縁	外反、隆帯→刺突、LR 縦→沈線(渦巻文) / 粗いミガキ	大木8b	2.2	
33	1区包含層2	深鉢	胴	RLR 縦→隆線・沈線(渦巻文) / ナデ	大木8b	2.2	
34	1区包含層2	深鉢	胴	RLR 縦→沈線(渦巻文) / ミガキ	大木8b	2.2	
35	A	1区包含層2	深鉢	口縁	波状口縁、内湾、隆線・LR 縦→浅い沈線 / ミガキ	大木9	3.2
36		1区包含層2	深鉢	口縁	平縁、外反、LR 縦→沈線→ミガキ(磨消縄文) / 磨滅	大木9	3.2
37	1区包含層2	深鉢	口縁~胴	波状口縁、外反、LR 縦→沈線(波状・区画文)→ミガキ / ミガキ	大木9	3.2	
38	1区包含層2	深鉢	胴底・底径 5.6	胴部 RL 縦→沈線) (逆U字文下部)、底部ナデ / ミガキ	大木9	3.2	
39	1区包含層2	深鉢	口縁~胴	平縁、口縁部ミガキ、胴部 LR 縦 / 口縁部ミガキ、胴部磨滅	中期後葉	7.1	
40	1区包含層2	深鉢	口縁~胴	平縁、内湾、LR 縦 / 磨滅	中期後葉	7.1	
41	1区包含層2	深鉢	胴	LR 縦 / ミガキ	中期後葉	7.1	
42	1区包含層2	深鉢	底・底径(18.2)	底面網代痕(2本潜り2本越え) / 磨滅		底部	
43	1区包含層2	深鉢	胴底	胴部 RL 縦、底部磨滅 / 磨滅		底部	
44	2区包含層	深鉢	胴	LR 縦→沈線(蕨状・楕円文か) / ナデ	大木8b	2.2	
45	2区包含層	深鉢	口縁	波状口縁、内湾、隆帯→LR 斜(横走)・縦→沈線(蕨状・区画文)→隆帯ミガキ / ミガキ	大木9	3.1	
46	2区包含層	深鉢	胴	RL 縦→沈線(逆U字文か)、煤付着 / 磨滅	大木9	3.2	
47	2区包含層	深鉢	胴	L 縦 / ミガキ	中期後葉	7.1	
48	2区包含層	深鉢	胴底・底径 10.0	底部ナデ→胴部 LR 縦 / ナデ		底部	
49	2017-T3 包含層	深鉢	胴	LR 斜(横走)→沈線 / 横ナデ	大木8b	2.2	
50	2017-T3 包含層	深鉢	口縁~胴	波状口縁、内湾、隆帯→LR 斜(横走)→沈線(渦巻文)→隆帯ミガキ / ミガキ	大木9	3.1	
51	2017-T3 包含層	深鉢	胴	沈線(逆Jか逆U字文)→RL 縦・斜(縦走)、縄文充填 / ミガキ	大木9	3.2	
52	2017-T3 包含層	深鉢	口縁	平縁、内湾、口縁肥厚、LR 橫・斜(横走)→口縁粘土貼り付け・横ナデ / 横ナデ		7.3	
53	2017-T3 包含層	深鉢	底・底径 10.0	ナデ / ナデ		底部	
54	2017-T3 サブトレ包含層	深鉢	口縁	波状口縁、内湾、LR 橫・斜(横走)→隆帯・沈線(渦巻・蕨状文)→ミガキ / ミガキ	大木9	3.1	
55	2017-T3 サブトレ包含層	深鉢	胴底、底径 6.2	胴部 LR 縦→底部ミガキ / ミガキ		底部	
56	2017-T3 サブトレ包含層	鉢	口縁~底・器高 1.9	波状口縁、平底、平面形は円形または小判型、ミガキ / ミガキ		小型	
57	2017-T11 包含層	深鉢	胴	薄手、沈線(横方向曲線文か)→LRL 縦・斜(縦走)、縄文充填 / ミガキ	大木10	4.1	
58	2017-T11 包含層	深鉢	胴	RLR 縦→沈線(横方向曲線文)→刺突・逆U字粘土貼り付け→ミガキ / ミガキ	大木10	4.2	
59	2017-T4 包含層	深鉢	胴	LR 縦→沈線 / 縦ケズリ→ミガキ	大木6	1	

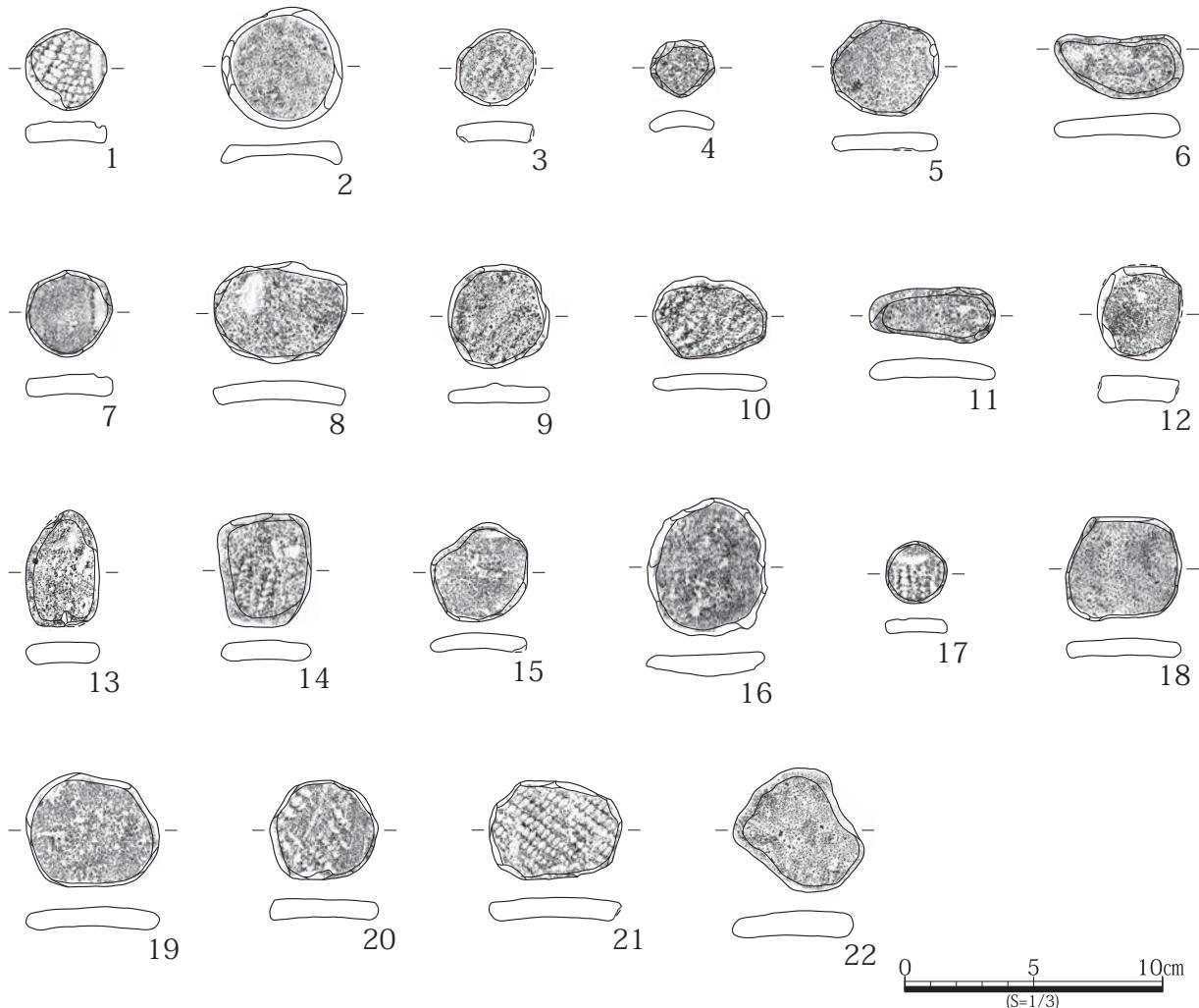
図No	区	出土地点	器種	部位・法量 (cm)	特徴 外面 / 内面	時期	分類
60	A	2017-T4 包含層	深鉢	口縁～胴	波状口縁、外反、胴部 LR 縦→隆線・沈線、口縁部隆帯・沈線（渦巻文）→ミガキ / ミガキ	大木 8b	2.2
61		2017-T4 包含層	深鉢	口縁～胴	平縁、内弯、RLR 横→口縁隆帯・沈線（渦巻・区画文）→口頸部ミガキ / ミガキ	大木 8b	2.2
62		2017-T4 包含層	深鉢	口縁～胴	平縁、内弯、口縁部隆帯→RL 横→沈線（渦巻・区画文）→ミガキ、頸胴部 RL 縦→沈線（渦巻文か）/ ミガキ	大木 8b	2.2
63		2017-T4 包含層	深鉢	頸胴	厚手、RLR 縦→隆帯 2 条貼り付け→頸部ミガキ / ミガキ	大木 8b	2.2
64		2017-T4 包含層	深鉢	胴	厚手、RLR 縦→隆帯 2 条貼り付け・沈線 / ミガキ	大木 8b ~ 9	2.2
65		2017-T4 包含層	深鉢	胴	LR 縦→沈線（渦巻文か）/ ミガキ	大木 8b	2.2
66		2017-T4 包含層	深鉢	胴	LR 縦→沈線（剣先付渦巻文）/ ミガキ	大木 8b	2.2
67		2017-T4 包含層	深鉢	胴底・底径 (7.0)	底面僅かに窪む、胴部沈線（逆 U 字文下部）、底部ミガキ / ミガキ	大木 9	3.2
68		2017-T4 包含層	深鉢	胴	LR 縦 / ミガキ	中期後葉	7.1
69		2017-T4 包含層	深鉢	口縁～底・口径 (11.5) 器高 17.4	小波状口縁、外反、口縁～胴部 LR 縦→口縁端部ミガキ、底部ミガキ、煤付着 / ミガキ	中期後葉	7.1
70		2017-T4 包含層	深鉢	底・底径 8.2	薄手、僅かに窪む、ミガキ / ミガキ		底部
71		3 区包含層 2	深鉢	口縁	波状口縁、内弯、単軸絡条体 1 種 L 縦→隆帯・沈線（渦巻文）→隆帯ミガキ / ミガキ	大木 8b	2.2
72		3 区包含層 2	深鉢	胴	LR 縦→隆線（曲線）/ ミガキ	大木 8b	2.2
73		3 区包含層 2	深鉢	口縁～胴	波状口縁、内弯、LR 縦→沈線（楕円文）→ミガキ / ミガキ	大木 9	3.2
74		3 区包含層 2	深鉢	口縁	平縁、内弯、LR 縦→沈線（楕円・円・波状文）/ ミガキ	大木 9	3.2
75		3 区包含層 2	深鉢	口縁～胴	平縁、直立気味、口縁隆帯→ミガキ、胴部 RLR 縦 / ミガキ	中期	
76		3 区包含層 2	深鉢	胴底・底径 (5.0)	薄手、底部磨滅、胴部 LR 縦→沈線 / 磨滅		底部
77		3 区包含層 2	深鉢	胴底・底径 (13.6)	厚手、底部ナデ、胴部 LR 縦 / ミガキ		底部
78		3 区包含層 2	浅鉢	胴底	底面網代痕（編み途中の端部）、胴部 LR 縦→ミガキ		底部
79		3 区包含層 3	深鉢	胴	結束第 1 種 RL・LR 縦（羽状繩文）→沈線（半截竹管斜線）/ ナデ	大木 6	1
80		3 区包含層 3	深鉢	口縁～胴	波状口縁、内弯、LR 横→隆帯貼り付けナデ→口縁端部ミガキ / ミガキ	大木 8b	2.2
81		3 区包含層 3	深鉢	胴	厚手、隆帯→RLR 縦→沈線（渦巻文）→隆帯ミガキ / 磨滅	大木 8b	2.2
82		3 区包含層 3	深鉢	胴	隆帯→RL 横→沈線（蕨状・逆 U 字文）→隆帯ミガキ / ミガキ	大木 9	3.1
83		3 区包含層 3	深鉢	口縁～胴	波状口縁、外反、口縁部沈線→ミガキ、胴部 LR 縦→沈線（円・楕円文）→ミガキ（磨消繩文）/ ミガキ	大木 9	3.2
84		3 区包含層 3	深鉢	口縁～胴	平縁、外反、L 縦・LR 縦→沈線（逆 U 字文下部か）→ミガキ / ミガキ	大木 9	3.2
85		3 区包含層 3	深鉢	胴	LR 横→沈線（逆 U 字文下部）→ミガキ（磨消繩文）/ ミガキ	大木 9	3.2
86		3 区包含層 3	浅鉢	胴底・底径 6.2	胴部 RLR 縦→沈線（逆 U 字文下部）→底部ミガキ / ミガキ	大木 9	3.2
87		3 区包含層 3	深鉢	口縁	波状口縁、外反、薄手、低い隆線（曲線文）・RL 横→ミガキ	大木 10	4.1
88		3 区包含層 3	深鉢	口縁～胴	平縁、外反、薄手、LR 縦→沈線（区画・鎖状文）→口縁部ミガキ / ミガキ	後期前葉	6.1
89		3 区包含層 3・4	壺	口縁～胴・口径 (9.0) 胴部径 20.0	平縁、外反、口縁 LR 横→沈線、頸部沈線→LR 横→沈線（繩文充填）→ミガキ、胴部沈線→LR 縦・横・斜（横走）→平行沈線→ミガキ / 口頸部ミガキ、胴部横ナデ（刷毛目）	十腰内 1	6.2
90		3 区包含層 3	壺	胴	沈線（繩文充填）→LR 横→ミガキ / ナデ（刷毛目）	十腰内 1	6.2
91		3 区包含層 3	深鉢	胴	RL 縦→沈線・刺突→ミガキ（磨消帶繩文）/ ミガキ	十腰内 1	6.2
92		3 区包含層 3	深鉢	口縁～胴	平縁、内傾、LR 縦 / 磨滅	中期後葉	7.1
93		3 区包含層 3	深鉢	胴	LR 縦→縋ナデ / ミガキ	中期後葉	7.1
94		3 区包含層 3	深鉢	口縁～胴	平縁、外反、L 縦・斜（横走）→口縁部粗いミガキ / ナデ	中期後葉	7.1
95		3 区包含層 3	深鉢	口縁～胴	平縁、外反、L 縦・斜（横走）→口縁部粗いミガキ / ナデ→粗いミガキ	中期後葉	7.1
96		3 区包含層 3	深鉢	胴	LR 縦 / 磨滅		7.1
97		3 区包含層 3	深鉢	胴	LR 縦 / ミガキ		7.1
98		3 区包含層 3	深鉢	胴	LR 横・斜（横走）/ ミガキ		7.2
99		3 区包含層 3	深鉢	口縁～胴	波状口縁、口縁肥厚、内弯、RL 斜（縋走）→口縁部粘土貼付→ミガキ / ミガキ		7.3
100		3 区包含層 3	深鉢	口縁～胴	平縁、外反、口縁 LR 横、肩部 LR 横→胴部 LR 縦（羽状繩文）→頸部ミガキ / ミガキ	後期	7.4
101		3 区包含層 3	深鉢	口縁～胴	平縁、直立気味、頸部 LR 押圧→胴部 LR 横、口頸部ミガキ / ミガキ	後期	7.5
102		3 区包含層 3	深鉢	口縁～胴	/ ミガキ平縁、直立気味、薄手、胴部 LR 横→頸部 LR 押圧→ミガキ		7.5
103		3 区包含層 3	深鉢	口縁～胴	平縁、外傾、薄手、胴部 L 縦→口縁部ミガキ / ミガキ		7.6
104		3 区包含層 3	深鉢	胴底	薄手、LR 斜（横走）→底部ミガキ / ミガキ		底部
105		3 区包含層 3	深鉢	胴底・底径 (11.2)	胴部 L 縦→底部ミガキ / ナデ（刷毛目）		底部
106		3 区包含層 3	浅鉢	胴底・底径 (5.2)	ミガキ / ナデ		底部
107		3 区包含層 3	深鉢	胴底	胴部ミガキ、底部磨滅 / 磨滅		底部
108		3 区包含層 3	深鉢	胴底・底径 4.8	胴部 LRL 横・縦→ミガキ、底部ミガキ / ミガキ		底部
109		3 区包含層 3	深鉢	胴底・底径 (6.4)	底面木葉痕跡→胴底部ミガキ / ミガキ		底部
110		3 区包含層 3	鉢	胴底・底径 11.5	底面木葉痕跡→胴底部ミガキ / ミガキ		底部
111		3 区包含層 3	深鉢	底・底径 (7.4)	底面網代痕跡（ござ目 1 本潜り 1 本越え）→ミガキ / ミガキ		底部

図No.	区	出土地点	器種	部位・法量 (cm)	特徴 外面 / 内面	時期	分類
112		3区包含層 3	深鉢	胴底・底径(9.0)	底面網代痕（ござ目1本潜り1本越え）、胴部L縦→ミガキ／ミガキ		底部
113		3区包含層 3	小型土器	胴底・底径 3.5	ナデ→粗いミガキ／ナデ		底部
114		3区包含層 4	深鉢	口縁	波状口縁、内弯、把手（円孔）、C字状隆帯・沈線、RL横→隆線・沈線／磨滅	大木 8a	2.1
115		3区包含層 4	深鉢	口縁	波状口縁、内弯、把手（C字状突起）、C字状隆帯、LR横→隆線・沈線／ミガキ	大木 8a	2.1
116		3区包含層 4	深鉢	口縁	平縁、内弯、厚手、RL縦→隆線→RL側面押圧／粗いミガキ	大木 8a	2.2
117		3区包含層 4	深鉢	口縁	波状口縁、突起、円孔、LR縦、隆線・沈線（渦巻文・逆U字文か）／ミガキ	大木 9	3.1
118		3区包含層 4	深鉢	口縁～胴	平縁（突起）、内弯、胴部LR縦→隆線・沈線（区画文）→ミガキ、口縁部隆帯→刺突→沈線（渦巻・区画文）→ミガキ／ミガキ	大木 9	3.2
119		3区包含層 4	深鉢	口縁～胴	波状口縁、外反、薄手、LR縦→沈線（逆U字文）→ミガキ／ミガキ	大木 9	3.2
120		3区包含層 4	深鉢	胴	薄手、RL縦→隆線・沈線→ミガキ／ナデ	大木 9	3.2
121		3区包含層 4	深鉢	胴	厚手、RL縦→隆線・沈線（逆U字文下部）／ミガキ	大木 9	3.2
122		3区包含層 4	深鉢	口縁～胴	波状口縁、外反、薄手、RL縦→刺突→沈線（曲線文）→ミガキ／ミガキ	大木 10	4.1
123		3区包含層 4	深鉢	胴	RL縦→沈線（曲線文）→ミガキ／ミガキ	大木 10	4.1
124		3区包含層 4	深鉢	口縁～胴	波状口縁、内傾、胴部RL横→隆帯・刺突→ミガキ／ミガキ	門前	5
125		3区包含層 4	深鉢	口縁	波状口縁、内弯、薄手、RL縦→沈線（区画文）→ミガキ／ミガキ	十腰内 1 併行	6.2
126		3区包含層 4	壺	頸胴	頸部ミガキ、胴部LR縦・横・斜→沈線（区画文）→ナデ（磨消繩文）／胴部削り→頸胴部ミガキ	後期前葉 ～中葉	6.3
127		3区包含層 4	深鉢	胴	LR縦・横・斜（横走）→沈線→ナデ（磨消帶繩文）／ナデ	後期前葉	6.2
128		3区包含層 4	深鉢	口縁～胴	平縁、内弯気味、薄手、RL縦→口縁沈線6条／ナデ	後期前葉 ～中葉	6.4
129		3区包含層 4	深鉢	口縁～胴	平縁、内弯気味、薄手、RL縦→口縁沈線4状、胴部弧線（区画文）→ナデ（磨消繩文）／ナデ	後期前葉 ～中葉	6.4
130		3区包含層 4	深鉢	口縁～胴	平縁、内傾、厚手、RLR縦→口縁部ミガキ／ミガキ	中期後葉	7.1
131		3区包含層 4	深鉢	口縁～胴	平縁、外反、胴部LR縦→口縁部ミガキ／ミガキ	中期後葉	7.1
132		3区包含層 4	深鉢	胴	厚手、RLR縦、煤付着／ナデ→粗いミガキ	中期後葉	7.1
133		3区包含層 4	深鉢	胴	胴部LR縦→底部ミガキ／ミガキ	中期後葉	7.1
134		3区包含層 4	深鉢	胴	L縦／ミガキ	中期後葉	7.1
135		3区包含層 4	深鉢	胴底	胴部L縦→ミガキ、底部ミガキ／ミガキ		7.1
136		3区包含層 4	深鉢	胴底	胴部LR縦→底部ミガキ／磨滅	中期後葉	7.1
137		3区包含層 4	深鉢	胴	厚手、RL縦／ミガキ	中期後葉	7.1
138	B	3区包含層 4	深鉢	胴	RL縦／縦ナデ（刷毛目）→粗いミガキ	中期後葉	7.1
139		3区包含層 4	深鉢	胴	LR横／ミガキ		7.2
140		3区包含層 4	深鉢	口縁～胴	平縁、外傾、薄手、LR横→口縁端部ミガキ／ミガキ		7.6
141		3区包含層 4	深鉢	口縁～胴	平縁、内弯、薄手、RL縦／ミガキ	中期後葉	7.6
142		3区包含層 4	深鉢	胴底・底径 4.2	ミガキ／ミガキ	底部	
143		3区包含層 4	深鉢	底・底径 7.8	底面網代痕（ござ目1本潜り1本越え）→磨滅／ナデ→ミガキ	底部	
144		3区包含層 4	深鉢	胴底・底径 7.8	底面網代痕（ござ目1本潜り1本越え）→胴部ミガキ／ナデ→ミガキ	底部	
145		3区包含層 4	深鉢	胴底・底径 (11.0)	底面網代痕（網代2本潜り2本越え）→胴部ミガキ／ミガキ	底部	
146		3区包含層 4	深鉢	胴底・底径 (10.8)	底部網代痕（網代2本潜り1本越え）、胴部ミガキ／磨滅	底部	
147		3区包含層 4	深鉢	胴底・底径 5.6	胴部ミガキ、底部磨滅／磨滅	底部	
148		3区サブトレ包含層	深鉢	口縁	波状口縁（渦巻状橋状突起）、内弯、隆帯、LR縦→隆線→沈線→粗いミガキ／粗いミガキ	大木 8a	2.1
149		3区サブトレ包含層	深鉢	胴	LR縦→沈線（区画文）→ミガキ／ミガキ	大木 9	3.2
150		3区サブトレ包含層	深鉢	口縁～胴	波状口縁、外反、LR横・斜（横走）→沈線→刺突・ミガキ（磨消帶繩文）／ミガキ	十腰内 1	6.2
151		3区サブトレ包含層	華燭	口縁	波状口縁、内弯、突起の先端を欠く、LR縦・横・斜（縦・横走）→沈線（幾何学文）→ミガキ／ミガキ	十腰内 2	6.2
152		3区サブトレ包含層	深鉢	胴	LR縦／ミガキ	中期後葉	7.1
153		3区サブトレ包含層	深鉢	胴	RL縦／粗いミガキ	中期後葉	7.1
154		3区サブトレ包含層	深鉢	胴底	LRL縦→底部ミガキ／ミガキ	中期後葉	7.1
155		3区サブトレ包含層	壺	胴底・底径 (8.2)	ミガキ／ミガキ	底部	
156		3区サブトレ包含層	鉢	底・底径 11.2	底面網代痕（ござ目1本潜り1本越え）／ミガキ	底部	
157		3区包含層	深鉢	胴	下部LR縦→上部LR横（羽状繩文）／ミガキ	後期	7.4
158		3区包含層	深鉢	底・底径 6.2	ナデ／ナデ	底部	
159		3区包含層	深鉢	胴底・底径 (8.0)	削り／ナデ	底部	
160		2017-T12包含層	深鉢	口縁～胴	平縁、外傾、LR縦／ミガキ	中期後葉	7.1

(2) 土製品

円盤状土製品（第31図）

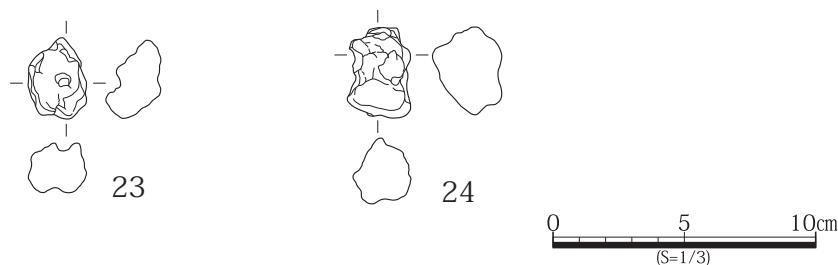
残存状態の良好な22点を報告する。土器片の縁辺を円盤状に整形したもので、平面形は円・橢円・方・木葉形などを呈する。研磨の範囲は、側縁のみと全面に及ぶものがある。1～3区および、2017-T 3・4・7の各遺物包含層から出土した。



第31図 出土円盤状土製品

焼粘土塊（第32図）

2017-T 7の遺物包含層から2点出土した。胎土にはシャモットを含み、砂粒が少ないので、土器・土製品素材の粘土と推測できる。

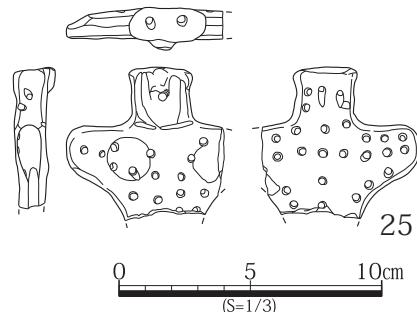


第32図 出土焼粘土塊

土偶（第33図）

3区包含層3から出土した。円形刺突で飾られた土偶で、胴下半と左腕を欠く。胸部に乳房の剥離痕が円形に残る。頭頂部（頭部の突起）の左右2か所を穿孔する。頸部に浅い沈線、顔面上部に突起で鼻、刺突で口を表現する。顔面以外の身体の前面と背面を刺突する。刺突の深さは3mm前後を測るが、背面中央左のみ深さが10mmを測る。円形刺突痕跡は直径2.5mmを測るので、焼成等による収縮を考慮すると刺突具は直径3mm前後の植物の管状の茎が使用されたと推測できる。

本体（基部）部分の色調は明黄褐色、胎土には細砂や円礫を含む。鼻や乳房など貼り付け部分には橙色で細砂を多く含む胎土が使用されている。基部・貼り付けに使用された胎土の焼成はともに良好で、密である。身体部分に刺突を多用する例としては、岩手県一関市清水遺跡（岩手県2002）第216・218～220・223図、陸前高田市中沢遺跡（陸前高田市2017）第29図、門前貝塚（陸前高田市1992）第149図、堂の前貝塚（陸前高田市1999）第43図、（陸前高田市2018）Ⅲ第85図、大船渡市長谷堂貝塚（岩手県2020）第165図（後期前葉）等がある。



第33図 出土土偶

第5表 土製品観察表

円盤状土製品

図No	区	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	部位	平面形	研磨	残存状態	特徴
1	C	2019-T3 2層	3.3	3.3	0.9	11.1	胴部	円形	側縁	完形	RLR 縦・沈線
7		1区包含層	3.5	3.5	0.8	12.0	胴部	円形	側縁	完形	沈線
9		2017-T7 包含層	4.2	4.1	0.9	14.9	胴部	円形	全面	完形	隆帯
2		1区SI10	4.9	4.9	1.2	20.1	底部	円形	全面	完形	摩滅
3		1区SI10	3.1	[3.1]	0.9	[8.2]	胴部	円形	全面	一部を欠く	縄文摩滅
8		1区包含層	4.1	5.4	0.8	21.2	胴部	楕円形	側縁	完形	無文
5		1区包含層2	3.9	[4.3]	0.7	[15.4]	胴部	楕円形	側縁	一部を欠く	無文
10	A	2017-T7 包含層	3.3	4.6	0.7	11.0	胴部	木葉形	側縁	完形	LR 横か
11		2017-T7 包含層	2.3	5.1	0.9	10.1	胴部	木葉形	全面	完形	摩滅
6		1区包含層1	2.6	5.2	1.0	11.1	胴部	木葉形	全面	完形	摩滅
4		1区SI10	2.3	2.6	0.6	4.0	胴部	木葉形	側縁	完形	無文
12		2区包含層	[3.8]	[3.4]	1.1	[16.6]	胴部	円形	側縁	一部を欠く	磨き（無文）
13		2区包含層	4.7	3.0	0.9	[14.4]	胴部	木葉形	全面	一部を欠く	摩滅
14		2017-T3 包含層	4.6	3.8	0.9	[18.9]	胴部	方形	側縁	下面の一部を欠く	RL 縦・斜（縦走）か
15		2017-T4 包含層	4.0	3.9	0.6	[12.0]	胴部	円形	側縁	下面の一部を欠く	沈線
17		3区包含層3	2.5	2.5	0.6	5.2	胴部	円形	側縁	完形	LR 縦→沈線
18		3区包含層2	4.2	4.7	0.7	17.7	口縁部	楕円形	側縁	完形	無文
16		3区包含層4	5.6	4.9	0.9	25.9	底部	楕円形	側縁・上面	完形	磨き（無文）
19	B	3区包含層1	4.6	5.4	0.8	25.7	胴部	木葉形	側縁	完形	無文
20		3区包含層	4.0	4.4	0.8	19.1	胴部	木葉形	側縁	完形	L 縦か
21		3区包含層	4.0	[5.4]	0.8	[25.2]	胴部	木葉形	側縁	一部を欠く	RL 横
22		3区包含層	5.0	5.3	1.1	27.0	口縁部	木葉形	全面	完形	隆帯

焼粘土塊

図No	区	出土地点	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	特徴
23	A	2017-T7 包含層	3.2	2.3	2.2	11.1	中央に刺突状の窪みを有する。シャモットを含む。砂少ない。
24		2017-T7 包含層	3.6	2.5	2.8	15.5	シャモットを含む。砂少ない。

土偶

図No	区	出土地点	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	特徴
25	B	3区包含層3	[6.1]	[6.2]	[1.2]	[45.3]	胴下部・左腕を欠く。詳細本文記載

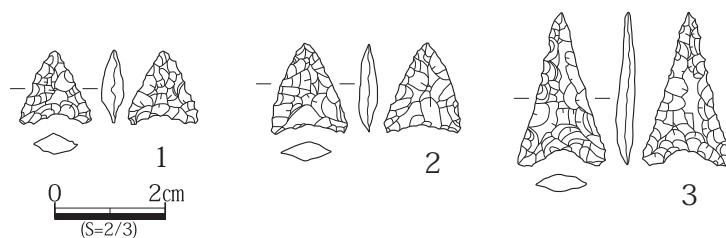
(3) 石器 (第35~40図、第6~8表)

石器の出土総数は160点で、礫石器の磨石、磨敲石、砥石が石器総数の三分の二をしめる。石器製品総数は130点で、実測図・写真を本書に掲載した石器（以下、「掲載石器」）の総数は25点、出土した石器全体の17%、製品の18%にあたる。掲載石器は攪乱層出土遺物を除き、完形品や傷のないものを中心に礫石器が多くならないように抽出した（第6表）。石材は砂岩が石器全体の31%をしめ、閃緑岩、粘板岩が続く（第8表）。

第6表 石器出土点数表

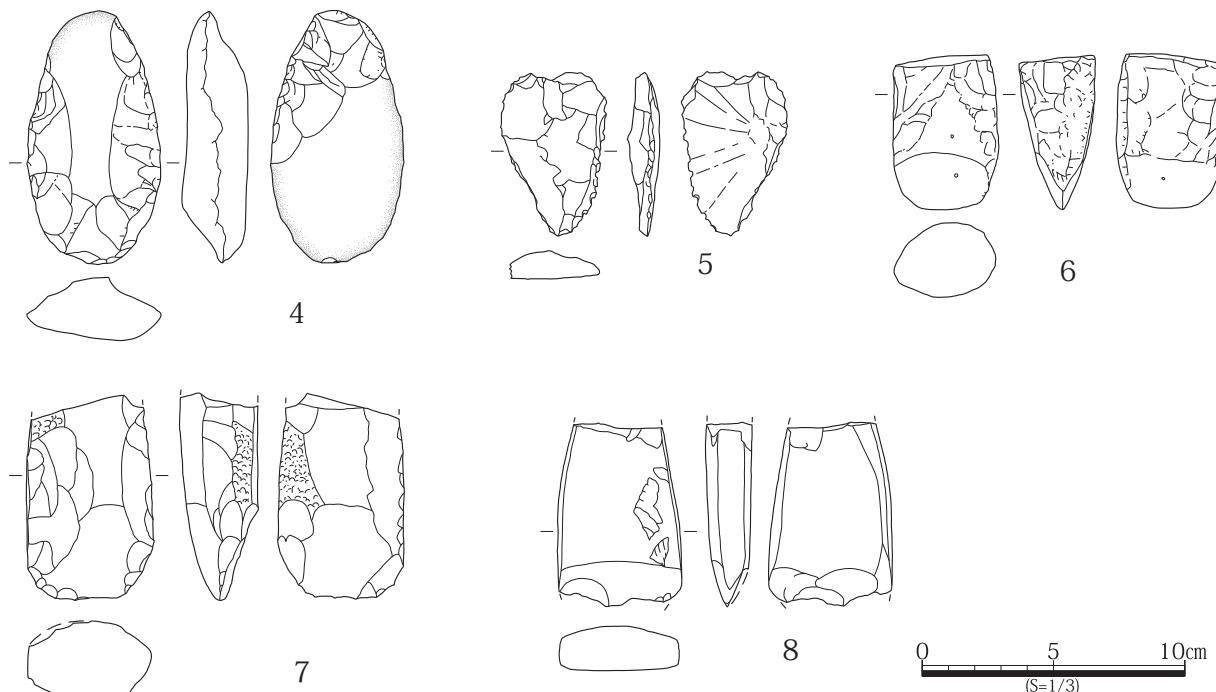
	石鏃	剥片	磨製石斧	打製石斧	板状石器	板状石器用剥片	磨石1類	磨石2類	磨敲石1類	磨敲石2類	敲石	凹石	石皿	砥石	台石	未製品	石剣	棒状石製品	円盤状石製品	総数	石器総数
総数	3	15	3	1	3	11	40	3	26	8	5	1	1	31	3	3	1	1	1	160	134
器種比率	2%	9%	2%	1%	2%	7%	25%	2%	16%	5%	3%	1%	1%	19%	2%	2%	1%	1%	1%		
掲載数	3	0	3	1	1	0	3	2	3	1	1	1	1	2	2	1	1	1	1	28	
掲載比率	100%		100%	100%	33%		8%	67%	12%	13%	20%	100%	100%	6%	67%	33%	100%	100%	100%		

石鏃（第34図） 石鏃3点はいずれも凹基式で、2017-T 4 遺物包含層から出土した2点（1・2）は、平面が正三角形に近く抉りが浅い。1区出土の3は、平面が二等辺三角形で抉りもやや深い。



第34図 出土石鏃

打製石斧（第35図） 2019-T 2の4層から出土した4は、片面加工によって全体形を短冊形に作り出す。円基、偏刃。

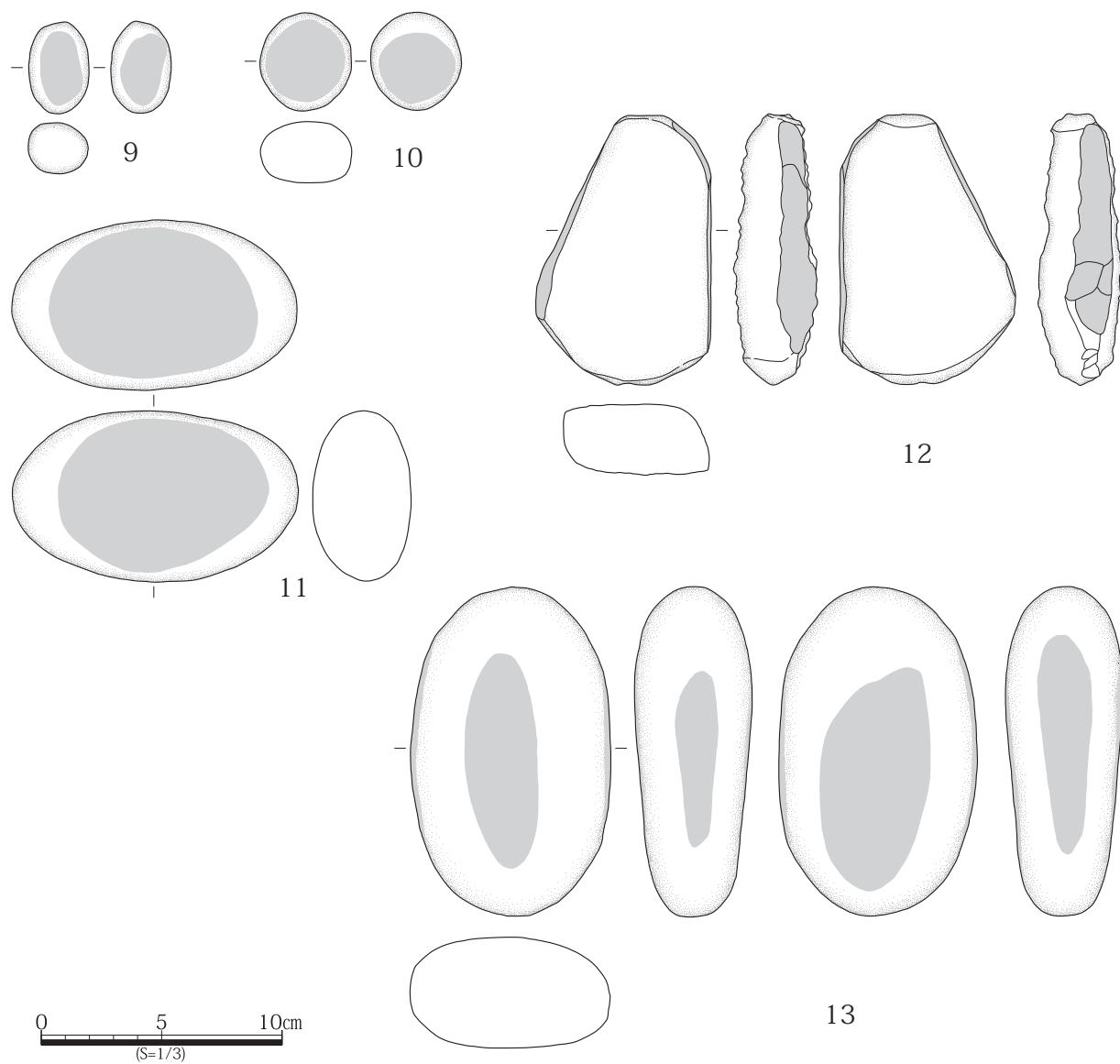


第35図 出土打製石斧・板状石器・磨製石斧

板状石器（第35図） 2017-T 3遺物包含層出土の5は平面形が三角形で、右側縁に鋸歯状の刃部を作り出す。

磨製石斧（第35図） 磨製石斧3点のうち、3区から出土した2点は基部を欠き、刃部を部分的に欠損する。包含層3出土の7は右側面に敲打痕を残す。7はやや厚く、包含層4出土の8はやや薄い。2019-T 1の4層から出土した6は、基部欠損後再加工する。

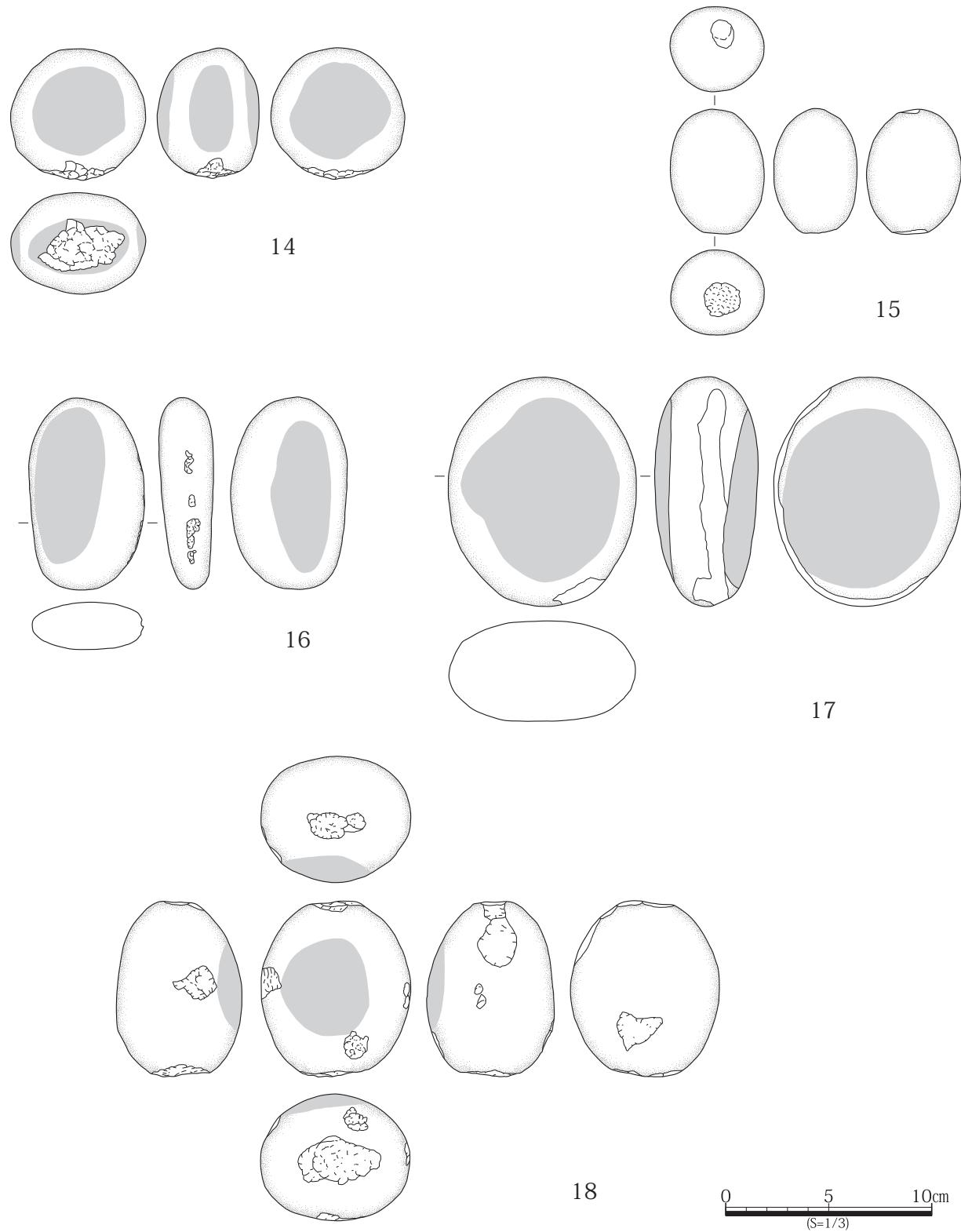
磨石（第36図） 円礫ないし亜角礫の広い曲面ないし狭い側面に磨面を有する石器を磨石とし、使用面の範囲が広い曲面にみられる1類と側面に集中する2類がある。1類は、9・10が小型の、11が大型の磨石で、10・11は3区包含層3から、9は2017-T 4遺物包含層から出土した。10は平面が円形、9・11は橢円形、断面は9が円形、9・10が橢円形で、自然礫の全面を磨面として使用し、特に上下両面の使用が顕著で光沢を有する。2類は、12が亜角礫、13が円礫を用いており、12が2017-T 1表土、13が3区包含層4から出土した。12は左右両側面を磨面、13は上下両面を磨面、左右両側面に磨・敲打面として使用する。磨石2類は縄文時代前期から中期初頭に限定的な「特殊磨



第36図 出土磨石

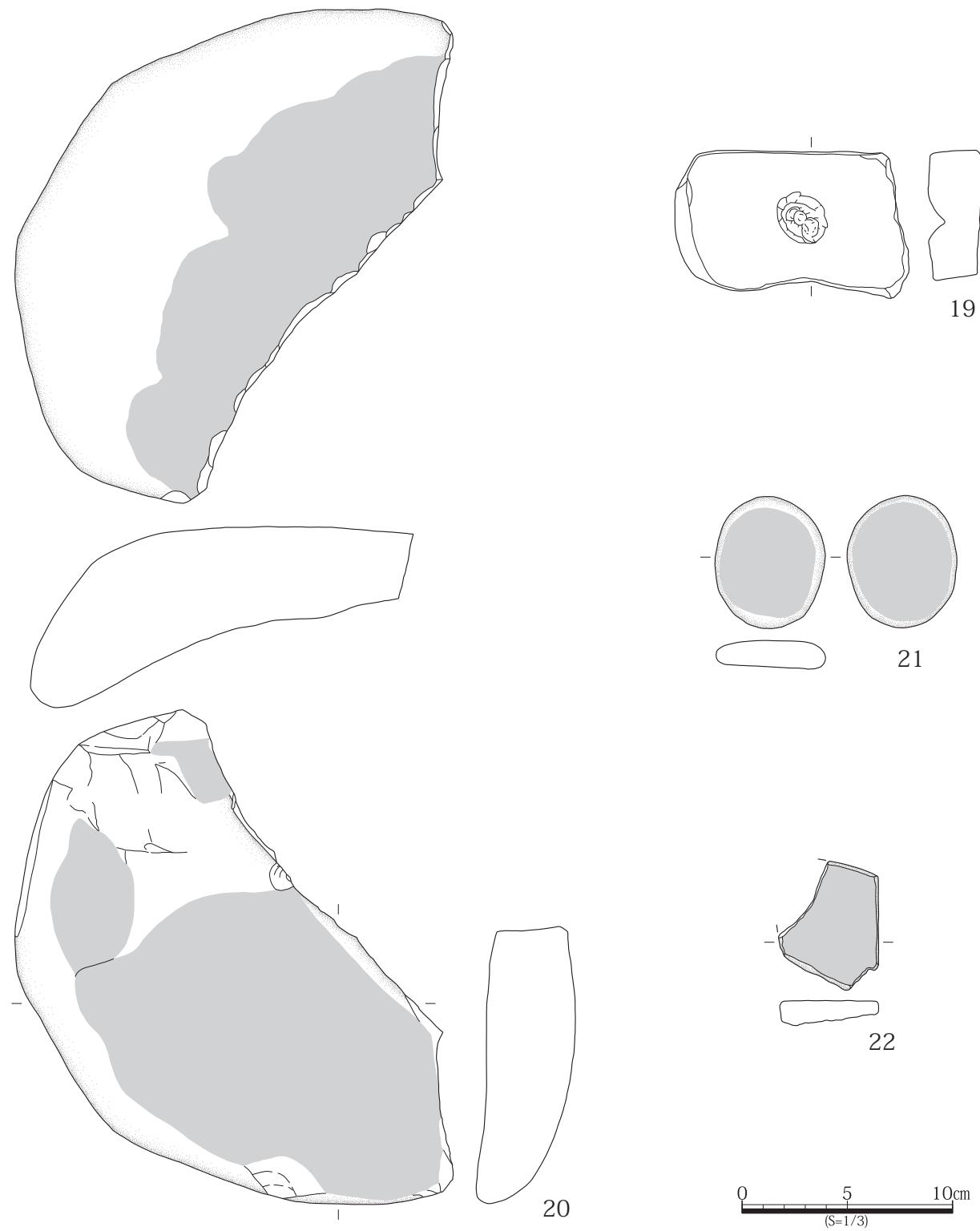
石」で、岩手県和賀郡湯田町峠山牧場Ⅰ遺跡敲磨器B類（岩手県 2000a）、宮城県栗原市嘉倉貝塚礫石器Ⅷ類（宮城県 2003）の系譜につながる石器である。

敲石（第37図） 3区包含層4から出土した。平面円形、断面橢円形の円礫の下端部に敲打痕を残し、上下両面・側面の摩滅が著しい（握った際の痕跡か）。



第37図 出土敲石・磨敲石

磨敲石（第37図） 磨石以外にも副次的に敲石とし使用された1類と、敲石以外にも副次的に磨石とし使用された2類に大別した。15は小型の、16は中型の、17は大型の1類で、いずれも平面が橢円形、断面は15が円形、16・17が扁平な橢円形で、15は自然礫の全面を磨面として使用し、上下両端部を磨・敲打面として使用する。16・17は上下両面を磨面として使用し、16は右側面に

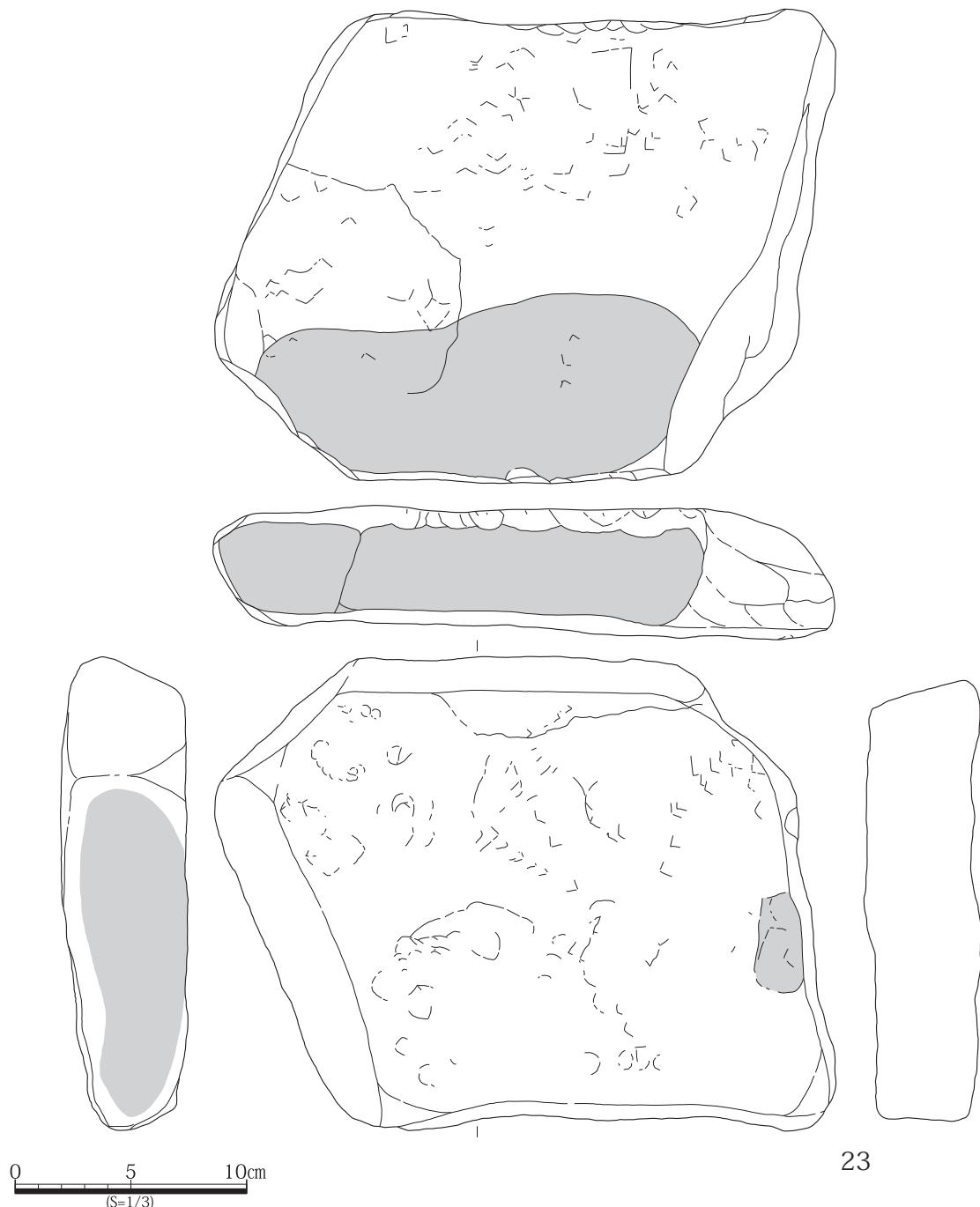


第38図 出土凹石・石皿・砥石

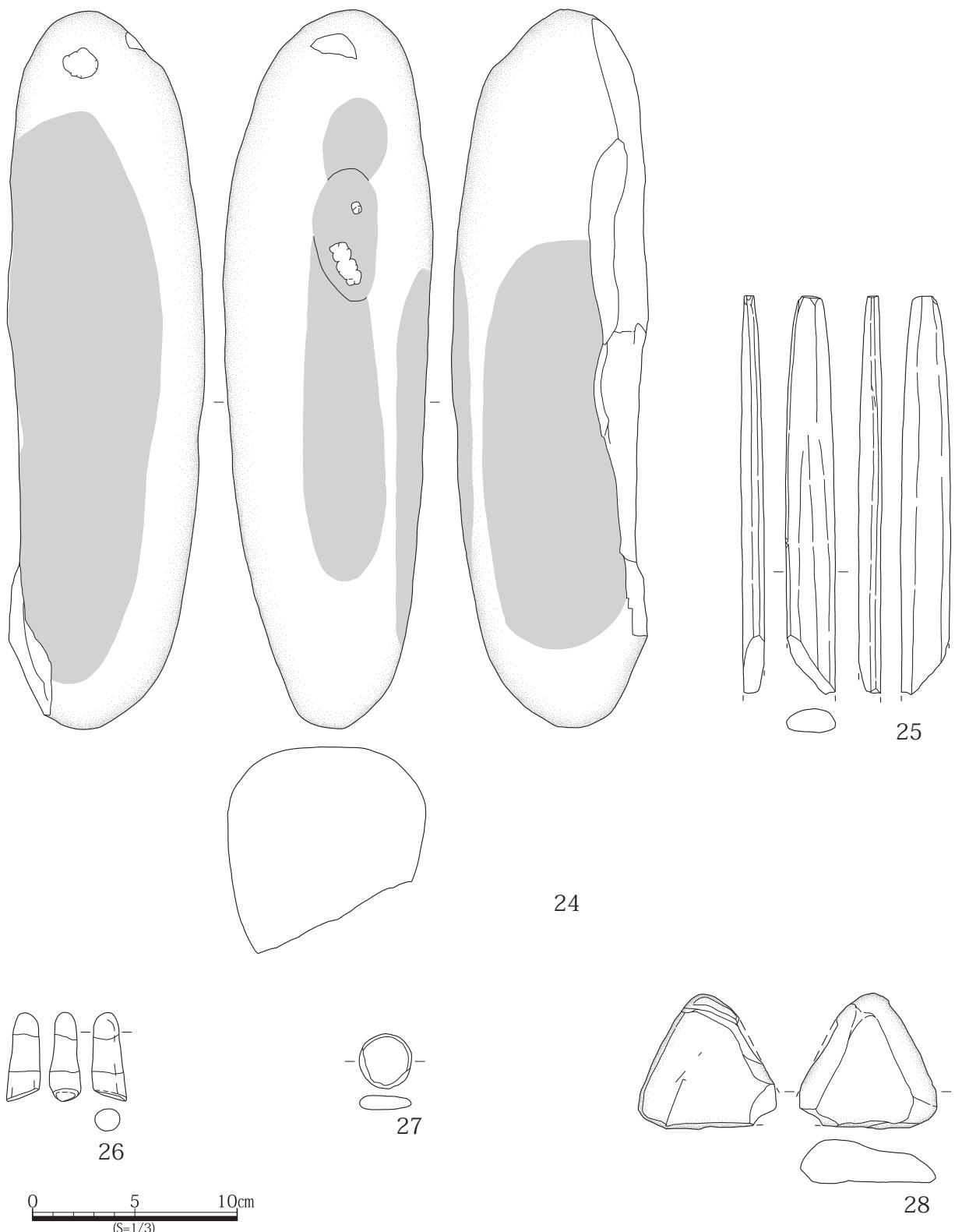
敲打痕を残し、17は右側面と下端部を磨・敲打面として使用する。18は平面・断面が橢円形の自然礫の全面に磨面と敲打痕を残し、特に上面の磨面と上下両端の敲打痕が顕著である。16は2017-T8遺物包含層、15・18が3区包含層3、17が同包含層4から出土した。

凹石（第38図）19は平面が長方形、断面が扁平な長方形の割石の上面中央が直径2.5cm、深さ0.8cmほど窪み、凹面が摩滅する。1区包含層2から出土した。

石皿（第38図）20は約半分を欠損する。上面の湾曲する凹面と下面の凸面に磨面がみられる。1区包含層2から出土した。



第39図 出土台石 (1)



第40図 出土台石(2)、石製品その他

砥石(第38図) 使用面が平坦な扁平な小型の砥石で、22は角礫の上面、21は円礫の上下両面を磨面として使用する。22は3区サブトレ遺物包含層、21は2017-T11遺物包含層から出土した。

台石(第39・40図) 24は棒状の断面隅丸三角形、23は扁平な方形の台石で、各面に磨面を有し、

部分的に敲打痕を残す。24は3区包含層4、23はSI1石囲炉から出土した。

石製品その他（第40図） 石製品には石剣、棒状石製品、円盤状石製品、未製品等がある。25は先端部欠損する。表面は丸みを帯び、裏面は比較的平らである。前面に加工整形時の斜め・縦方向の擦痕が顕著に残る。3区包含層4から出土した。26は棒状石製品で、棒状の円礫を全体に研磨し、特に両端部を丁寧に研磨する。2017-T8遺物包含層から出土した。27は円盤状石製品で、扁平な円礫を全体に粗く研磨し、側縁を丁寧に研磨する。2017-T7遺物包含層から出土した。28は平面三角形の板状に整形した軽石で、上面はわずかに丸みを帯び、下面是平らである。左側面と左隅を一部欠損する。未穿孔であるが浮子の未製品と考えられる。2017-T4遺物包含層から出土した。

石材（第8表） 石材同定については、『田柄貝塚』の報告においても、珪質頁岩と珪化凝灰岩との区別が鏡下においても難しいとの指摘がある（宮城県 1986）。石材の同定は、図鑑類（益富壽之助 1955・1987、白尾元理・松原聰・千葉とし子・高桑祐司 2010）と波怒棄館遺跡の整理委託資料を参考に肉眼により同定した。

遺跡周辺の石材分布は、遺跡の立地する丘陵先端の基盤は粘板岩と粘板岩の風化土で、粘板岩の露頭は海岸の崖面でも見ることができる。「宮城県の地質」（大槻・永広・布原 2014）によれば、中生界中部～上部ジュラ系の地層として、砂岩と泥岩の分布が報告されている。産総研地質図ナビ（<https://gbank.gsj.jp/geonavi/>）20万分の1地質図幅（一関）によれば、調査地周辺の海岸部には中生代前期三畳紀～後期三畳紀の泥岩、その東方に同砂岩、対岸の舞根には中生代ジュラ紀の砂岩、泥岩が分布する。また、同ナビ5万分の1地質図幅（気仙沼）によれば、調査地周辺は砂岩、砂質粘板岩と粘板岩の細互層および珪質粘板岩、砂岩の帶状互層が分布する。海岸部から山間部にかけて古生代ペルム紀の泥岩（粘板岩）、山間部に中生代三畳紀の砂岩、中生代ジュラ紀の砂岩・泥岩（砂質粘板岩・粘板岩の細互層および珪質粘板岩）、広田湾の対岸に中生代前期白亜紀花崗岩が分布する。

石器と石材との関係 石鎌や剥片石器の剥片は珪質頁岩が多く、黒色頁岩も少數含まれる。板状石器や板状石器用剥片は粘板岩である。磨石、磨敲石は砂岩と閃綠岩が多く、凝灰岩、安山岩が続く。砥石は砂岩が多く、粘板岩が続く。

第7表 石器観察表

図No	区	出土地点	器種	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	石材	特徴	残存状態
1	A	2017-T4 包含層	石鏃	1.46	1.3	0.43	0.6	黒色頁岩	凹基、抉り浅い。側縁直線的。身部正三角形状。	完形
2	A	2017-T4 包含層	石鏃	1.81	1.49	0.36	0.7	珪質頁岩	凹基、抉り浅い。側縁直線的。身部正三角形状。	完形
3	A	1区	石鏃	3.15	1.46	0.345	[1.3]	珪質頁岩	凹基、抉りやや深い。側縁直線的。身部二等辺三角形状。	左側縁の一部を欠く
4	C	2019-T2 4層	打製石斧	10.01	5.28	2.63	169.7	砂岩	円基、偏刃。上面は刃部を中心に基部側面まで加工。下面是基端部を中心に基部側面まで加工する。刃部・基部磨滅。	完形
5	A	2017-T3 包含層	板状石器	[6.51]	4.13	1.26	[32.0]	粘板岩	右側面に鋸歯状の刃部を作り出す、片面加工	先端を欠く
6	C	2019-T1 4層	磨製石斧	6.13	4.2	3.00	106.4	砂岩	両刃。基部欠損後研磨。基部欠損部を敲打後に研磨する。	完形
7	B	3区包含層 3	磨製石斧	[8.17]	[5.12]	[3.02]	[180.2]	砂岩	斧身を研磨により整形。下面刃部欠損後に研磨か。刃部左側が縦に剥離後、左側面研磨。	基部と左右両側縁を欠く
8	B	3区包含層 4	磨製石斧	[7.28]	[4.83]	[1.985]	[126.4]	安山岩	斧身を研磨により整形。両刃。上面は丸みを帯び、下面是やや平ら。	刃部の一部と基部を欠く
9	A	2017-T4 包含層	磨石 1類	3.99	2.61	2.26	34.4	閃緑岩	平面が楕円形、断面が円形の円盤の全面を磨面として使用。特に上下両面の使用が顕著で、光沢面を有する。	完形
10	B	3区包含層 3	磨石 1類	4.26	3.955	2.81	72.2	砂岩	平面が円形、断面が楕円形の円盤の全面を磨面として使用。特に上下両面の使用が顕著で、光沢面を有する。	完形
11	B	3区包含層 3	磨石 1類	12.36	7.36	4.245	615	閃緑岩	平面が楕円形、断面が扁平な楕円形の円盤の全面を磨面として使用。特に上下両面の使用が顕著で、光沢面を有する。	完形
12	A	2017-T1 表土	磨石 2類	11.645	7.62	3.44	455	ホルンフェルス	平面が舌状、断面が扁平な楕円形の円盤の左右両側面を磨面として使用。	完形
13	B	3区包含層 4	磨石 2類	14.28	8.70	5.11	975	閃緑岩	平面が楕円形、断面が扁平な楕円形の円盤の上下両面に磨面、左右両側面を磨面と敲打面として使用。	完形
14	B	3区包含層 4	敲石	6.63	6.84	5.17	325	安山岩	平面が円形、断面が楕円形の円盤の下端部に敲打痕を残す。上下両面、側面は握った痕跡のためか磨滅が著しく、特に上面の磨滅が顕著で、光沢面を有する。	完形
15	B	3区包含層 3	磨敲石 1類	6.34	4.81	4.20	191.2	砂岩	平面が楕円形、断面が円形の円盤の上下両端部に敲打・磨面、その他全面に磨面がみられる。	完形
16	A	2017-T8 包含層	磨敲石 1類	9.73	5.87	2.715	355.0	砂岩	平面が楕円形、断面が扁平な楕円形の円盤の上下両面に磨面、右側面に敲打痕を有する。	完形
17	B	3区包含層 4	磨敲石 1類	11.54	9.525	5.18	825	砂岩	平面が楕円形、断面が扁平な楕円形の円盤の上下両面に磨面、右側面から下端部にかけて敲打・磨面を有する。	完形
18	B	3区包含層 3	磨敲石 2類	8.84	7.55	6.42	635	閃緑岩	平面・断面が楕円形の円盤の全面に敲打痕と磨面があり、特に上下両端に敲打痕、上面に顕著な磨面（光沢面）を有する。	完形
19	A	1区包含層 2	凹石	11.52	7.08	2.635	380	砂岩	平面長方形、断面扁平な長方形の割石上面中央が直径 2.5 cm、深さ 1.8 cmほど窪む。窪みは摩滅する。	完形
20	A	1区包含層 2	石皿	[21.7]	[24.55]	[7.15]	[3830]	砂岩	上面の凹面と下面の凸面に磨面がみられる。	約 1/2 を欠く
21	A	2017-T11 包含層	砥石	6.545	5.46	1.37	82.6	砂岩	平面が円形、断面が扁平な楕円形の円盤の上下両面に磨面として使用。	完形
22	B	3区サブトレ包含層	砥石	[6.30]	[4.95]	[1.23]	[46.9]	凝灰岩か	平面が方形、断面が扁平な角盤片の下面を磨面として使用。	一部を欠く
23	A	1区 SI1 石匂炉	台石	27.8	21.3	5.7	5400	砂岩	扁平な方形の礫の上下両面、右側面、上端面を台石として使用する。上面のほぼ前面に敲打痕が散在する。磨面とともに使用されたためか深い敲打痕が部分的に残る。右側面は磨面とし使用され光沢を有する。下面も全面を磨面として使用し、特に左側の使用が顕著で、敲打痕は右側に散在する。	完形
24	B	3区包含層 4	台石	36.6	[1046]	[10.32]	[5835]	砂岩	棒状の断面丸丸三角形の円盤の各面に磨面を有し、部分的に敲打痕を残す。	一部を欠く
25	B	3区包含層 4	石剣	[20.25]	[2.425]	[1.15]	[95.1]	ホルンフェルス	表面は丸みを帯び、裏面は平ら、斜め・縦方向の擦痕顕著	基部を欠く
26	A	2017-T8 包含層	棒状石製品	4.505	1.66	1.565	16.3	ホルンフェルス	棒状円盤の全体を研磨し、両端部を丁寧に研磨する	完形
27	A	2017-T7 包含層	円盤状石製品	2.815	2.67	0.71	7.3	ホルンフェルス	扁平な円盤の全体を粗く研磨し、側縁を丁寧に研磨する	完形
28	A	2017-T4 包含層	未製品	6.9	[7.0]	2.28	[5835]	軽石	平面三角形の板状に整形した石材。表面が丸みを帯び、裏面は平滑。未穿孔であるが、浮子の未製品と推測できる。	一部を欠く

第8表 石器石材一覧

石材	石鏹	剥片	磨製 石斧	打製 石斧	板状 石器	板状石 器用剥 片	磨石 1類	磨石 2類	磨敲石 1類	磨敲石 2類	敲石	凹石	石皿	砥石	台石	石劍	棒状 石製品	円盤状 石製品	未製品	計
珪質頁岩	2	14																		16
黑色頁岩	1	1																		2
頁岩							1													1
流紋岩							1													1
粘板岩				2	11	1								9					1	24
砂岩		2	1				10	1	11	3	1	1	1	16	3					50
凝灰岩							6			1				5						12
泥岩							1													1
丸アソツ								1	2					1		1	1	1		8
安山岩			1		1		6		5	1	3									17
花崗岩																				0
閃綠岩							15	1	8	2	1									27
軽石																			1	1
計	3	15	3	1	3	11	41	3	26	7	5	1	1	31	3	1	1	1	3	160

(4) 動物遺存体（第9～11表）

分析資料

動物遺存体は、2017-T 3、2017-T12、2区、3区、2019-T 1～3から出土した。3区の出土資料は遺物包含層が再堆積した可能性がある。残りの出土資料も大半が確認調査の資料である。本来であれば、業務委託等により詳細な調査を実施すべきところではあるが、上記のように必ずしも良好な資料とはいえない。

対象資料は、包含層等の目視による現場採集資料（2017-T 3・4 遺物包含層、3区遺物包含層、2019-T 1・2 遺物包含層、2017-T12 攪乱）と土壤採取資料（2019-T 3 混土貝層、0.2m 四方・深さ 0.45m・0.018m³）、（2017-T 3 貝層、0.0045m³）である。資料の大半が確認調査によるものであり、土器が伴出しないため時期を特定できないものもある。また、出土土器の検討から3区遺物包含層は再堆積の可能性があるため、動物遺存体の評価も限定的にならざるを得ない。以上、資料分析の重要性と必要経費等とを勘案し、動物遺存体について下記参考図書をもとに同定を実施した。

池田等 2017、岩手県 2020、東北歴史資料館 1987、松井章 2006、陸前高田市 2001。

分析方法

土壤採集資料は4mm・1mm篩目を使用し、水洗選別によりマガキ、マガキ以外の二枚貝、腹足綱・節足動物、骨類、その他に大別した。抽出されたのは、軟体動物門腹足綱・二枚貝綱、陸産貝類、節足動物門甲殻類、棘皮動物門ウニ綱、脊椎動物門軟骨魚綱・硬骨魚綱・爬虫綱・鳥綱・哺乳綱である。

腹足綱は原則として殻頂部の残存するもの、種によっては殻口部が残存するもの、二枚貝綱は原則として殻頂部の残存するものを同定し計上した。魚類・鳥類・哺乳類・爬虫類は残存率が高く部位の判別容易なものを抽出して同定し、計上した。節足動物・棘皮動物は細片ほぼ全てを抽出して同定し、計量した。計量したフジツボ類 30.2g、ウニ類 4.4g、合計 34.6g と、貝類 3,244 点、魚類 358 点、爬虫類 11 点、鳥類 23 点、哺乳類 50 点、合計 3,686 点を同定した。

抽出した試料の 98% が土壤サンプル試料である。同定できた試料の 83% が貝類である。貝類の

同定（29分類群）では、アサリが最も多く、ムラサキインコ、マガキ、クボガイ、スガイ、クチバガイ、エガイ、オニアサリが次ぐ。陸産貝類のパツラマイマイとキセルガイ科も篩目1mm試料に一定量みることができる。フジツボ類ではチシマフジツボが多く出土し、ウニ類も出土した。ムラサキインコは大半が幼貝で、マガキも少数ではあるが幼貝を含む。生態的には、潮間帯から水深10mまでの砂泥底にアサリ、潮間帯の岩礁にムラサキインコ、マガキ、クボガイ、潮間帯の岩礁・転石にスガイが棲息する。

第9表 貝類・フジツボ類・ウニ類集計表

種名	A地区			C地区			総計	生息域	
	2017-T3 包含層	2017-T3 貝層		2019-T1 2層	2019-T2 2層	2019-T3 混土貝層			
	目視	フルイ 4mm	フルイ 1mm	目視	目視	フルイ 4mm			
	大木 8b・9式	不明				大木 10式			
二枚貝綱	エガイ属					左19 右26	右2	左19 右28	潮間帯から水深20m位までの岩礁
	イガイ科					左5 右6	左1 右2	左6 右8	潮間帯から水深20m位までの岩礁
	ムラサキインコ		右1			左5	左184 右161	左189 右162	潮間帯の岩礁
	アズマニシキ					左11 右11		左11 右11	浅海の岩礁
	マガキ	左1 右2	左1	右1	右2	左101 右109	左5 右3	左108 右117	潮間帯の岩礁
	ミルクイ			左1				左1	浅海の砂泥底
	クチバガイ	左1 右2				左22 右26	左2 右1	左25 右29	潮間帯の礫間
	オニアサリ		左8 右7			左10 右15	左1 右3	左19 右25	潮間帯の礫間・砂泥
	カガミガイ					左2 右2		左2 右2	潮間帯下より50mまでの細砂底
	アサリ	左1 右1	左16 右13	左7 右4		左886 右883	左45 右49	左955 右950	潮間帯から水深10mまでの砂泥底
	ウチムラサキ	右2	左1 右2		左3 右2	左16 右11		左20 右17	浅海の砂泥底
	オオノガイ					左1 右2		左1 右2	内海の潮間帯の泥底
総計		左3 右7	左26 右22	左7 右5	左4 右3	右2	左1078 右1091	左238 右221	2707
腹足綱	ユキノカサガイ科					9	38	47	潮間帯の岩礁
	クボガイ					40	79	119	潮間帯の岩礁
	コシダカガンドラ					3		3	潮間帯の岩礁
	イシダタミ					20	10	30	潮間帯の岩礁の間
	ニシキウズガイ科						3	3	潮間帯の岩礁・転石
	スガイ	1				73	7	81	
	蓋(スガイ?)		1			108	40	149	岩礁
	タマキビ科					9	2	11	
	ミニガイ科						1	1	
	タマガイ科						2	2	潮間帯下の岩礁
	チジミボラ?					4		4	潮間帯の岩礁
	レイシガイ					4		4	潮間帯の岩礁
	イボニシ			1		14		15	浅海の砂泥底
	アカニシ?					1		1	
	アッキガイ科					5		5	潮間帯から水深20m位までの岩礁・転石
節足動物	オオヘビガイ				1	1	1	3	
	パツラマイマイ		24				13	37	陸生
	キセルガイ科		1				21	22	陸生
総計		1	1	25	2		291	217	537
棘皮動物	チシマフジツボ					15.2g	13.6g	28.8g	潮間帯の岩礁
	フジツボ亜目					1.2g	0.2g	1.4g	潮間帯の岩礁
棘皮動物	ウニ綱			0.1g 未満		1.0g	3.4g	4.4g	潮間帯の岩礁
総計				0.1g 未満		17.4g	17.2g	34.6g	

第10表 魚類集計表

種名	A 地区			B 地区	C 地区		総計	
	2017-T3 包含層		2017-T3 貝層	3 区包含層	2019-T3 混土貝層			
	目視	フライ 4mm	フライ 1mm	目視	フライ 4mm	フライ 1mm		
大木 8b・9式	不明			大木 8a～十腰内 2式	大木 10式			
エイ目	椎骨		3				3	
ニシン	椎骨					7	7	
マアナゴ	歯骨					右 1		
	腹椎				1			
	椎骨					22	24	
ウルメイワシ	腹椎		6			16	22	
カタクチイワシ	腹椎		25			34		
	尾椎					6	65	
カサゴ目	方骨				右 1		1	
フサカサゴ科	椎骨				1	4	5	
メバル属	後側頭骨				左 1			
	椎骨				1		2	
アジ科	腹椎		5			24		
	尾椎					1	30	
マダイ	主上顎骨				左 1		1	
ウミタナゴ属	下咽頭骨					1		
	腹椎				5			
	尾椎					11	17	
アイナメ属	主上顎骨				右 1			
	腹椎				2	10		
	尾椎		1				14	
マサバ	前上顎骨					左 1・右 1	2	
サバ属	腹椎		10		2	18	30	
マグロ属	肩甲骨				1			
	腹椎			3	3			
	椎骨	2					9	
カレイ科	椎骨				1	2	3	
魚類	主上顎骨				左 2			
	前上顎骨		右 3		左 1	右 2		
	後側頭骨					左 1		
	方骨				左 1	左 1・右 1		
	背鰭棘	1	1		1	10		
	腹鰭棘		1					
	椎骨		28		1	60		
	尾部棒状骨					6		
	歯					2	123	
総計		2	4	80	3	27	242	358

魚類の同定(16分類群)では、カタクチイワシが最も多く、サバ属、アジ科、マアナゴ、ウルメイワシ、ウミタナゴ科、アイナメ科が次ぐ。椎骨は、カタクチイワシ、アジ科、アイナメ科、ウルメイワシが1mm篩目に、マアナゴ、サバ属、ウミタナゴ科は一部が4mmの篩目に、マグロ属が4mm篩目に残った。出土した魚の主体は、沿岸を回遊または海底に棲息する小形のもので、大形魚にはマグロ属が一定量みられた。

爬虫類ではヘビ科を同定した。鳥類は科・属を特定できなかった。哺乳類は、ニホンジカ、イノシシ、ネズミ亜科、ハタネズミ亜科の4分類群を同定したが量は少ない。

第11表 爬虫類・鳥類・哺乳類集計表

種名	A地区				B地区			C地区		総計
	2017-T3 包含層	2017-T3 貝層	2区 包含層	2017-T4 包含層	3区 包含層3	3区 包含層	2017-T12 再堆積層	2019-T3 混土貝層		
	目視	目視	目視	目視	目視	目視	目視	フライ4mm	フライ1mm	
大木8b・9式				大木8b～ 十腰内1式	大木8a～ 十腰内2式	不明	大木10式			
ヘビ科	椎骨							10	1	11
鳥類	四肢骨							4	12	
	残欠	6			1					23
ハタネズミ亜科	上顎骨							1		1
ネズミ亜科	下顎骨							1	右？1	2
ニホンジカ	大腿骨				左1					
	上腕骨				左1					
	肩甲骨				右1					
	脛骨					左1※				
	距骨						右1			
	下顎切歯				左1					
イノシシ	角				1	1				8
	上腕骨	右1								
	距骨						右1			
中小哺乳動物	踵骨									3
	桡骨							1		1
	腰椎		1							
大型哺乳動物	肩甲骨				1	1				
哺乳類	残欠				1	20	1	9		35
総計	6	1	1	1	4	26	3	28	14	84
							※遺位に 解体痕あり			

小結

2019-T3混土貝層の土壤採集試料から、縄文時代中期末頃の食生活では貝類が多く利用されていたことが判る。貝類の多くが潮間帯の岩礁から礫間、浅海の砂泥底に棲息するものであり、遺跡周辺の磯浜が採集地であったと推測できる。また、魚類は沿岸を回遊ないし海底に棲む小形のものを主体に漁が行われたと推測できる。

第4章 まとめ

A地区では、2017-T 4からは大木8b式を主体に大木9式、2017-T 3と2区からは大木9式を主体に大木8b式土器が、2017-T 3貝層から貝類を主体とする動物遺存体が、1区SI 1・10・SK 9の各遺構及び調査区から大木9式土器が出土した。以上から、A地区では2017-T 4及び2区付近が縄文時代中期中葉から中期後葉にかけて、1区付近が縄文時代中期後葉を中心とする時期に生活域であったと推測できる。

B地区となる3区の遺物包含層は、包含層2から大木8b・9式、その下の包含層3・4から大木9式・縄文時代中期後葉を主体に十腰内1式・後期前葉～中葉におさまる土器が出土した。このような出土状況から、包含層2～4は再堆積したと考えるのが自然である。B地区の遺物包含層は再堆積ではあるものの、大木8a式から十腰内1式までの土器が出土しており、B地区が少なくとも縄文時代中期中葉から後期前葉までの生活域であったと推測できる。

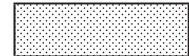
C地区的調査は小規模であるため、大木9・10式の土器が少量出土したにとどまる。2019-T 3の混土貝層には、縄文時代中期末頃には、遺跡周辺の磯浜で採集した貝類や沿岸で採取した魚を多く食していた痕跡が残されていた。

第12表 各地点の時期

地区	調査地点	出土土器型式				
		大木8a	大木8b	大木9	大木10	門前・十腰内1・2
A	2017-T 4					
	2017-T 3 2区					
	1区			SI1		
				SI10		
				SK9		
B	3区					
C	2018-T 3 2019-T 1～3					
時期		中期中葉		中期後葉	中期末葉	後期前葉



… 土器多



… 土器少

<本書の引用・参考文献一覧>

本文では、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターは岩手県、南方町史編纂委員会教育委員会は南方町、各県・市教育委員会は県・市名と省略。

東正雄 1982 『原色日本陸産貝類図鑑』 保育社

尼岡邦夫・仲谷一宏 1983 「魚類」『図鑑北日本の魚と海藻』 北日本海洋センター

池田等 2017 『大人のフィールド図鑑 原寸で楽しむ美しい貝 図鑑&採集ガイド』 実業之日本社

石巻市教育委員会 2018 『中沢遺跡』 石巻市文化財調査報告書第 14 集

稻村晃嗣 2008 「門前式土器」『縦観縄文土器』

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2000 『峠山牧場 I 遺跡 B 地区発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 320 集

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2000 『長倉 I 遺跡発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 336 集

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2002 『清水遺跡発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 382 集

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2017 『襞帶遺跡発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 662 集

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2018 『浜川目沢田 I 遺跡発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 689 集

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2020 『長谷堂貝塚発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 719 集

大塚徳郎・竹内利美 1987 『宮城県の地名』 日本歴史地名大系 4、平凡社

大槻憲四郎・永広昌之・布原啓史 2014 「宮城県の地質」『最新東北の地質合冊版』 全国地質調査調査業協会連合会 東北地質業協会広報委員会

蒲原稔治・岡村収 1961 『原色日本魚類図鑑改訂版』 保育社

蒲原稔治・岡村収 1961 『続原色日本魚類図鑑』 保育社

興野義一 1984 「大木式土器について」『宮城の研究第 1 卷考古学篇』

気仙沼市教育委員会 2016 『嚮館跡』 気仙沼市文化財調査報告書第 8 集

気仙沼市教育委員会 2017 『気仙沼市震災復興関連遺跡発掘調査報告書 1』 気仙沼市文化財調査報告書第 10 集

気仙沼市教育委員会 2018 『台の下遺跡』 気仙沼市文化財調査報告書第 11 集

気仙沼市教育委員会 2018b 『気仙沼市震災復興関連遺跡発掘調査報告書 2』 気仙沼市文化財調査報告書第 13 集

気仙沼市教育委員会 2019 『気仙沼市内発掘調査報告書 3』 気仙沼市文化財調査報告書第 15 集

気仙沼市教育委員会 2020 『気仙沼市内発掘調査報告書 4』 気仙沼市文化財調査報告書第 19 集

気仙沼市教育委員会 2021 『裏方貝塚 A 貝塚』 気仙沼市文化財調査報告書第 23 集

國井秀紀 2013 「縄文土器底部に見られる網代圧痕の素材検討」『福島県文化財センター白河館研究紀要 2013』

小池一之・田村俊和・鎮西清高・宮城豊彦 2005 『日本の地形 3 東北』 東京大学出版会

佐原眞 1981 「縄文施文法入門」『縄文土器大成 3』 講談社

産業技術総合研究所地質調査総合センター (<https://gbank.gsj.jp/geonavi/geonavi.php>)

白尾元理・松原聰・千葉とし子・高桑祐司 2010 『鉱物・岩石』 新ポケット版 学研の図鑑 7

- 鈴木克彦 2001『北日本の縄文後期土器編年の研究』雄山閣
- 鈴木克彦 2008『宝ヶ峯式・手稻式土器』『総覧縄文土器』
- 鈴木保彦 2000「山内清男縄文講義ノート」『縄文時代 11号』
- 東北歴史資料館 1987『里浜貝塚VI』東北歴史資料館資料集 19
- 東北歴史資料館 1989『宮城県の貝塚』東北歴史資料館資料集 25
- 戸田哲也「縄文」『縄文文化の研究 第5巻 縄文土器III』雄山閣
- 登米市教育委員会 2011『青島貝塚』登米市文化財調査報告書第1集
- 中野幸大 2008「大木7a～8b式土器」『総覧縄文土器』
- 波部忠重・伊藤潔 1965『原色世界貝類図鑑』保育社
- 早瀬亮介 2008「前期大木式土器」『総覧縄文土器』
- 本間宏 2008「南境式・綱取式土器」『総覧縄文土器』
- 益田一・尼岡邦夫・荒賀忠一・上野輝彌・吉野哲夫 1984『日本産魚類大図鑑』東海大学出版会
- 益富壽之助 1955『原色岩石図鑑』保育社
- 益富壽之助 1987『原色岩石図鑑 全改定新版』保育社
- 松井章 2006『動物考古学の手引き』文化財研究所 奈良文化財研究所 埋蔵文化財センター
- 南方町史編纂委員会 1975『宮城県登米郡南方町青島貝塚発掘調査報告書』宮城県南方町
- 宮城県教育委員会 1986『田柄貝塚II 土製品 石器・石製品編』宮城県文化財調査報告書第111集
- 宮城県教育委員会 1998『大梁川・小梁川遺跡』宮城県文化財調査報告書第126集
- 宮城県教育委員会 2003『嘉倉貝塚』宮城県文化財調査報告書第192集
- 宮城県教育委員会 2007『山居遺跡(縄文時代編)ほか』宮城県文化財調査報告書第214集
- 宮城県教育委員会 2019『大久保貝塚ほか』宮城県文化財調査報告書第250集
- 森幸彦 2008「大木9・10式土器」『総覧縄文土器』
- 柳澤清一 1990・1993「大木9・10式土器論(上・下)」『先史考古学研究』第3・4号
- 山内清男 1930「斜行縄文に関する二三の観察」『史前学雑誌』第2巻第3号
- 山内清男 1964『日本原始美術1』講談社
- 陸前高田市教育委員会 1992『門前貝塚』陸前高田市文化財調査報告書第16集
- 陸前高田市教育委員会 1997『堂の前貝塚発掘調査報告書1』陸前高田市文化財調査報告書第18集
- 陸前高田市教育委員会 1999『堂の前貝塚発掘調査報告書II』陸前高田市文化財調査報告書第21集
- 陸前高田市教育委員会 2001『中沢浜貝塚 1997—骨角器・自然遺物編』陸前高田市文化財調査報告書第23集
- 陸前高田市教育委員会 2010『袖野I遺跡』陸前高田市文化財調査報告書第28集
- 陸前高田市教育委員会 2017『中沢遺跡発掘調査報告書』陸前高田市文化財調査報告書第31集
- 陸前高田市教育委員会 2018『堂の前貝塚発掘調査報告書III』陸前高田市文化財調査報告書第32集



藤ヶ浜貝塚遠景（北西から）



2017-T 2・3（東から）



2017-T 3 貝層検出状況（北から）



2017-T 4（西から）



2017-T 7（北から）



2017-T 8（西から）



2017-T 9（東から）



2017-T11（南から）

平成 29 年度確認調査

図版2



1区 全景（北から）



1区 全景（東から）



1区 SI 1 (南から)



1区 SI 1 石窯炉 (南から)



1区 SI10 検出状況（北から）



1区 SK9 (東から)



2区 西半部全景（西から）



2区 東半部全景（東から）

平成29年度本発掘調査1・2区



3区 全景（南から）



3区 東壁 堆積土層（西から）



2018-T 1（西から）



2018-T 2（西から）



2018-T 3（東から）



2019-T 1（南から）



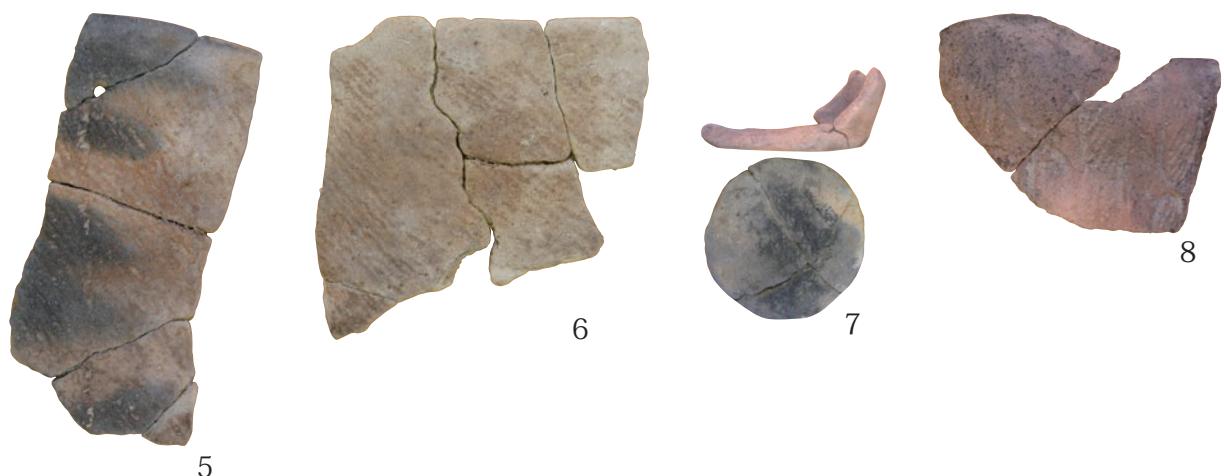
2019-T 2（南から）



2019-T 3（南から）

平成 29 年度本発掘調査 3 区、平成 30 年度・令和元年度確認調査

図版4



出土土器1～15

(S = 1/3)



出土土器 16～30

(S = 1/3)

図版6



出土土器 31～43

(S = 1/3)



出土土器 44～58

(S = 1/3)

図版8



出土土器 59～73

(S = 1/3)



出土土器 74～88

(S = 1/3)

図版 10



出土土器 89～101

(S = 1/3)



出土土器 102～118

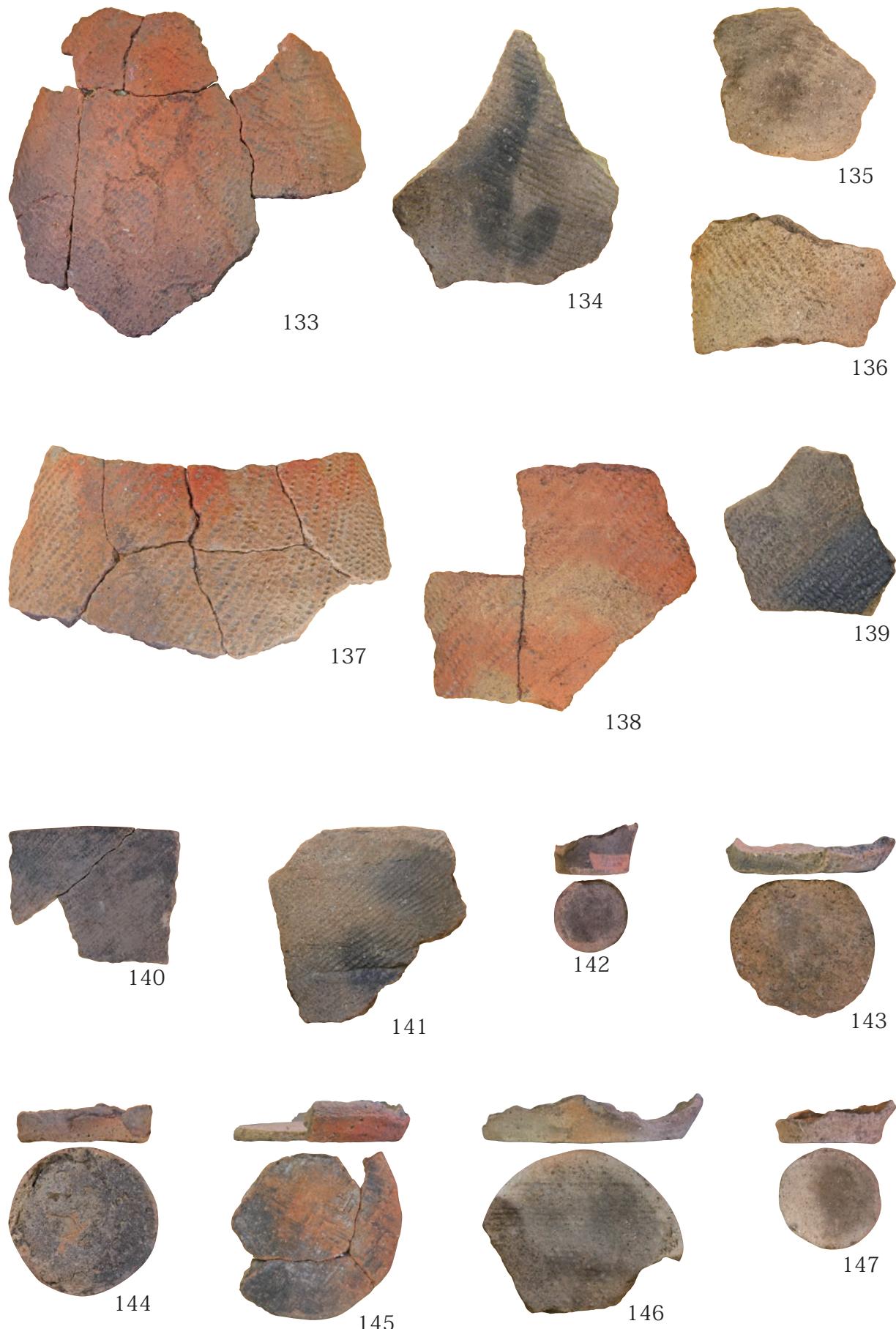
(S = 1/3)

図版 12



出土土器 119～132

(S = 1/3)



出土土器 133～147

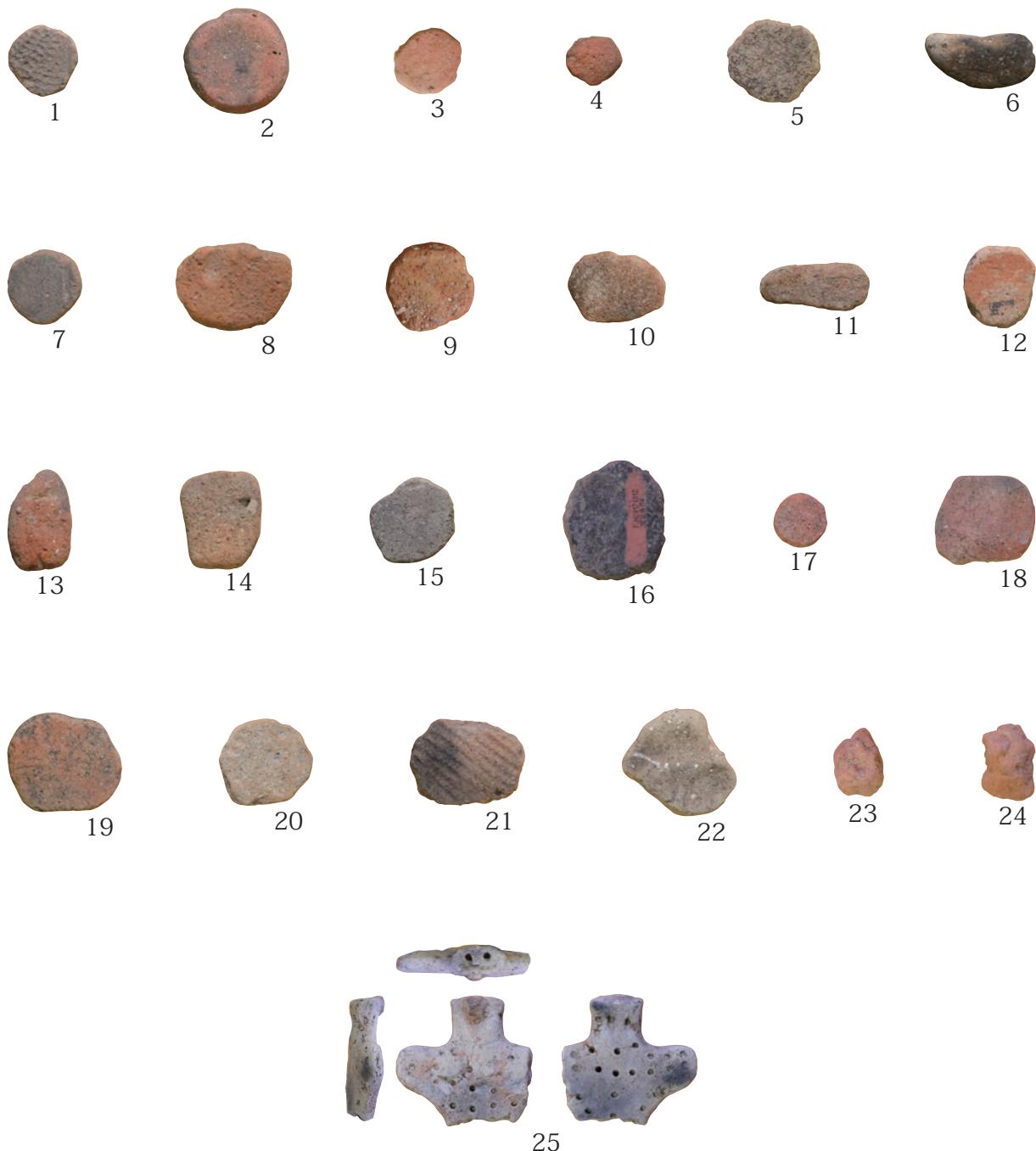
(S = 1/3)

図版 14



出土土器 148～160

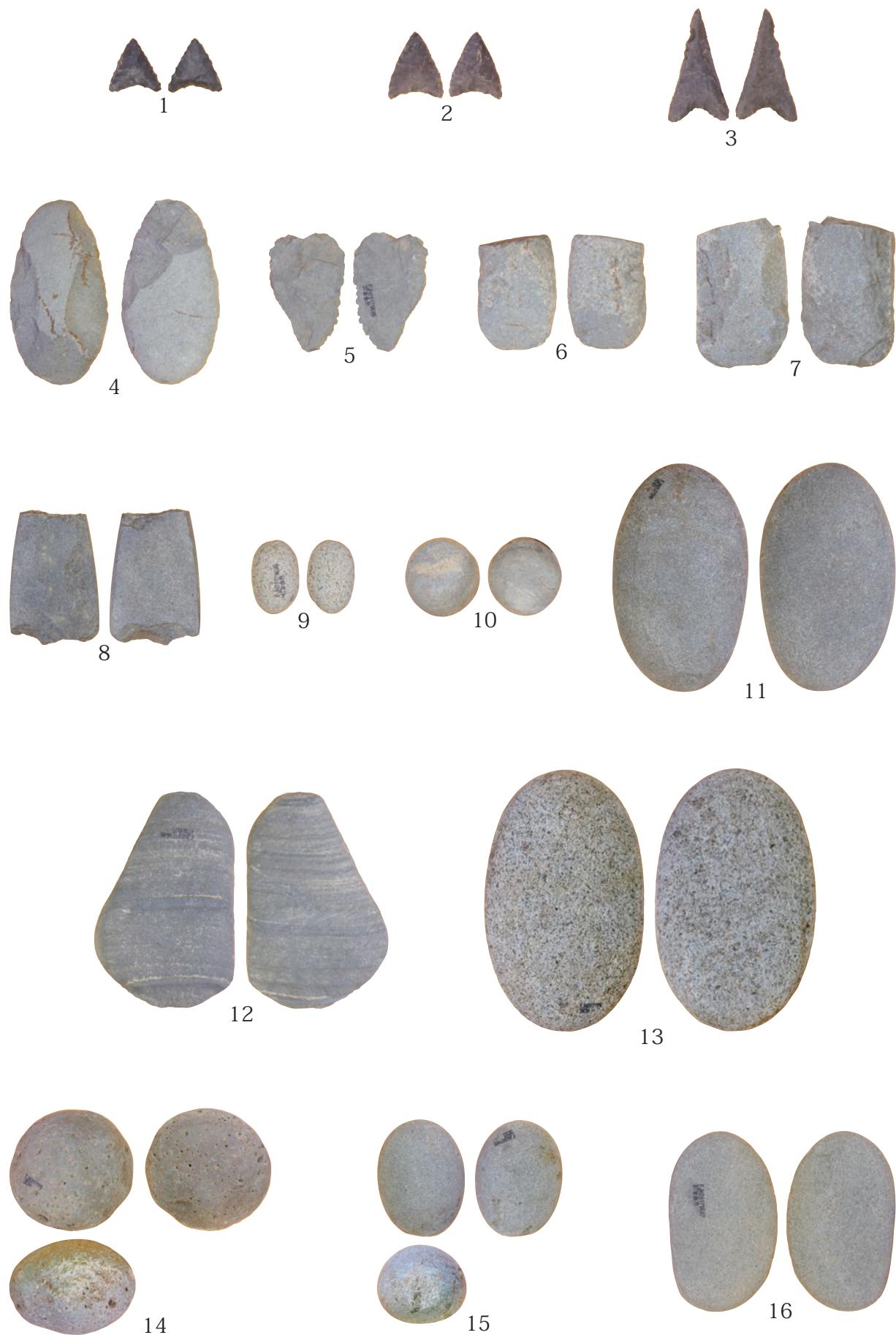
(S = 1/3)



出土土製品 1 ~ 25

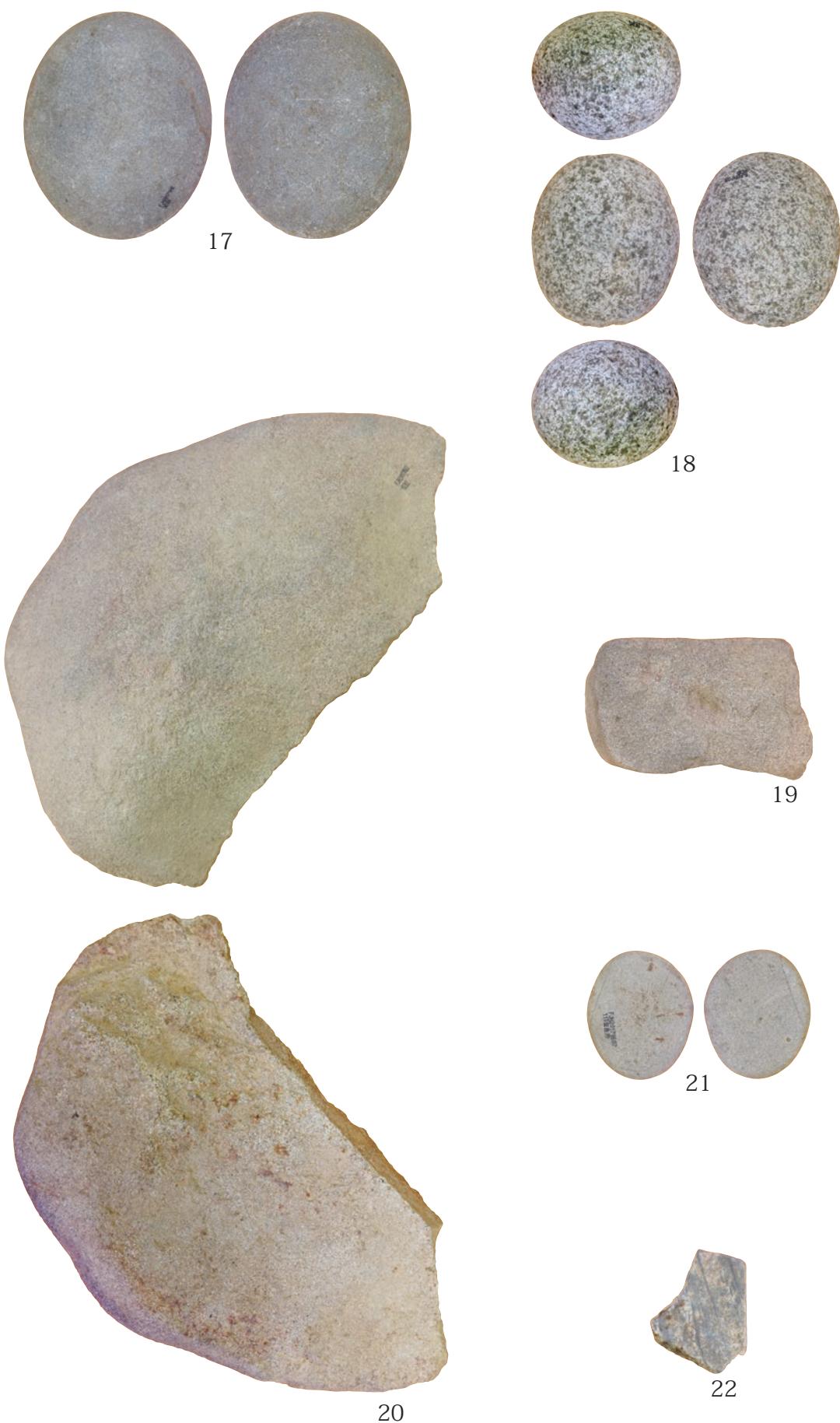
(S = 1/3)

図版 16



出土石器 1～16

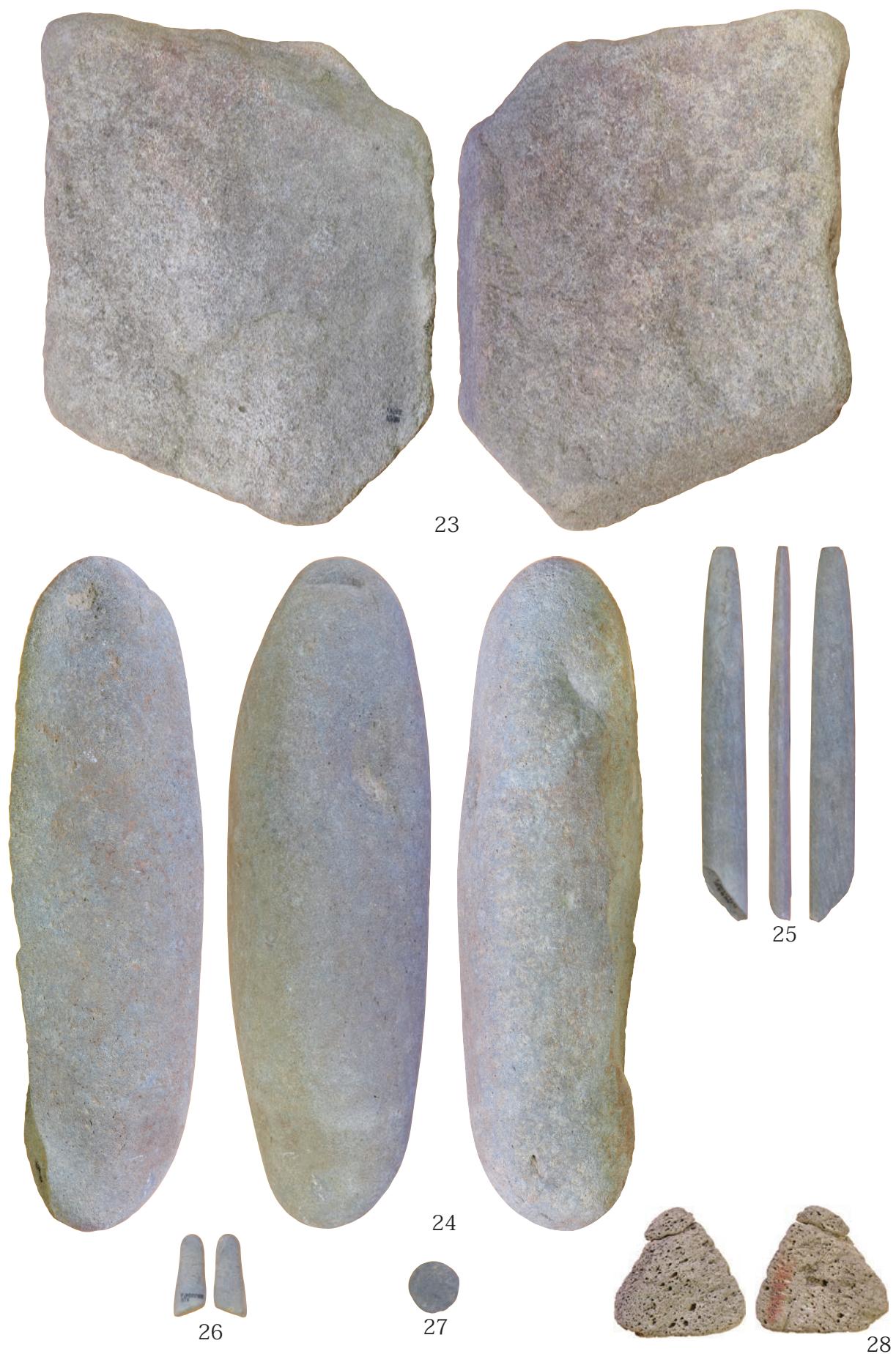
(S = 1/3)



出土石器 17～22

(S = 1/3)

図版 18



出土石器 23～28

(S = 1/3)



- 1 : エガイ R、2 : イガイ L、3 : ムラサキインコ L、4 : アズマニシキ L、5 : マガキ R、6 : ミルクイ L
 7 : クチバガイ R、8 : オニアサリ L、9 : カガミガイ R、10 : アサリ R、11 : ウチムラサキ R
 12 : オオノガイ L、13 : クボガイ、14 : コシダカガンガラ、15 : イシダタミ、16 : スガイ、17 : タマキビ科
 18 : チヂミボラ、19 : レイシガイ、20 : イボニシ、21 : アッキガイ科、22 : オオヘビガイ
 23 : パツラマイマイ、24 : キセルガイ科、25 : チシマフジツボ、26 : フジツボ亜目、27 : ウニ綱
 (1 ~ 22 : S=1/2, 23 ~ 27 : S=1/1)

出土貝類 1 ~ 27

図版 20



1：エイ目椎骨、2：ニシン科椎骨、3：マアナゴ歯骨 R（内面）、4：マアナゴ腹椎、5：マアナゴ椎骨
6：ウルメイワシ腹椎、7：カタクチイワシ腹椎、8：カサゴ目方骨 R、9：フサカサゴ椎骨

10：メバル属後側頭骨 L、11：メバル属椎骨、12：アジ科腹椎、13：マダイ主上顎骨 L

14：ウミタナゴ科下咽頭骨、15：ウミタナゴ科腹椎、16：ウミタナゴ科尾椎、17：アイナメ科主上顎骨 R

18：アイナメ科腹椎、19：マサバ前上顎骨、20：サバ属腹椎、21：マグロ属腹椎

(1～21 : S=1 / 1)

出土貝類・魚骨 1～21



1 : ヘビ科椎骨、2 : 鳥類橈骨、3 : ハタネズミ亜科上顎骨、4 : ネズミ亜科上顎骨 L
 5 : ニホンジカ下顎切歯 L、6 : ニホンジカ肩甲骨 R、7 : ニホンジカ大腿骨 L、8 : ニホンジカ脛骨 L、
 9 : ニホンジカ距骨 R、10 : イノシシ上腕骨 R、11 : イノシシ踵骨 R、12 : イノシシ距骨 R

(1 ~ 4 : S=1 / 1, 5 ~ 12 : S=1 / 2)

出土鳥獸骨 1 ~ 10

気仙沼市文化財調査報告書第25集

藤ヶ浜貝塚

海岸施設災害復旧事業に伴う発掘調査報告書

発行日 2022年1月31日

編集・発行 気仙沼市教育委員会

〒988-8502 宮城県気仙沼市魚市場前1番1号

印 刷 双葉印刷株式会社

〒988-0866 宮城県気仙沼市内松川41番地1号